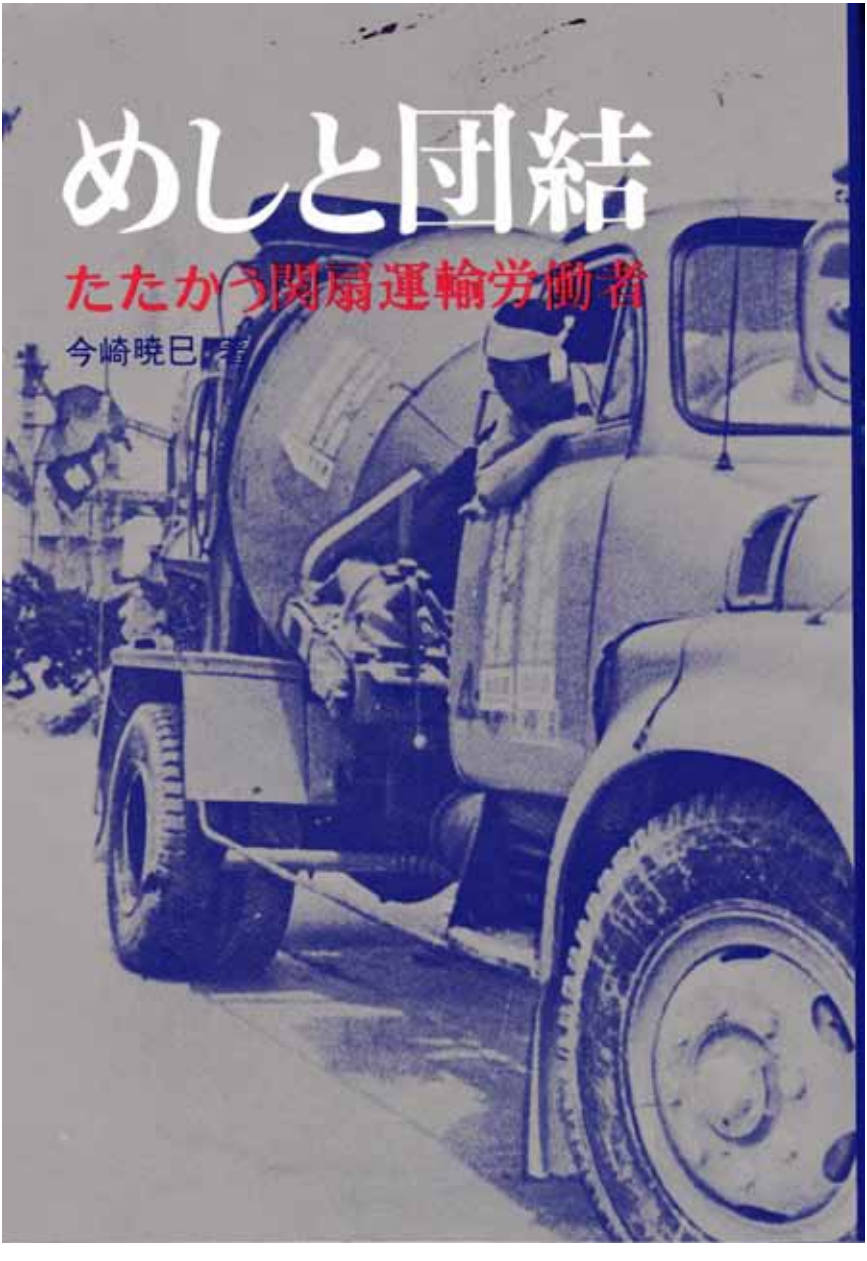
めしと団結

たたかう関扇運輸労働者

今崎暁巳 著



めしと団結

たたかう関扇運輸労働者

今崎暁巳 著

めしと団結

たたかう関扇運輸労働者

今崎暁巳 著

労働旬報社

はしがき

どんな大通り、どんな車の行列の中でも、ひときわ目立って大きい図体で、あたりを見下してまかり通るコンクリート・ミキサー車……そのボディには住友とか小野田とかよく耳にする大独占企業の会社名をつけて堂々と、つっ走っている。

私たちにとって、この巨大な図体と大会社の名前を背負って働く運輸労働者の生活はそれほど身近なものではなかった。

私自身、今度の仕事で全国自動車運輸労働組合（略称全自運）関扇運輸支部の人たちとつきあうようになるまで、ほとんどなにも知らないも同然だった。大独占会社の名前をつけていても、運んでいる車の所属は下請の別会社であることも、たぶん普通よりいいだろうと考えていた賃金は、ひどく悪く、長時間残業でやっと家族を養える状態であることも、初めて聞いて驚いた次第。

セメント一生コンクリート産業といえば、日の沈むことのない独占企業、お気にいりの産業の一つに数えられる。原料はただ同然で、しかも戦争の中でも、破壊からの復興の時期でも、高度経済成長の中でも、建設のあるかぎり、需要がのび続けてきた産業である。

この金の卵を生む商品の運搬をひきうける運輸労働者が情け容赦なく、こきつかわれ、人なみに待遇改善を要求し、活動を始めただけで資本の大ダンビラを振り廻され、組織破壊をやられた。

やられたことを並べると、人員整理、残業ストップ、第二組合づくり、クビキリ、ビラハリ逮捕、破産、他企業による企業再開と項目だけでも大変な数にのぼる。

この関西経営陣の露骨で悪どい労働組合つぶしの攻撃をうけて立った三〇人の男たちは運転以外はかあちゃんにもロクに物のいえなかったサラリーマン運転手たち、そして、半分はヤクザ、バクチ、アル中に競輪気ちがいに創価学会員と、まずは資本家の義理と人情とゼニの攻撃に一番弱く、放浪ぐせの強い、男たちの集団。

こんなに定着性のうすい、団結に縁のなかった運輸労働者たちが、どうして、家族・家畜ぐるみで、五年＝一八五六日の生活の根っ子からのたたかいにたえることが出来たのか、そのことが私の一番大きな関心事だった。

平均年齢三四歳強。若もののバイタリティーだけのたたかいではない。しかも、相手は資本金一〇〇億をこえる日本セメント―アサノコンクリート独占。零細下請企業の親会社・独占の支配に真っ向から立ち向かい、突破口を開く責任をもったたたかいであった。

全自運引間委員長から〝運転手もよめる、面白い記録〟をといわれた言葉を頭にこびりつかせて、仕事をつづけた。

最後に、記録づくりに最初から協力していただいた柳沢明朗氏と飯島君をはじめとする労働旬報社編集部のご好意にお礼を申しのべたい。

一八五六日闘争への序曲……九
分裂前夜――現場にて――敵は何をねらっているのか？――にらみをきかす警察あがりの労務対策

第一章　アカ攻撃で大衆をひきはなせ

1　その夜……二六
孤独の夜――俺たち生コン運送労働者
2　裏切りの季節……三三
深夜の訪問客――第二組合誕生！――会社をやめてお詫びする
3　兵糧ぜめと分裂攻撃と……四二
残業停止―兵糧ぜめでいけ！――創価学会でとどめをさせ
4　嵐にたえて……五二
役所は労働者の学習の場――釜ケ崎の仲間よ、警察は共同の敵だ！
5　〝流れ者〟がワラジをぬぐ時……六七

第二章　警察・労務による首切りと逮捕の攻撃

1　忍ぶ寄る首切りの手……六八
狙われていた元旦のビラはり――「人員整理対策費御融資御願」――九人の首がとんだ！
――首を切られて何を思った？――〝二組は敵やない〟ではたたかえない
2　かちとられた全員黙秘のたたかい……九〇
わいら二人パクってんか！――七人の逮捕――親父ガンバレ！　黙秘でいこう！
――全員釈放の時
3　創価学会ではたたかえん――一組の旗高く……一〇八
学会への疑問――御本尊様！　労働者はどないしたらいいんやろ？

第三章　敵はアサノ独占だ！

1　地労委での勝利と上田社長の自殺……一一八
地労委での勝利―祝賀やろか！――社長、どこへ消えたんや？――その眼がアサノの

空をにらんでた！
2　バクロされた弾圧の全貌……一二〇
ミキサー車仮差押え作戦――明るみに出た分裂・弾圧の全貌
3　アサノ本社へおしかけろ……一四〇
さあたたかいの態勢づくりを！――操業再開の挑発！　アサノ本社へおしかけろ！

第四章　闘いの中でメシ食うんや

1　メシが先かたたかいが先か……一五三
2　生活保護体制をかちとる苦闘のなかで……一六〇
生保闘争は決めたけれど……――家族を説得するなかで――寿命のちぢむ思いや！――
子供のために生保はやめよう？――かすかな曙光―完全プール制でたたかおう
3　地域こそたたかいのとりで……一七六
涙の淀川徹夜作戦――チョンガーも楽じゃない―メシくわせるとこへ行こう
4　最初の家族会――つらいことをぶちまけよう……一八五
男だけにたよらず自分たちの生活をもとう――日本一の組合ゴクドー夫婦になろう

5　淀川乱闘事件――オルグが楽かバイトが楽か……一九〇
6　ついにアサノをひっぱりだした……一九四
　新たなたたかいの出発――一点の灯をみつめる中で
7　大阪争議団の要求をかかげて……二〇〇

第五章　闘えば敵は必ずひきさがる

1　カスメとりから権利へ……二〇六
　三年目の被告の座――ミセス〝ゴッコ〟と相ちゃんの反乱――百花斉放―個性豊かにたたかいぬこう――ぎょうざ屋やろか……
2　地域の労働者とともに……二一九
　南大阪労働者魂に支えられて――全金の仲間との交流――〝ガメツィたたかい〟あれこれ――〝ガメッサ〟＝第一組合旗を守るためにこそ！
3　アサノ独占をふるえあがらせたもの……二三〇
　アサノはもう逃げられない――アサノは何が恐ろしかったか？――全面総攻撃を！
4　かあちゃんがついているんや……二四八

　たたかいは家庭をかえる――母ちゃんが家庭と世の中を変える
5　勝つとはどういうことなんや……二四四

終章　人びとの中へ――三〇粒の種が阪神の大地に

……二五二
　高裁勝利から和解調印へ――酒ぬきで関扇らしい報告集会――構成劇〝関扇の野郎ども〟――新たなたたかいの海原に

一八五六日闘争への序曲

分裂前夜

昭和三九年一〇月のある日――大阪、西成区釜ケ崎に近い津守工場街。このあたりの朝は早い。というより朝もなく夜もなくある人びとは働きつづけ別の連中は遊びつづける。

釜ケ崎三角公園あたりには朝っぱらから車のナンバーをネタにしながらゼニをはっている男たちがいるし、アンコの就労を待つ男女もうずくまっている。釜ケ崎と背中合わせの津守工場街では、金属工場といわず化学工場といわず、急速にふくれ上がる京阪神の生産拡大の一端を担って昼夜兼行の突貫作業が続けられている。まったく、アンバランスで、無秩序な日本の素顔がそこにある。

午前八時――大阪アサノコンクリート津守工場事務所の電話がけたたましく鳴った。業務係が電話をとった。

「あ、どうも、まだ、つきまへんか……もう、とっくに出ましたんですが……はい、はい、もうまもなくつくと思いますから、すみません……八時半から先は運転手がそろいますから、確実に……なんせ、アカい連中がのさばってる組合はあきまへんわ……あ、どうもどうも、おたくには関係ありまへん……ほんとうにもう、つきよりますから、どうも……」

業務係が電話をおくと、係長が言った。

「ほんまに、関扇の連中しゃないな！　さっきから文句の言わればなしやで！　大林組に、地下鉄……せっかく、仕事が増えとる時に……おい！　配車どないなってるか、みてきてくれ！」

業務係はいそいで事務所をでて、津守工場構内右半分を貸している関扇運輸事務所に向かった。一隅に洗車場をもった、コンクリートミキサー車車庫には、出動準備中の七トンミキサー車数十台がずらりと並びエンジン始動中だ。運転手は燃料を満たんにし、車の各所を点検中である。

アサノコンクリート業務係はおうへいな口調で関扇運輸の配車係にいった。

「どうしたんや！　地下鉄現場で三〇分も穴があいたいうて、えらいけん幕や！」

「すまへん……日雇が一人事故起こしたもんでっさかい……たいしたことないんですが、ちょっとこすって、いま、警察にたのんで……」

「こまるなあ、日雇でも組合員でも、そんなものどうでもええけど、アサノのお得意さんに生コンクリートちゃんと届けるのが関扇の仕事でっしゃろ！　昨夜は大林の現場で、日雇運転手が人夫にどつかれたっていうし……」

「どうも、すんまへん……なんせ、組合が早出拒否さえやめてくれたら……」

「そんなこと聞きにきたんやない、組合員をうまいこと働かせるのが関扇の腕の見せどころでっせ！　とにかく今すぐ頼むで！」

「は、はい、必ず、ただいま……」

配車係はペコペコ頭を下げて親会社アサノの業務係を送りだしたものの、今すぐ地下鉄現場へいける車などどこにもないのだ。この朝、組合の早出拒否による日雇運転手のうち一人は事故、一人は急病のため二台穴があいて地下鉄現場の工事を三〇分以上ストップさせてしまったのだ。

八時一五分――そろそろ準備を終わった組合員の車が、つぎつぎに正門前に空に向かってつっ立っているコンクリート・プラントのコンクリート注入口のところへ集まる時間だ。彼らがコンクリートを積んで門を出るのは始業定時＝八時三〇分――それでは、合計一時間、地下鉄作業に迷惑をかけたことになる。しかしこうなれば日勤の組合員に頼むより仕方ないのだ。

「今日も全員、早出拒否だな」後から、労務担当の高森が特徴のあるガラ声で声をかけた。

組合委員長の寺やんこと寺沢と種やんこと田中種夫書記長の車が通っていった。寺やんは高森の相手の裏をさぐるような狡猾な視線とチラッと火花を散らし合いプラントの方へ車を寄せた。

高森はこの年の春、関扇運輸の労働組合対策を任務に雇われた元警察官であった。アサノ本社のある梅田の元曽根崎警察署警備係長吉政が労務課長になったのと前後して、関扇運輸上田社長に懇請されて入社したのだ。

関扇運輸という会社の実態は、日本セメント――アサノコンクリートの直属運送部門であった。営業上の危険負担を別会社の形で負わされ、運転手の労務管理を最大の業務内容とする系列運送会社といった方が早いだろう。セメント企業にかぎらず、大独占企業の製品輸送部門を別企業の形をとらせ、いくつかの業者に競争させる傾向は最近の特徴である。運送業者からみれば、大独占の傘の下で仕事をしたいという熱望がある。その弱味を握って、もっとも嫌な合理化のバネの役割と運転手しめつけの仕事を押しつけられているのが系列運送会社ということなのだ。そこにたどりつくまでに、『アサノコンクリート運送部』『此の花運送生コン運送部門』という二つの会社の経営形態をとってきた。そのあげくに日本セメント独占の立場からみて、もっとも効率よく、労働者をしぼりあげる経営の形が直属別会社・関扇運輸としてつくられ、警察労務担当で荒療治することを考えついたのである。

「おい、高森のヤツ、早くから何事や?」

種やんがコンクリート積みの順番を待ちながら寺やんに言った。

「淀川の第二組合工作は、いよいよほんものや。昨日も比嘉のヤツが五軒も組合員のとこまわって歩きよった」

「ほんまにやるつもりかいな。岩男は明日の職場集会で、徹底的に究明するて言いよっけどなあ」

岩男とは同じアサノコンクリートの淀川工場にある、関扇運輸支部副委員長をしている運転手

のことである。アサノコンクリートは関扇運輸の担当する西成区の津守と東淀川区の淀川工場、そして恩加島運輸の城東工場、神扇運輸の魚崎工場、この四つで阪神地区の生コンクリート生産を行なっていた。このうち全国自動車運輸労働組合（全自運）関扇運輸支部に所属する組合員は津守、淀川両事業所で約一一〇名だった。

関扇運輸経営陣はその頃、吉成―高森警察労務の指導のもと、アサノの指令に従って、第一、第三日曜日だけの公休制と早出作業の指名制実施という合理化案を、組合の意志を無視して一方的に打ち出していた。組合の反対に対して、会社は九月以来早出指名を強行してきたが、組合は全員八時半定時出勤の戦術でたたかっていた。

「出口たち創価学会の連中の動きがおかしいで……くわしいことあとで話すわ……」

元執行委員山中が寺やんにささやいて発車していった。

「淀川では沖縄出身の分裂屋と頼母子講で、津守では創価学会員が……警察内閣はほんまに、エゲツないこと、何でもやりよるで」

種やんが車の上からどなった。その頃、全自運関扇支部では会社の合理化強行に歩調を合わせた組合内の沖縄出身者や創価学会員による反組合活動が頭痛の種だった。

「終わったら緊急執行委員会や」

「よしゃ!」

寺やんの言葉に威勢よく手を振って、種やんは門を右に曲がって地下鉄現場へいそいだ。

現場にて

種やんは地下鉄現場へつくと監督にどなられた。

「何してたんや！　こっちは一時間も人夫遊ばせるんやで！」

こんな仕事の順番にめぐりあったら災難である。アサノ業務係の〝もうでました〟〝もうつきます〟という無責任な電話の返事のために、現場監督の頭には最高に血がのぼっている。とびこんでいく運転手にすべて責任がおしつけられどなられる。監督が頭にくるのは仕事が遅れることより、下請の人夫を遊ばせておくことなのだ。こんな時、うっかり相手を刺激するようなことをいって背中をノコギリでバッサリ切られた運転手もいた。

種やんは要領よく話をそらして下請労働者に声をかけた。

「ほんまに、かなわんなあ、アサノの尻ぬぐいを運転手がひきうけるのは……」

「わしらはゆっくりやってもらった方がええ。ゼニもらえばいいんやから」出稼ぎ労働者らしいおやじがいった。

「おっさん、ええことというでえ！　ほんまや、まあ一服どうやね、わいら同じ労働者やもんなあ……」

種やんは陽気になって、煙草をサービスした。

山中はその頃、田んぼの中の市営住宅工事現場に入る道で四苦八苦していた。何しろ、ズブズブ入ってしまうようなやわらかい土地の上に、四、五枚の道板をつなげて、その上を渡って現場

長時間労働・低賃金反対

へいけというのである。生コンミキサー車で七トン車といえば、車の自重が九トン以上あり、合計一六トンの重量があるのだ。その図体で、しかもバックで道板の上を渡るなどという芸当は、まさに綱渡りみたいなものである。カーブでもして片輪外したらお終わりである。ミキサー車の重心は高いから場合によってはひっくり返って横だおしになってしまう。そうなったら生コンをおろしてクレーン車で起こしてもらうより方法がない。しかも会社は能率をあげるため、運転手の危険を無視して積載制限七トン車二・五㎥（リューベ）をこえ、三～三・五リューベを運ばせようとする。結核で一年半ほど休んでいた山中は、久し振りの〝嫌な仕事〟で頭にきていた。

彼が病気で休養する前、まだアサノコンクリート直属運送部門社員だった頃、当時、職場を

支配していた創価学会ボス中岸班長に〝学会の話はたくさんやで〟と一言いったばかりに、徹底的に〝いやな仕事〟ばかりやらされたことがあった。いい仕事とは、夜半一回走れば徹夜賃金のもらえるような仕事、いやな仕事とは夜半までコトコト走り続け、深夜二時に帰宅させられ、また六時出勤という仕事だ。後で述べるように、当時から、会社は労務管理のために創価学会員を利用していたのだ。

寺やんは同じ頃、ビルの建設現場でヤキモキしていた。ビルの七階に生コンの入ったバケツをひきあげるウインチが故障して、二〇分もなおらないのである。こちらの責任ではないから、いつもなら煙草でも吸っていればいいのだが、会社の動きが風雲急を告げている時、一刻も早く帰り、昼休みに岩男に電話して淀川の情勢を検討しなければならないのだ。そのうえ、バケツからこぼれた生コンがミキサー車の車体を汚してくれたし、時間がたって、生コンが固まってしまったらおおごとなのだ。生コンはすぐ固まる性質を考えて、工場から現場まで、車で往復一時間、おろす時間を含めて九〇分から二時間の範囲の運搬を標準としている。

小野田・住友・秩父と並ぶ大手セメント独占会社＝日本セメントは、この生コンの特性を考えて、大阪アサノコンクリートに、まず大阪中央に近い津守と北部に位置する淀川に工場をつくらせた。昭和三一年頃にはわずか、数基しかなかった生コンプラントが、高度経済成長政策の波にのりわずか四、五年の間に各セメント独占会社の手で、つぎつぎに京阪神各地に建設されていき、それにつれて各工場ごとの生コンを運搬する生コン運輸労働者が急速に増加してきたのである。

寺やんは故障がなおり最後の一滴をバケツにいれ終わると、急いで帰途についた。

敵は何をねらっているのか？

その日、日勤終了後、残業までの一時間の夕食時間を利用して、仮眠室で執行部は情勢を検討した。寺やん、種やんに、副委員長の田中秀やん、執行委員の山副の四人に、淀川執行部を代表して副委員長岩男が加わった。

「比嘉たちが、相当はっきりした話で、口説いてまわってることは間違いない。会社に出てこんで、セドリックのりまわして、個別訪問やってるんやから。あれは、会社公認やな。淀川の藤崎所長だけやない、吉政―高森の直接指導に違いない。とにかく、沖縄以外の組合員を片っぱしからまわってるんや」

岩男は興奮して、淀川での会社おかかえの分裂策動の実情を報告した。それまで、組合がつかんだところでは、比嘉は沖縄出身者には、本土の差別をあおり総評全自運＝アカの宣伝で、反組合ムードをつくるのに走りまわっているということだった。秀やんがきいた。

「話の中味はどんなことといってるんや」

「うん……それが、直接にはなかなか聞かれんのやけど、毛利がきいたところでは、とにかくアカ攻撃や。今の組合は会社つぶすことしか考えとらん。指名制まで反対して、会社を怒らせとる。もっと話し合うとこは話しあって協力すれば、ゼニも余計でるんやというようなことを

……ゼニの額までいったというてるから、あるいは、ほんまに、ゼニでつって組合割るのかもしれん……」

「大沢や藤原はあかんけど、岩男は仲間にいれられるちゅうとるそうやで、野球部のやつらの話では……」種やんが言った。

「そうらしいわ、人をほんまに馬鹿にしおって！」

淀川の反組合グループとは、沖縄出身の比嘉が、一年くらい前、関扇運輸株式会社がアサノの関連企業として、六五〇万の資本金で発足して以来、意識的に沖縄出身者を運転手として入社させ、二〇名ほどの集団をつくったことをさしている。その間、組合員その他からの紹介運転手は一人も採用していない。この比嘉は元、沖縄の交通労組の第二組合づくりをやった前歴の持主である。会社側は意識的にこの男を利用し、沖縄出身者の同郷意識とバクチの借金をからませ、切るに切れない関係をつくらせてしまった。比嘉と知名という、数日前の役員選挙で組合執行部にもぐりこんだ二人が胴元になって、初めは敗けてやり、深みに入ったとこで、スッテンテンにしぼりあげる悪どいやり方を使っていた。

「そやけど、沖縄だけでは動けんやろ?」山副がいった。

「野球部があぶないねん」

「創価学会はどうや」

「淀川では、学会はたいしたことないで」

岩男が答えると、種やんがすかさず言った。

「岩ちゃん、元創価学会員いうことで、狙われたんとちゃうか? ゼニと上役に弱いと……」

種やんにからかわれて、岩男はまっ赤になって怒った。岩男は、組合に入った昭和三六年頃、一時学会に入信していたことがあったのだ。その時、仮眠室の中を出口がのぞいた。

「あかん！ 場所かえよう」

みんな、組合事務所に場所を移した。アサノからかりた木造二階建のボロ屋に、会社事務所と、労働者の寄場、仮眠室、風呂、組合事務所がごたごたと並んでいた。

出口という男は、津守の創価学会グループのボスだった。とにかく、アサノ運送部時代から、この職場は常に創価学会とは深い因縁があった。山中がいじめられた中岸という班長をはじめ、全自運関扇支部の組合活動がきちんと行なわれるようになるまでの職場は、すべて学会員職制の思うままにされていた。

種やんが組合活動に勢心になったのはこの出口のおかげのようなものである。種やんはそれまでは、競輪と酒が何より好きで、組合活動など屁でもなかったが、出口たちの折伏攻勢が頭にきて、奴らのへりくつに負けんほんまもののりくつはないかと浪速労働学校へ行きだしたのがそもそもの活動の始まりである。種やんの学会退治のための唯物弁証法の勉強中にこんなことがあった。ある時、出口が得意顔でぶっていた。

「台風がきても、学会員の家だけはよけて通るし、火事にもあわん」種やんがまんできずに

いった。
「ウソや！　この前、学会員のアパートが燃えてしもうたで！」
「いや、いや、家は燃えたけど家財道具は助かったで！　すべてこれ信心する者の生命力……生命こそすべて」
種やんがまたかみついた。
「生命て何や？　お前見たんか？」
「御本尊さまを信じない者の魂は虚空をさまよって……」
「魂？　魂、お前みたんか？　どうなんや？」
「お前見たんか？」の連発に恐れをなして逃げだした出口の前に、種やんはミキサー車をとめていった。
「出口、学会員は車にもひかれんいうなら、何で逃げるんや。あまりデマいうたらあかんで！人間は車がきたらよけるから助かるんや！　病気になったら、薬のんで養生するから助かるんや！　アホいうなよ！」それ以来、出口は種やんをみると、コソコソ逃げだすようになった。
「そやけどなあ、沖縄にしろ、学会にしろ、労働組合ぬけるようなことはせんでえ！　損するやないか！　組合におるから、二〇〇時間の残業時間が一一〇時間制限にまでなったんやで」
山副が言った。

「うん……常識からいえば、そうや。今、組合のっとり、とくに、淀川の組織を握ろうと工作してることはたしかや」秀やんが答えた。
「問題は、吉政たち、会社の考えてることやで！　問答無用で、合理化強行しよった。こっちが早出拒否しても、頑強に指名を続けてる。こんな態度は始めてやで！」寺やんがゆっくりとしゃべった。
「ほんまやなあ……警察内閣、何をたくらんどるんやろ……向こうの出方みるより、しゃないなあ……岩男、淀川の動き気をつけんとあかんで！」種やんの言葉に岩男はうなずいた。

にらみをきかす警察あがりの労務対策

その頃、関扇事務所で経営側が顔をそろえていた。上田社長が心配そうに言った。
「組合側、なかなか強硬やで！　今のままで早出残業に臨時つかってたら、どうにもならんで。アサノに運賃値上げ認めてもらうにも、このままではあかん」
「社長、これくらいの抵抗は計算ずみですで。アサノにしてもそのへんの事情は分かってます。運賃値上げて融資の条件にもちだした二点――合理化の実施と人員整理、その実行期間を半年としているのも、一筋縄でいく組合やないこと知ってるからでっせ」
吉政労務課長が言った。親会社アサノとの折衝はその頃すでにこの男の任務になってきていた。支配人の植野と業務部長の国野は役職では吉政より上であるが、アサノの信頼はあまりなかった。

アサノコンクリートの藤田総務部長は、関扇運輸が今まで経営合理化もすすまず、総評全自運関扇支部を関西生コン共闘会議の中心勢力になるほどのさばらせたのは、彼ら重役陣の無能力によると考えていた。その交替要員として、吉政—高森の警察あがりを送りこみ、切れ味ある労務管理体制確立を望んだのである。

「幹部の闘争主義に対する批判が広がってることはたしかです。淀川では大沢・藤原はかたすぎるということで、浮いてきてますしな。早出指名を受けさせる方向に組合全体をひっぱることも、可能性ありますで」元炭労三菱で組合分裂屋だった藤崎淀川所長がいった。

「津守は執行部が固めとって、なかなか難しいですな」津守・山口所長がいった。

「問題は一握りのアカを浮かせることです。ただし、今の若い連中を動かそうと思うたら、手ぶらではあきまへん。昔はアカといっただけで効果ありましたが、今の若い連中は、アカとシロとどっちが、もうかりまっかと、きますからな」高森はズルそうな笑いを浮かべてた。

「分かってる、分かってる、活動資金の約束はもうアサノとついてるさかい、とにかく労務の方はわしは分からんさかい、なにぶん頼んますで。わしは運送屋で、労働組合なんかさっぱりやからな……ほな、わし、アサノ本社で中川社長に会うてきますわ」

社長は植野、国野と一緒に、あたふたと出ていった。

三人が出て行ったあと、吉政は黙って労務ノートを開いた。そこには、全自運関扇支部組合員

一一〇名全員の名前が書きつらねてあり、その名前を、○△□でかこんであった。○—良心分子、△—中間分子、□—思想性強しとなっている。津守組合員六七名中、思想性強しとなっているのは寺やん、秀やん、種やん、山副、山中、紙谷、宮脇である。淀川については○が四○人に近い。

高森が藤崎にきいた。

「比嘉からなんか連絡ありましたか?」

「あとで、至急あいたいからと……」

「今、大事な時だし、噂もいろいろ広がってるようだから、慎重に行動するように言って下さい」

淀川に帰る藤崎に吉政が言った。そして、警察時代、犯人逮捕の時うけたという頬の傷に笑みをうかべ、道路ごしにみえる日本セメント大阪工場の建物をみつめていた。

第一章　アカ攻撃で大衆をひきはなせ

1　その夜

孤独の夜

ひさしぶりに気持いい秋の夜だった。バイ煙にくすむ、南大阪の工場地帯でも、夕焼けの朱の色が、一瞬人びとに人生の色彩を思い出させ、より強く刹那的な幸福への願いを発散させたい欲望を目覚めさせる。

労働者はまわりくどいことを好まない。悲しみや怒りから一刻も早く逃れたい衝動だけではない。喜び、楽しみの求め方もまた同じである。単刀直入ズバッと効果のすぐあがることに熱中する。それはよそめには、まったく刹那的であり、破壊的にさえ感じられる。

熱中する対象は、西成・津守工場付近でも開店している競輪のノミ屋であり、港か労働者街にしかみえない、立飲み一杯売り専門の酒屋、そして時には、釜ケ崎三角公園の土の上で開帳されるバクチの場合もある。女にしても同じである。時には岩男のように、キャバレーの女に気をもたせ泣かせる遊びをした若者もいる。だが、どちらかといえば立飲み屋か、釜ケ崎あたりの大衆酒場で二、三杯キュッとひっかけて、手続きぬきでそのものズバリの女を愛する。従って、バーとかキャバレーとか、口や手で面倒臭いプロセスを踏み、しかもガッポリふんだくられるおままごとなど、お呼びでない労働者が多い。といってみんなそんな女の抱き方が最上だと思っている

わけではない。もっと落着いて、うるおいのある生活がしてみたいと空しい行為のあとに考える。だが、その時はすでにま夜中の建設現場へ向かうハンドルを握っている時だ。時速五〇、六〇でぶっとばし、トンボ返りして、一晩に三、四回も現場と工場を往復する。基本給二万そこそこで、月一〇〇時間以上、超勤徹夜しなければ家族が養えないようにできているのが運転手の賃金体系。二日続きの徹夜も少なくない。しかも運転手の仕事の宿命は助手でもつかない限り孤独と疲労との絶え間ないかっとうである。疲れきった足を前に押しだすエネルギーは一杯の酒、そして送ってくれた酒場の女の一つの微笑、誰がいったい、この身体の内からつきあげる人間らしさへの欲求を責めることができるか！

「ニャロメ！　くっつくな！」

と、イチャイチャ、ノロノロ、彼らの生命をかけた孤独の職場に迷いこむ、スポーツカーのいいご身分の若者たちに、大声あげる心境を誰が責めることができよう。しかも、たいがい、彼らがイタズラをするときは仲間のいる時。一人では、陽気にどなって発散させるより不気嫌にアクセル踏みこんで、スピードをあげるしかほかにおもしろくない世の中に抵抗する方法はないのである。

その夜、チョンガーの寺やんと、女房もちで長い闘病生活から復帰したばかりの山中、そして関脇最古参の一人山副の三人は、ひさしぶりに、行きつけのホルモン焼き屋で、豚の骨をしゃぶり昔を思いだしていた。

、俺たち生コン運送労働者

獣の臓物を焼く熱と、酒をカンする蒸気と、労働者の汗と油とダミ声――店の中は人いきれと騒音で、憩いの場というより、エネルギー発散と疲労回復のための戦場と呼ぶ方がふさわしい雰囲気だった。

「おい、気をつけえよ、西成署の刑事(デカ)やで」

寺やんが山中をつついた。結核療養で長く西成を離れていた山中にも見覚えのある顔だった。この辺は労働者、浮浪者の町であるとともに、サツの町でもあった。釜ケ崎暴動以来、常に五〇〇人の機動隊が常駐し、多くの警備公安警察官が私服で街をうろついていた。

「しばらく離れとる間に、ほんまに変わってしもうたなあ」山中がつぶやくようにいった。

「近頃、警察が時々、会社にきよるけど……何しにきよるんやろ！」寺やんと眼があうと刑事はスッと店をでていった。

会社はいったい、警察をつかって何をやろうとしているのか？　会社の労働者に対する態度が急速に変わったことは事実だ。口を開けば赤字や、合理化や、予備軍は何ぼでもいるんやと、ことごとに労働者を脅迫し、労働者に責任を押しつけようとする態度が言葉のはしはしに口にでる。

「アサノに入った頃は、ほんまに、ひどいもんやったなあ！」山中が昔を思いだすように言った。

昭和三一年からの数年間――軌道にのり始めた日本独占資本の生産復興が、神武景気から池田内閣の高度経済成長政策へとつながっていった中で生コン需要は工場、ビル、道路建設に従って

うなぎ登りに増え、労働者は文字通り寝食を忘れて働き続けた。セメント、生コン産業はまことにボロイ商売である。何しろ、セメント原材料・石灰石はほとんど無尽蔵に日本の山に埋まっている。ただ崩して、簡単な加工して、現地工場で袋につめて運びさえすればいいのである。しかも、セメント独占は生コンクリート会社には、セメントを市価で売りつける。資本金百数十億、従業員五〇〇〇、全国に系列アサノコンクリート各社をもつ日本セメント独占の利潤の秘密はここにある。生コン会社は会社で、また、ガッポリもうかるようになっている巨大な生コンプラントに、パイプでセメントとバラスと砂を運びあげ、注文の固さに混ぜ合わせればそれで終わりである。この単純工程を昭和四二年頃からはコントロール室でテレビに状況をうつしながら、一人の作業員がボタン一つで操作できるように合理化した。そうなれば後は、建設、工事現場に運ぶ、運転手とミキサー車があれば、万事OKという次第。

こう見てくると、少なくとも生コンクリート生産・販売にとって、最も労働力を必要とし、労務管理を集中しなければならないのは、運送部門ということになるのである。いかに、運送関係の人件費コストを下げるかが、生コン経営者の最大の関心事であり、前述の経営形態の変化もその思惑からでたものだ。

一方、労働者は伝統ある〝アサノセメント〟の名前をもらった会社に入社して、やがて、日本セメントの正式社員になれるという期待と上役たちの、今に君たちの賃金も親会社のそれと同じにする、アサノの社員というだけで嫁さんははいてすてるほどある……という甘言を信じてどんな

無理な超過労働にも応じてきた。「俺も二五〇時間超勤で、トップ賞とったこともあったなあ……」山副がなつかしそうに言った。

〝運転手は流れ者や、いろんな仕事をかわった末に、みんなたどりつく仕事や〟という山副も、やはりみんなと同じように、日本セメント・大阪アサノの「名声と将来の安定」を唯一の希望として入社してきていた。昭和三二年の基本給は何と、七〇〇〇円――これは昭和三二年頃でも高校卒の初任給だった。これが高校卒の年齢から順調にいっても、六年の経験と腕を磨き、最低二三、四歳にならなければ有資格者になれない大学院マスターコースなみの大型二種免許運転手の給料なのだ。

労働者も、運送業者も日本セメント・アサノの名声にひかれて集まる。〝タクシーは運転手が乗車拒否し、トラックは荷主が積荷拒否する〟といわれるほど、運送業者は乱立し、競争する。そして業者はコストダウンのしわよせを労働者の低賃金によって切りぬけようとする。

三二年一二月の組合員細川ことおいやん（一説によると、しゃべることが嫌いで運転手となり、ぎりぎり返事しなければならない時に、おいとだけいうから、このアダ名がついたという）の給料明細書には次のように記載されている。

「基本給九四八〇円、時間外勤務一万二七九六円、内訳、早出・深夜勤務一一九時間」

早出、深夜を月一二〇時間やって、手当を合わせて、やっと二万五〇〇〇円とくるから泣かされる。それも、一度事故でもすれば、無事故手当二〇〇〇円はパーになる仕組み。

これでは若き日の心の痛みを忘れ、よき妻をめとるための資金を稼ぎたいと、一念発起した山副が仲間とのトップ賞争いに、二五〇時間走ったこともムリはない。

「三日ぶっ通しの徹夜の時は、さすがの俺も、信号で止まって、青になるまで必ず寝てたよ。直線の道にくるとスーッと眠くなるしなあ……」

このメチャクチャな低賃金、一〇〇時間をはるかにこえる超過勤務をしなければ食えない現実の改善を目指して、昭和三三年八月、全自運アサノコンクリート支部が誕生した。

そして翌三四年には、運送労働者の低賃金体系と管理体制の特殊性をあげ、モチはモチ屋で、君たちにも得になるという会社の論理にのせられ、運転労働者だけがアサノコンクリートを離れ、此の花運送生コン部門にかわった。この時の変化の理由も、アサノが、運送部門の労働者の管理を通常職員と切りはなした方が得だと判断したところにあった。その中身は一つは賃金体系の一面で、基本給を安くし、残業で稼がせる体系にしておきたいこと。さらに全自運の組合の影響を切り離したいことなどが考えられる。

寺やんは組合結成の中心であり、それ以来、一貫して執行部に選ばれてきた。寺やんも生粋の大阪っ子の一人であるが、種やんとはまったく正反対の一見鈍重で、くいついたらはなれない闘志とねばり強さの持主である。〝残業しないで食える賃金を！〟という、全自運のスローガンを実現するために、まともな休日をとるために、確実に組合づくりをすすめていった。しだいに条件は改善され、二〇〇時間以上の超勤はなくなっていった。

安保闘争の後三六年には、大阪の生コン支部四社の共闘組織が生まれ、共同の経済要求をかかげ、統一闘争をくむようになった。

この中で田中秀やん、種やん、岩男たちのような新しい指導部が育ってきた。

寺やんには、苦い過去と一つの決意があった。寺やんはおふくろさんと二人、戦災の焼け跡で炊きものをつくって市に売りにいったりさまざまな職業を渡り歩いて生活をたてた。そして、昭和二六年頃やっと運転手の資格をとった。ある商会の運転手をしているとき、年輩のかつての組合活動経験者から組合づくりの相談を受けた。あらゆる貧乏を子供の時からなめつくしてきた寺やんにとって、労働者だけの団結と誓いは、若い血をおどらせる人生の最初の感動になった。だが彼の期待は無残に打ちくだかれた。信頼しきっていた指導者が、土壇場で経営者と話し合って、やめてしまったのである。しかも、何がしかの金をうけとってやめてしまったのである。

とり残された寺やんは、のこりの仲間で組合を作ろうとしたが、その会社は親戚関係者が多く、当時の彼の経験ではそれ以上組合づくりを続けることはできなかった。彼はくやし涙をかみ、二度と同じ失敗はくり返さないことと、自分は決して仲間を裏切ることだけはしない男になることを誓って、アサノコンクリートに入社した。

「俺が入ってからもう八年か……組合できてからも五年、たしかに変わった。残業規制一一〇時間になったし、創価学会の連中に、残業仕事で差をつけられ、入信を強制されることもなくなったし、若い連中も勉強するようになった……しかし、俺は長く休んでいて、まだ様子がつ

かみきれんが、会社の態度は、今が一番悪いんやないか……」

元執行部で、頭の回転のいい山中が、心配そうにつぶやいた。寺やんは「ううっ」といって、酒をあおって口ごもっている。

三人は同じことを考えていた。今の会社の姿勢はたしかに、アサノ直属の時とも、トラック輸送専門の此ノ花運送時代ともあきらかに違う。とにかく、強引に労働者の改善要求を押えつけ、きかなければ、何をするかわからない一種無気味な姿勢が感じられるということだった。分裂主義者や警察・労務の登用はその布石の一つに違いない。寺やんは敵の攻撃にさらされている淀川の若い活動家たちの顔を、一人ひとり思い浮かべていた。

2　裏切りの季節

深夜の訪問客

疲れ切った深い眠りの底から、岩男を目覚めさせたのは、戸をたたき自分の名を呼びつづける人声だった。妻も不安そうにみつめている。時計は一時をまわっている。

この真夜中に、誰が……戸の前でしばらく様子をうかがっていると、足音が遠去かりかけて、また引き返し、「岩男さん、岩男さん」と呼んだ。若い組合員の毛利と柴田だった。「緊急事態です。比嘉が職場に仲間を集めました」

ついにやったか……岩男は眠気もふっとんで、大いそぎでズボンをはきながら、敵が先手を打ってきた様子を二人にきいた。

「はっきり第二組合つくるからと、比嘉や坂上たちが、自家用車やタクシーでみんなをつれだして……」

「Nさんのとこに誘いにきたことを、毛利に知らせてくれてわかったです」

一九歳、生コンクリートを車につみこむ係の柴田は、七五キロの巨体を武者ぶるいさせながら、しゃべった。

「野球部は全員です。俺一人だけのけものにして……兄貴が職場委員だから、のけものにしようったかも……」

柴田はその童顔をふくらませ、まるで第二組合加入の誘いを一人だけされなかったことが不満のように口をとがらせていた。

毛利は創価学会員であり、今度の二組づくりにどういう態度をとるべきかで悩んでいた。だが、今夜こうして現実の動きとなり、仲間が次々に比嘉たちに連れ去られた事実を見せられたとき、無意識に彼は組合のために動き出していた。それにしてもこの二、三日の彼らの動きは露骨だった。会社の指示で彼らは出勤せず、セドリックをのり廻して組合員の個別訪問をやっていた。その噂が職場で話題になったことを執行部がとりあげ、今日、緊急職場集会を開くことになっていたのだ。

「よし、集会にのりこもう。組合員を集めるんだ！」

三人は行動を開始した。夜になってふりだした雨が、少し小ぶりになっていた。ぬかるみの中を、三人は次々と組合員の家を訪ねた。

「主人は、出かけて戻らしません……」

「どこへ？」

「さあ……」

一〇軒の戸をたたいて、七人の家では、主人の不在をつげる妻や家族のよそよそしい返事が返ってきた。雨に濡れ、泥んこになりながら、三人は、淀川の近くに住むすべての組合員の家の戸をたたいた。もう二時だ、早く集会にのりこまんと……しかし、一人でも多くの仲間を集めなければ……松岡や西丸さんまで、チクショウ！　……怒りとくやしさがゴッチャになって、若い柴田の身内をつきあげていた。

第二組合誕生！

その頃、淀川営業所の二階に、四〇名近くの労働者が集まっていた。沖縄出身者約三〇名近くと、野球部員中心に一〇名ほど。比嘉、知名、坂上の幹部が新組合結成の主旨を説明した。

「我々の新組合を関扇従業員組合とする。結成の目的は、全自運関扇支部のやり方は余りにも闘争至上主義であり、執行部はアカで牛耳られているから、これを正しい方向に戻すことだ。

そうしないと、会社はつぶれる。会社がつぶれれば我々は路頭に迷う。会社は必ず、われわれの誠意を認めてくれるし、たとえ赤字でも、われわれの組合員をクビにすることはない……」

西丸と松岡はさっきから、落着かなかった。話の中身が、二、三日前の夜、呼びだされて、近所の小料理屋で一杯のまされ、口説かれた時よりはっきりしないのだ。あの時は「クビ」のことだけでなく、ゼニのこともはっきり言った……別の組合に行けば、一時金一〇万円だす、そして残業も今は一一〇時間で手取り五万だが、六〇時間で七万から八万もらえるようになるといったじゃないか……二人はその点が今夜ははっきりしないのが気に入らなかった。執行部の悪口なんか聞きたくない。問題はゼニだし、淀川の九〇%は参加するというからついてきた……しかし、参加者も予想よりは少ないのも気がかりだった。西丸はその点を立って、比嘉たちにたしかめようとした。

その時、階段をかけあがる足音とともに、一〇人ほどの組合員が岩男を先頭に入ってきた。比嘉の顔色がさっと蒼ざめた。怒りと気迫に満ちた、一〇人の顔……野球部の後輩、柴田の顔もみえる、西丸は思わず、自分の顔を伏せていた。比嘉のふるえ声がきこえた。

「何しにきた?」

「何しに? この真夜中に、職場集会をやるというからきたんだ!」藤原執行委員の声が響いた。

「お前らには関係ない」

「関係ある! これは労働組合の問題だ! みんなの問題だ!」

「出ていってくれ!」

一〇人は口々に叫んだ。「話をきかしてもらおう」「俺たちも一緒に!」と。

動かない組合員をみて、比嘉が条件をだした。代表一人残ってあとは下で待てということ。組合員はうなずいて、岩男副委員長だけを残して降りていった。

岩男は四〇人を前に、胸を張って聞いた。

「質問する! これはどういうことだ?」

「下部の組合員の意志を尊重して、新組合をつくるのだ!」

「それで、誰がよくなるんだ!」

「みんなだ……」

「ウソだ! 良くなるのは会社だ! それと、一部ボスだけだ! 会社の気に入ることをして労働者のためになると思うのか!」

岩男の口から、言葉が火を吹いてとびだしていた。今まで、ガマンにガマンしていた感情が言葉の塊になってふきだした。あの口べたで、人前で話せなかった、岩男の言葉とは信じられない迫力だった。

「会社がよくなるようにすれば、賃金もあげてくれる。労働条件も良くなるのだ」

「保証が、どこにあるのか!」

「……答える必要はない……」

比嘉の答えは苦しかった。西丸はたいへんなことに、自分がはまりこんでしまったという思いが、胸にこみあげてくるのを押えようがなかった。そっとみると松岡もつらい表情で顔を伏せている。

「みんな聞いてくれ！」岩男の必死の訴えが西丸の胸につきささった。

「組合を脱けて、第二組合をつくるということは、俺たち働く者の首をしめることになるんだ。労働組合がなくなって、誰がいったい俺たちの生活や権利を守るんだ！　みんな考えてくれ！仲間を裏切らないでくれ！」

〝裏切り〟という言葉が松岡の腹の底をえぐった……ああ、俺は、今、岩男や柴田や毛利や……みんなを裏切ろうとしているのか……〝裏切り、裏切り〟俺は、そんなつもりではなかった。俺はただ、新婚の女房に少しでも、稼いでやりたかった。……残業半分にして、女房と一緒にいる時間を少しでも長くしたかった……クビになりたくない……ただ、それだけ……

「Mさん、俺たちは前の会社で、どんなみじめな仕事をさせられてたか……東京、大阪トンボ返り、徹夜徹夜でも食えなかった……少しでも人並の暮らしがしたい、そう思って、関扇に来たんだ。ここは前にくらべりゃ、天国みたいなもんだ。組合のない所が、どんなにみじめか……もう一度、考えてくれ！　ここだって、みんなが労働組合をつくって、一緒にたたかってきたから、やっとここまでこれたんだ！」

「もう、いい！　出てってくれ！」

比嘉たちは明らかに、動揺し、岩男を追いだそうとした。

「みんな、もう一度考えてくれ！　会社は赤字を口実に、俺たちがたたかいとった宝をとり返し、労働組合をつぶそうとしている。労働組合がなくなれば、また、昔の低賃金と強制労働に戻されるんだ！　みんな、考えてくれ……」

岩男は最後の訴えをして、部屋をでていった。もう集会はこのまま続けられる雰囲気ではなかった。下には急を知らされてかけつけた組合員がしだいに増えてきた。比嘉たちは網から洩れる者を恐れ、タクシーに労働者をのせ第二組合員の私宅に場所を移した。

会社をやめてお詫びする

場所をかえてから、松岡、西丸は第二組合にいった場合のゼニと労働条件の保証について、もう一度、比嘉たちに聞いた。彼らは二人だけを「松重」という旅館に移し、吉政課長に相談してくるといって出たっきり帰ってこなかった。時間はもう一三日の午後四時近い。昨夜の夜半、どしゃぶりの中を呼びだされてから、一睡もせずすぎてしまったのだ。二人は時がたち、比嘉たちの約束が守られないことがわかってくるにつれて、だんだん彼らの狡猾なやり方に対する怒りと、組合の仲間たちへの悔恨の気持が強くなった。といって今さら、どのツラさげて、みんなに顔を見せられよう……二人は黙って旅館をでた。

秋の陽はもう西に傾いていた。二人はもう、行くあても頼る仲間もいない寂しさに押し黙って家路についた。

〝……退職届をだして、みんなの前から姿を消そう、それがせめて、奴らの仲間でないことをあらわす、唯一つの道……問わず、語らず、二人は仲間への心の証を実行しようと決意していた〟

家の敷居をまたぐ足も重かった。女房が心づくしにつくってくれた料理ものどにつっかえる。一晩中ひきずり廻された疲れとショックで食欲がないのだ。

「お父ちゃん、どうしたの……」

やつれきった亭主の顔を心配そうにみつめる妻の顔をまともに見ることもできない……西丸のハシをもつ手がふるえていた。

その時、きき憶えのある声が表でした。組合員の藤原と森の声だった。藤原は西丸の義兄でもあった。二人に部屋に入ってもらい、西丸は、ただ黙って頭を垂れ、前に坐った。

「西丸よ、野球部の義理があったんやと思うけどな……」藤原がいつもより穏やかに話しだした。

「やっぱり、もう一度、考え直してや……組合を分裂させたら、労働者にいいこと一つもあらへんで……組合についとって、悪くなることあらへんやろ、な、西丸、労働組合が二つに割れたらいかんのや……割れることが敗けなんや……お前かてわかるやろ、一つにかたまって、た

たかわんと力にならんのや！　会社とほんまのケンカができへんのや……」

西丸はうつむいたまま、顔をあげることができなかった。西丸はきけばきくほど、恥かしさと申しわけなさがコミ上げてきて、高まる感情を押えることができなかった。

「よーく、考えてみてなあ……女房ともよく相談して、帰ってきてくれ……いつでもいいから、帰ってきてくれ……みんな、お前の帰りを待ってるんや……」

西丸の頬に涙が流れた。「お前の帰りを待ってる……」その暖かい言葉に、西丸は泣いた……黙って二人の手を握りしめた……。

同じ頃、松岡のアパートには毛利と柴田が訪ねていた。松岡は一度は居留守までつかってカッコ悪い対面をさけたが、とうとう彼らの友情にひっぱり出され、「第一組合員が集まっている」という言葉にひかれて職場にむかった。

三〇名以上の仲間が集まっていた。手分けした組合員に連れ戻された同僚たちの顔もみえる。西丸もきた。松岡はみんなの要望に応え、素直に、昨晩の一切の経過を説明した。

「岩男さんの言葉をきいてはじめて、自分のやろうとしたことが、どんな恥かしいことだったかわかりました。初めはただ、ゼニと仕事が楽になるしそのことしか考えていなかったんです……すみません……」

松岡はどんな誘いで、一人ひとりが第二組合加盟の連判状に署名捺印させられたかを説明した。この告白の一言一言によって、松岡の心の汚れと傷が洗われていく思いだった。

3　兵糧ぜめと分裂攻撃と

残業停止―兵糧ぜめでいけ！

組合員の必死の説得で思いとどまった数名をのぞき、三〇名で第二組合を旗上げした。

数日後、ワラ半紙一枚、活版刷りで、〝関係者に告ぐ！〟というビラがまかれた。関扇再建同志会有志の名前のこのビラは、

「オッフェンバッハの『天国と地獄』の曲が関扇の庭に流れています。再建には激しい苦痛が不可避であり……」

という迷文句で始まるこのビラは激しいアカ攻撃で満ちていました。例えば、

『『共産党宣言』や『資本論』調以外の書物には眼を通さない階級闘争至上主義者の方が居れば、私たちは次のことを進言します。人員過剰の折と伝え聞くので『赤い思想の道』を選ばれる人は潔く会社を辞めて衆参院をはじめとする職業的政治家になられることです。（中略）労組の力によって倒産しても明日の賃金は失業保険金があなたを待っているだけです。果して組合はあなたに平均賃金を支給して呉れますか。『アカハタ』や労組の機関紙に書かれている程社会は甘くありません。組合に資力のない場合、共産党はあなたの平均賃金を支給してくれますか。

煽動に踊らされず、冷静に現実を観て明日の幸福を目指して職場で明るく働こうではありませんか。」

明らかに会社の手でつくられたビラではあったが、動揺する労働者に心理的恐怖を与える効果はあった。

もっとも、種やんはこのビラを手にしたとき、〝けったいなビラまきよって！　ダニー・ケイが何で、わいらに関係あるんや！〟と思ったという。つまり、彼は数日前にみた映画、ダニー・ケイの『天国と地獄』を思いだしていたのである。

だが、これは会社、第二組合一体になっての宣戦布告であり、たたかう全自運関扇支部つぶしののろしだった。

次々と、やつぎばやに、敵は組合敵視と労働者を恐怖におとしいれる手段をうちだしてきた。

第一組合に対して、チェック・オフ（給料からの組合費天引）破棄を通告し、間もなく団交拒否へエスカレートした。一方では、時間外労働停止と第二組合員だけの停止解除、日雇運転手まで含めた第二組合員との三六協定（残業協定）締結、そして労働基準監督局への届出と露骨な差別を次々と強行した。

だが、何よりも労働者に決定的な影響を与え、生活の根っ子に大きな打撃となった出発点は一〇月一七日朝、突如、告示された時間外労働の全面停止通告だった。

労働者の間に、深刻な不安が広がった。第二組合分裂にもアカ攻撃にもそれほど驚きを示さなかった労働者も騒ぎだした。

「第二組合のヤツらも同じか？」

「ごまかしやろう！」
「残業は全部、日雇運転手にやらせるつもりか！」
労働者の怒りの声の中で、その日の定時終了後、日雇運転手の時間外就労を中止させる説得を行なった。
「あんたらも同じ、運転労働者やないか！　協力して欲しいんや！」
「わてらは会社に憎まれたら、メシが食えんのや。組合の人とは違うんや！」
お互い必死の議論が行なわれた。だがこの日は混乱して就労できないということで、彼らはひきあげてくれた。日雇運転手の協力はこの日だけだった。翌日からは会社の強硬な逆説得で彼らは就労した。
組合は緊急職場集会を開いて対策を協議した。組合員は口々に質問した。
「どないなるんや！　残業なしなら、二万五〇〇〇チョボチョボしかならんのや！」
「メシくえんで！　いつまで、会社はやるつもりやろか……」種やんが答えた。
「そう長くはやれんはずや！　困るのは会社やからなあ。日雇運転手を徹夜に使ったら一晩一万近くもかかって、能率はあがらへん。問題は、組合のたたかう姿勢やで！　向こうはこっちが残業停止すれば、運転手は二、三回でイカれると計算してるんや！」
「そやけど、いつ、会社がおれよるか、わからへんやないか……」
「とにかく、会社の協定無視した合理化強行も、第二組合づくりも、残業停止も、みんな労働

基準法、労働組合法違反なんや。残業停止は差別や。もともと食えん賃金を第一組合だけ半分にする悪ラツな差別や。会社は不法不当なことをやった。今は、これ以上、組合抜ける奴がでんように団結固めながら、労働委員会に提訴を準備してる。小林弁護士がやれるといってはるんや」
秀やんが、労働委員会で十分たたかえる理由をみんなに説明した。その時、便所にいっていた組合員が、血相変えてとびこんできて叫んだ。
「おい、ポリや！　トラック一杯やで！」
寺やんと山中はいそいで金網塀の外をすかしてみた。西成署常駐の機動隊である。構内では臨時労働者が夜間就労を開始している。
「ヤツら、説得したら業務妨害でやるつもりやで！　日雇運転手が昨夜のことで、西成署で調書とられたいってたから……」
「会社と警察のつながりは相当なもんやな。そう簡単にはひき下がらんのと違うやろか……」
山中は寺やんの顔を見た。
仮眠室の中では果てしない議論がつづけられた。
労働者の大半にとって、一挙に二万数千円平均の基本給だけにされ、時間外停止の現実が最大の問題だった。警察登場の恐ろしさを考える余裕さえなかった。この会社の差別政策によって生まれた窮乏生活が、長い関扇のアサノ独占とのたたかいをつらぬく、生活のたたかいの第一歩と

なった。

創価学会でとどめをさせ

これでは終わらないだろうという山中の予想は見事適中した。吉政・高森警察労政が次にうちだしてきた攻撃は、臨時労働者への説得を理由とする田中秀やん、種やんを初めとする一二名の労働者たちに対するけん責処分だった。そして一一月中旬には、ついに第三組合が津守に発生した。

三野を中心とするグループと出口たち創価学会グループの呉越同舟の集団だった。これは、会社の少しでも脱退者の数を増やそうとする苦肉の策でもあった。三野たちは会社の腰巾着ではあったが、学会を毛虫のように嫌っていたから、おそらく同一行動をとらせるために、会社が相当の裏工作をしたに違いない。

だが、いずれにしてもサイは投げられた。

〝まさか、組合を割るようなことは……〟という山副たちのかすかな希望を打ち破り、沖縄出身者も創価学会員も会社の分裂策動に乗り、労働者の団結を踏みにじった。そしてそれ以後、第四から第七組合までの群小グループが、組合を脱退した。この段階での第一組合員数は六〇名、分裂組織の合計五十数名であった。

「なんや、創価学会は資本家の味方やないか！」淀川では、柴田が毛利にかみついた。

「いや、津守の出口はあかん！　あれは別や！」毛利はそれだけいうのがせい一杯だった。

「そんなことあるか！　学会が悪いんや！　労働組合をわるためなら、何でもやるんとちゃうか！」

柴田は、とにかく深いことはわからないまでも、理由は何であれ、第一組合を割るということが我慢ならなかったのだ。毛利は創価学会員ではあったが、それ以上、柴田の疑問に答える勇気はなかった。彼にとっても、労働組合を割ることが許されないことという気持に変わりはなかったのだから。

後に組合が入手した証拠から、第二組合づくりに際して、比嘉たちにわずか一日たらずで二六万円の費用が会社からでたことが明らかになった。第三以下にも、それ以上の金が動いた。はっきりはたらきかけをうけたことがわかっている中でも、三宅と相原は、料理屋で相当派手な饗応をうけた。彼らはさんざんのみ食いして、その場では返事をせず、酒がさめてから二人で相談し、〝寺やんたち第一組合をぬけることは男のやることやない！〟という結論をだした。

だが、この時の脱落者の中には、これら学会やボスのはたらきかけよりも、第三組合員への残業停止の解除と一時金差別と将来への空約束が重要な原因になった人が多かった。「俺のうちは残業せんとやれんのや……許してや……」と、泣いて脱退届をさしだす年輩者もいた。

また、バクチ、頼母子講、競輪にこっての借金も脱落の大きな理由になった。

前述したように、比嘉たち胴元のインチキで背負いこんだ借金を返すために、月一万円もの頼母子講に強制的に加入させられるのだ。これだけ、がんじがらめに会社と分裂組織にしばられて

自由に行動できる労働者がいったい、どれだけいるだろう。

運転手にはバクチが泣き所である。第一組合員でも、毛利も一晩、五万、一〇万のバクチですって、家財道具一切を手離したことがあった。学会の御利益もバクチには通じなかった。最年長者広松も競輪がメシより好きで、奥さんを困らせた。ある時、給料をもらった日に全部すって、寮暮らしの友人の所へ借金を申しこんだ。彼もゼニはない。

「それなら質グサにもっていっていい」

といわれたのは旧式冷蔵庫。おやじは背に腹はかえられんと、縄をかけ、ヨイショと背負おうとしたが、ついに持ち上がらなかったという。

いずれにしろ、酒、バクチ、競輪、女、借金と、労働者のあらゆる弱点をつかんで、敵は攻め落とそうとしてくる。このたたかいの中で、関扇の労働者は初めて、そのことの恐ろしさを学んだ。たたかいが烈しく、苦しくなっていく中で、しだいにバクチをやる余裕も金もなくなっていくが、まだ、この時期には、一方、すきがあれば、競輪場をのぞいていた労働者が少なくなかった。種やん書記長も、唯物弁証法の本に眼をつぶって、まだたまには競輪場の門をくぐっていたという噂もある。

一一月二二日、津守工場での第三組合づくりに続く、第三組合員への残業就労と、ますます威たけだかに第一組合労働者への差別・弾圧が行なわれる中で臨時組合大会が開催された。

執行部は合理化反対闘争から端を発し、とくに一〇月一三日の第二組合づくりを契機に、次々

と打ち出されてきた会社の組合破壊工作の経過と、それに対する組合の反撃の現状を報告し、この大会で全組合員の徹底討議による、残った六〇数名の組合員の固い団結と意志統一こそ緊急課題であることを訴えた。

多くのことが議論された。

アサノ―関扇―警察グルになっての第二組合、第三組合をつかっての悪らつ非道な敵のやり口について、この一ヵ月間の体験がこもごも各組合員の口から報告された。その中から第二、第三組合づくりなど組合活動への支配介入をやめさせるにはどうしたらいいか、目前の生活の問題として差別をやめさせ組合員に残業させるようにするにはどうしたらいいかが討議の中心になった。その点で、秀やん副委員長からは、その点はあくまで労働組合法違反の不法不当な行為で、地労委に東中法律事務所小林弁護士を通じて提訴中であるが、時間と手間がかかり、われわれ労働者の当面の苦しみをすぐ解決してくれる状況にないことが報告された。また、淀川からは、基準局が、会社に対して第二組合との間で締結されたという残業協定は無効だという通告があったにもかかわらず、会社は無視して、さらに第三組合にまでそのやり方を強行している現状が報告された。

「基準局が悪いことやいうのを、会社がきけへんでも、ええのか?」紙谷が質問した。

「ええも、悪いも、会社がいうことときかな、しゃないんとちゃうか……」

「そやけど、基準局は会社の違反をわいらの味方になって、取締るとこやろが……」

「会社には、日本セメントと警察がついとるんやで！　基準局なんか弱いもんや！」
労働者の中には、執行部のいう〝組合の正しさ〟は分かるが、現実に敵がますます攻めたててくる状態、何よりも残業できない、二万なにがしかの生活をどうするのかとても、長くはやれんという強い要求があった。
「団結、団結、そらわかるけどな、団結ではメシがくえんがな。年寄に、女房、子供どないして食わせるんや……」
その言葉には切実な響きがあった。
「暮らしは楽やない。そやけど、ここで敗けたら、会社の思う通りやないか！　会社がいうときかんでも、基準局かて、悪いちゅうとるんやで！　労働者は間違うとらんのやで！」淀川の若者たちがいい返した。
「チョンガーや若い者には余計、家族かかえた者の気持は分からん。正しいだけではどうもならん。見通しのないたたかいやっても、無駄や！」ある中年の労働者がいった時、種やんが発言した。「そら、残業せな苦しい、そやからみんなで、残業させちゅうて、毎日、要求して監督署へも押しかけとるんや。会社は〝たしかに言うこと聞きよらへん。そやけど、あきらめるにはまだ早いんとちゃうか！　行くとこも、話して協力してもらうとこもまだ、ぎょうさんある。
昨日、初めて、みんなでどうまいたやろ！　初めてやで！　基準局かて、まだ一ぺんや二へ

んや！　その一ぺん、二へんでも分かったことが一つある。それは、役所ちゅうとこは、みんなで押しかけな、なんにもせんとこや、ちゅうこと……」みんな、種やんの訴えに耳を傾けた。
「役所だけやない、会社に対してもや。今まで、みんな、奴らのやり方が頭にきて、自分からの頭つかうこと忘れとった、ビラはってもええ、ビラまいてもええ、それから、あの胸に要求かいてつけるゼッケン、ゼッケンつけてもいい。やることは、みんなで考えたら何ぼでもある。それに時間外停止は会社も苦しいんや、年末まで頑張ったらきっと向こうがネをあげる」
岩男が続けた。
「俺は何べんもいうように、何が苦しいいうて、組合がないことほど労働者に苦しいことはない。俺かて嫁はんもらったばっかりに、新婚生活ぶちこわされてイヤや！　しかし、この攻撃を許しといたら明日はもっと暗い、つらい職場になるんや！」
寺やんとグス秀副委員長がしめくくった。
「われわれに対する攻撃は、関扇だけのことではない。関西生コン共闘全労働者の問題だし、すべての労働者の問題や！　こんなやり方を許したら、労働者の職場はヤミや！」
「種やんのいうように、この真実を地域や労働者や、役所や裁判所まで、訴えられるとこみんなに訴えよう！　こんなことが許されるはずがないんや！　今はつらい、誰もしんどい！　このつらさをのりこえて、会社の不当労働行為とたたかい、社会にあばいていけば、必ず、かてる、やろうやないか、みんなで！」

4　嵐にたえて

役所は労働者の学習の場

労働者は腹が決まれば、すぐ手がで足がでる。その日から全組合員の知恵と創意性を生かした職場内外のたたかいが始まった。

翌日、まず、みんなで残業させろの抗議を行なうとともに残業開始時間がくると、プラントの下に、組合員の車をかわるがわる待機させる作戦をとった。会社は第一組合員には残業させられないから車をドケロという。第二、第三組合員が後の方から様子をうかがっている。

「組合員だけ、残業させんでメシ食わせんつもりか！　不当労働行為やで！　会社が間違っとるんやで！　おい、生コンおとさんか！」秀やんが本領を発揮してくい下がる。敵は業をにやして、ついに西成署へ連絡した。「キサマら！　警察に労働者を売るのか！」

ギリギリまで、ごねて労務が電話して、警察が到着する直前に、さっと車をどけて知らん顔をする。労務がわめいても、証拠はないし、居並ぶ第一組合員の怒りの隊列に文句をつける勇気はない。この戦術は毎日毎晩、くり返しつづけた。

役所めぐりも、連日、休暇をとり交替で押しかけた。すべての関係官庁をまわった。労働基準局だけでなく、陸運局へも大阪府の労政所へも、職業安定所へも、すべて抗議と要請にでかけた。

今までは頭を下げることしか知らずたぶん、俺たちの味方にもなってくれる時があると思っていた各役所への抗議行動に初めはみんな戸惑った。先導役は議論が得意の藤原や、口の達者な種やんたち。

辛抱強く何度も通った。通っているうちに、いろいろしゃべりはするが、結局のところ役所は何にもしてくれない所であることがしだいにはっきりしてきた。淀川基準局でも、過半数の労働者の代表でない、第二組合、第三組合の連中に残業をやらせていることは、違法であるけど、事実上やめさせるだけの強制力がないということをいいだした。

労働者は怒った。何といういいグサだ。それでも、俺たちの税金でメシを食う、国民のための役所のやることか、独占のいうなりやないかと、みんな今まで自分たちのいだいていた〝中立の役所〟という淡い幻想を打ち破られた怒りに燃えた。そしてしだいに嘆願ではなく、抗議の声に変わっていった。

基準局の片隅に、こもかぶりの歳暮の酒がおいてあるのをみつけて、誰かがいった。「これ、誰にもらったんや！……資本家やろ？……こないなことしとるさかい、お前ら、労働者のためにならん、ゴクつぶしになるんや！」みんなで、目を白黒する基準局の職制をつるしあげた。

また、陸運局に入ったとたんに種やんが壁を指さして大きな声でわめいた。

「何やこの壁、黒いなあ！　まっ黒やないか！　何ぞまた、悪いことしよったか……」

その当時、大阪では、陸運局と業者との間の黒い霧で騒がれているときだった。

この時期の役所めぐりは、関扇労働者にとっての最初の社会勉強であるとともに、権力機関と資本の関係についてのまたとない、学習の場となった。最初は無意識で一つの決議を行動した。その実践を通じて、ハンドルを握っているだけではわからなかった社会の仕組みの一つを身体でつかんだのだ。

これ以後の関扇の実践の中の学習の特徴はこの時期から芽生えていたといえよう。

釜ケ崎の仲間よ、警察は共同の敵だ！

この外へ向けてのたたかいとともに、中では全員でまず会社建物にところかまわず要求を書いたビラをベタベタとはった。

「残業させろ！」「組合活動への介入やめろ！」「合理化反対！」「警察入れるな！」などなど。職制と第二組合幹部が動員されて一生懸命ハガシにかかった。翌日、会社は警告書をはりだした。すかさず、その後で全員でもう一度、ビラをはりつけた。こうした中で地労委の第一回調査が行なわれた。

その翌日からはビラでなく、作業シャツに、全員、抗議と要求の文句をかきなぐった。そしてどこへいくときもこれを着ていった。生コン運搬するたびに、このシャツをきて得意先の労働者にアサノと関扇の実情を訴え、ビラをわたした。道路建設の労働者にもビル工事の労働者にも……

さらに翌日からは車の横腹にドデカイ字で抗議文をはりつけて大阪中を走り回った。会社はと

うとう頭にきて、ビラをはった車を出荷せず、職制が高圧ホースで水をかけてビラをはがした。得意先の会社や、大阪市民みんなに、アサノ・関扇の非人間的反労働者的行為の真相をぶちまけられるのはたえられなかったのだろう。

そのうえ、抗議シャツを着た労働者を、車にのせず会社の外へ出さない戦術にでた。これで、労働者がネをあげるだろうと計算した会社側は、すぐその予想が正しくなかったことを知らされた。車からおろされた労働者は、ゾロゾロ、会社の周辺の道路にそって歩いたり、日なたぼっこを始めたのである。通る人たちが、何事かとジロジロ抗議シャツの文句をみて通る。中には、手をふって激励していくものもいる。とくに、淀川工場は万博会場への幹線道路に面してたっている。その歩道にそって、松岡や柴田兄弟や毛利たち、若い連中先頭に、派手に動きまわる。会社は頭をかかえこんでしまった。

津守である職制がそっと、種やんにささやいた。

「あの、そのシャツはどうも、……新しいシャツをあげたら、着てくれまっか……」種やんはニコッとして答えた。

「そら、着るがな。古いのより、新しいのがいいにきまっとるわい」

職制がホイホイいって、もってきたシャツをきて、そのうえに抗議シャツを重ねて、種やんは意気揚々とひきあげていった。

種やんの思いつきとガメツサと創意性は、まさに天才的なものがあるが、たび重なる警察の介

入弾圧に抗議して、西成署に行った時のことである。一〇名そこそこの組合員でいったので、少し寂しい。

「署長はおるか！　なぜ、お前ら、会社とグルになって、労働者を弾圧しよるんや！」

種やんが大声で怒鳴った。でてきた係官は、落着きなく道路や釜ケ崎のドアの方に眼をやって、

「どうぞ、話は一つ中へ入って！　どうぞ、どうぞ」

警察へ労働者が抗議にいけば、警官の人垣で中へ入れないのが通常の警察の常識である。ここは少し様子がちがう。何しろ、名にしおう釜ケ崎のどまん中、警察は寝た子ならぬ、ドヤ住人たちを起こし、暴動状態になることをおそれて、抗議者は応接室へいれてしまうのである。――一瞬、種やんの頭におもろい思いつきが浮かんだ。彼は、ポリ公にクルリと尻をむけて、道路に向かって得意の弁説をふるいはじめた。

「大阪市民の皆さん！　われわれは日本セメント独占とアサノコンクリートの悪質なる反労働者、組合破壊の圧政とたたかう総評・全自運関扇支部労働者であります」

種やんのバカ声に、どこからともなく釜ケ崎名物の群衆が集まってきた。バクチやりかけのもの、昼酒のんでるもの、アブれた奴、ありとあらゆる釜ケ崎人種が集まってくれた。たちまち一〇〇人近くにふくれあがった。警官は何とか、彼らを中へひきいれて、一触即発の危険な連中を追い払おうと、盛んにポンびきのように種やんたちをさそう。

「釜ケ崎の仲間たち。われわれの敵は、会社だけではあらへん！　警察もグルや！　この五〇

〇人の大阪府警機動隊は一体、何のために西成署に常駐しているんや！　あんたらと、それから、おれたち労働者を弾圧するためや！　ヤツらは権力と資本のイヌや！」

「そうや！　そうや！」

「もっとやれ！」

「やったれ！　やったれ！」

別名、ホラふき種やんのホラが最高潮に達するころには、すでに種やんを支える釜ケ崎の仲間たちの人垣が西成署の玄関をかこんでいた。ニガ虫をかみつぶした西成署員たちを尻目に、種やんの演説はますますさえ渡っていた。

5　〝流れ者〟がワラジをぬぐ時

たたかいには雨の日も風の日もある。はげしく資本・権力と対決して、自分の人生のすべてをたたかいの焔の中に燃やしつくして悔いないと思う瞬間もある。また、苦しく、成果もあがらず、仲間が一人二人と消えていく時、ぶっと、どこかこと以外の別なところに、何かを求めてさまよいでたくなる瞬間もある。

その気持は旋盤労働者も運転労働者も変わりない。しかも散髪職人はカミソリ一丁で日本中渡れるというが、運転労働者は身体一つで、職場はどこにもころがっている。低賃金・無権利を覚

悟すれば、組合のない、未組織職場の就職なら探すのに苦労はしない。まして大型二種免許資格者となれば、運転手の中のいわば、エリートである。食うには困りはしない。

第一組合員の残業停止による明らかな、経済的損失にもかかわらず、年末になっても敵はネをあげなかった。執行部の読みの中にあった早期解決の望みはたたれ、敵は、年末ボーナスにも差別をつけてきた。夏より一万円以上安い二万五〇〇〇円の一時金で妥結し、第一組合員は厳しい師走をこさなければならなかった。くやしくとも今の力関係ではストライキもうてない。しかも、第二から第七組合員には一万七〇〇〇円の裏金を出していた。

一人者はまだいい、妻子ある身となれば、女房に一枚の晴着でも買ってやりたい、子供のためにお年玉も、そしてせめて家族そろって正月料理でもつっつきたい。ぜいたくな願いではない。いつも人並みのサラリーマンらしい家族とのつきあいもできない運転労働者にとって、年に一度の家庭サービスの時——だが厳しいたたかいの中ではそんな余裕はない。組合は全組合員の家族に、闘争協力支援呼びかけの手紙を送った。

妻に泣かれ親兄弟に、

「お前、そないないい腕もっとって、なんで、妻子飢えさせるような、しょうむないことやっとるんや」

と責められる時、口では今一息の辛抱やと、強いことをいっても、仲間とスクラムくんでいる時の強い確信がしだいに消えていく。

それは弱い人間だけではない指導グループでも同じこと。

元執行部山中は新しい年を迎えても、気持は晴れなかった。一〇月、やっと闘病生活から復帰し、収入が順調に入るようになれば、山口の田舎から妻子を呼ぼうと思っていた時に、たたかいがはじまり、残業ができなくなった。

痛かった。残業がなければ二万五〇〇〇円の手取りにしかならない。田舎の妻と生まれたばかりの子供には二万円を送らなければならない。残った金は五〇〇〇円。これでは、たたかいの中といえ、大の男一人、友人と同居したとしても暮らせない。口に入るといえば、インスタントラーメンばかり。田舎の妻からは、仕事のこと以上に、病みあがりの身体を気をつけるようにいってくる。だが、昼ぬき、夜ラーメンの生活が、いつまで続けられるというのだ……たたかいに疑いをもつのではない、仲間が信じられないのでもない、アサノがにくい、俺たちをこんなにまでした奴らがにくい。どこまでもたたかいたい……だが、今のままでは生きていけない、身体に自信もない、親たちが妻子に苦労させて、何をしているのだといってこられるのが一番つらい。山中は考え続けた。田舎へ帰るべきか否か、誰にもいえず、一人考え続けていた。

山副も同じだった。三重の田舎へ帰ろうか……思いつめて、そっと妻に聞いてみた。素直で明るい妻は、心配そうに彼の顔をみていた。

「みんな、頑張ってるのに、悪いんでしょう……わたしはいいんよ。寺沢さんたちを裏切るようなことはできんでしょ」

山副はおそらく、初めての基本給だけの貧乏暮らしの中でケロッといってのける妻の顔を見直した。そして寺やんの顔を思いだしていた。

寺やんはつらかった。〝早期解決の方向がくずれ、当面の見通しが、簡単にたてられない状勢がもっとも決定的だった。そして敵は残業停止という運転手の泣き所をついている〟一番しんどい時やなと毎日思っていた。家庭で母親にグチをこぼされるのもつらかったが、何よりも入社以来一緒に苦労してきた仲間たちに、申し訳ないと頭を下げて、脱退届をうけとるのが一番つらかった。脱退者の数は、津守は淀川より少ない。だが、津守は平均年齢五歳も高く、家族をかかえて責任の重い者が多い。それだけに、長期化するたたかいの中で、よほどふんどししめ直さんと、生活のたたかいに疲れて、心ならずも落ちていく仲間がでるだろう。エゲツないアカ攻撃はだいぶ通用しなくなった。ゼニと差別の誘惑は恐ろしいが、第二組合員の生活が会社の宣伝ほど楽でないことがみんなの眼にもはっきりしてきた。アサノ・関扇の露骨な組合分裂、敵視政策をやめさせ、残業が元通りできる日を当面の目標に敵を追いつめよう、その目標もみんな一致している。運転手は長期戦に弱い。その点の方針を持たないと、敵の兵糧攻めにたたかえないのだが、問題はたたかいの長期化と生活だ。

その頃寺やんが朝がくるために思ったのは、今日もまた会社にいってみると、仲間が一人落ちているかもしれないということ。朝、会社にいくのがこわかった。

生活……生活……敵より長くたたかうための生活……そいつを、みんなでつくらんといかん。

寺やんは毎日そのことを考えていた。寺やん自身は貧乏暮らしが物心づいた時から身についた故か、それほど気にならない。おやじに若死にされたお袋が、小さな弟のために、飯だけが食える皿洗いや炊事の仕事で稼いで、帰りには必ず、弁当箱にそっと残飯をつめてきて食べさせる生活をとおってきた。彼には一〇〇円キリのゼニで、何とかひもじくないメシを食う知恵が身についた。

今が一番、あぶない時かもしれない……寺やんは、津守の中核になる仲間たち一人ひとりのことを考えていた。幹部の山中や、山副さえ、田舎に行きたいといっている、今日はまた種やんまで、何やゴテゴテいっていた。やめて他にかわる約束になっとったという……秀は大丈夫や。問題はやっぱり、種や……あいついっぺん、どついたらなあかん……寺やんは、胸をはって、外に出て種やんを探した。黙って二階の部屋に連れていって、坐らせた。

「おい、種よ、お前、ほんまによそへ行くつもりか？」

寺やんは真正面から種やんをニラミつけた。

「分かってるがな……そやけど、わい一人本気になって騒いでも、誰もついてきいへんやないか！　あほらしいほんまに、わいはやめるで！　関扇だけが、たたかいやあらへん……」

「おい種よ！　お前、ほんまにそう思ってるんか？　え？　お前のいうてることはいいわけやで！　人がついてきよらんとか、人のせいにしよるが、お前が逃げるんやろ、お前、今よそへ行くことが裏切りだちゅうことが分からんことは、ないやろ？」

「……」
「今がしんどい時に間違いない！　地労委で、いつ頃結論だせるか分からん。しかし、その結論待ちのたたかいをするわけにはいかん！　地労委の命令をあてにしたたたかいではだめや！　今までの役所や権力機関のやりとりで分かるやろ！　とにかく、早期解決を目指しても、体制は長期にたたかう方向を決めんとケンカにならん。そのために、まず執行部が腰をすえることが今の問題や！」
「分かってるがな、そやけど、俺一人おらんでも……」
「種よ、敵はわいらの一番弱いところをついてきてるんや！　兵糧攻めと長期戦や！　運転手の一番弱いとこや！　しかし、向こうが生活をついてきたら、こっちも生活でうけなたたかいにならんで！」
「……そやなあ……逃げられんなあ……」
「種よ、ホラふいてもみんなお前についてきよるんや！　お前のおらん、関扇の組合は考えられんのや！　お前がやめたら、関扇のたたかいは敗けやで！」
種やんは観念した。どんなにわめいても、もう逃げられん立場に自分が立っていることを教えられた。
「種よ、嫁さんにウソついたらあかんで！　お前、昔は信用なかったさかいなあ……」
「何いうてんね！　寺やん、分かった！　やるわ！　やったらええんやろ！　心配かけてすまん」

種やんは大衆闘争にメッポー強い。彼の真価はその楽天性と機智と人を思わず笑わす大衆性である。だが、ときおり困難にぶつかると自認しているように、ネをあげ、だだをこね、やめる！　やめる！　とわめきだす。
寺やんにいわせれば、ほんまのところ、脱落していく時にこんなに騒々しく、やめる、やめるとわめいてやめる人間はいないそうだ。だから、寺やんは種やんが大衆や労働運動を裏切ることのできない人間であることに何の疑いも持っていない。だから、彼は思いきってしめあげ叩くのである。
秀やんも寺やんもネをあげたり、苦しいということをコトバにすることはない。それがいいことだとは寺やんは思っていない。寺やんも人間だ、苦しいことがないわけではない。だが、声にならないのである。ガマンするわけでもない。彼の習慣になってしまっているのである。その点、種やんの陽気な告白は素直であり、大衆の心そのものだと思う。だから、彼はホラふきとか何とか言われながら人に愛される。自己犠牲と自己主張、その両面がなければ、労働運動もたたかいもほんものではないと寺やんは考えている。
それからしばらくして、種やんと山中が話した。山中はまだ迷っていた。その頃、山中は秀やんと一緒に、堺の元竜神遊郭を改造した一室に住んでいた。昔、貧しい女たちが客に身を売っていたその畳の上で、山中は、ラーメンの汁をなめながら、田舎の妻子のことを思った。「妻は病

床に伏し、子は飢えに泣く」――たしか、山中の郷里の偉人、吉田松陰たちとともに維新前に獄死した志士の言葉のはずだ。しかし、俺は妻が可愛いい、子が可愛いい……何度考えても、考えは堂々めぐりするばかり。

山中は種やんと一緒に歩いた。「千本の渡し」には風が吹いていた。冬の川風は冷たかった。山中は腹の底におさえている言葉を、いつ、きりだそうかと何度もくちごもった。

種やんがとぼけた顔でポツリといった。まるで、彼の心の動きを読みとったように。

「山中さん、あんた、田舎へ帰ったらあかんで！　あんたがやめたら、関扇のたたかいは敗けや……」

最後の一言が山中の胸にグサッとつきささった。口まで出かかった言葉を、山中はとうとうはきだすチャンスを逸してしまった。

数日後、寺やん、種やん、山副の三人が、生コン共闘書記のよっちゃんと一緒に、山中の下宿を訪ねた。

四人が薄暗い部屋に入ると、山中はゲッソリやせ、眼を落ちくぼませて一人坐っていた。荷物をつくり、田舎へ送るだけにして、その荷物の前で、彼は三日間、考え続けていたのだ。

四人はかわるがわる山中の気持をきいた。女房と赤ん坊を親のところにあずけ放しにしておくわけにいかない。一緒に暮らすには、今の収入では……、裏日本の萩に帰ってもいい仕事はないかもしれん。しかし、今よりは……寺やんはうなずいてきいていた。

「今、二万五〇〇〇円やろ……問題は、親子一緒に暮らせることやろ」

山中はコックリ、うなずいた。

「田舎に仕送りしとるさかい、よけい苦しいんやで！　大阪に家族のおるものは、みんな同じやろ、種んとこも、山副さんとこも同じ条件や、何とかやっとるんやろが……」

「ほんまに、何とかやけどなあ……山中さんみたいに、ラーメン一杯ちゅうことはないなあ、あじかサバでも、お頭つきがつくで、ちゃんと！」

「うちの嫁はんも、安いもん、うまいこと見付けるようになったなあ……」

山中の顔にかすかな希望が浮かんだ。

「昔から一人口は食えんが二人口は何とかなるゆうんやで！」

寺やんがいった。

「嫁はんの介しょうやで！　嫁はんがやれば一山五〇円のアジを煮つけて、その汁で、明日のおからを煮てもけっこううまいもんやで！」種やんにつづいて、寺やんがいった。

「問題は部屋や！　安い部屋や！　いいことある、知り合いに周旋屋がおるんや！　頼んで、権利金、家賃の安い部屋をさがしてもらお。どうや山中、奥さん田舎から呼んで、一緒に暮らすんや！　みんなで一緒に、頑張るんや！」

山中は仲間の暖かい気持に胸が熱くなった。その瞬間、山中は親子三人のこれからを仲間たちに任せようと決心した。

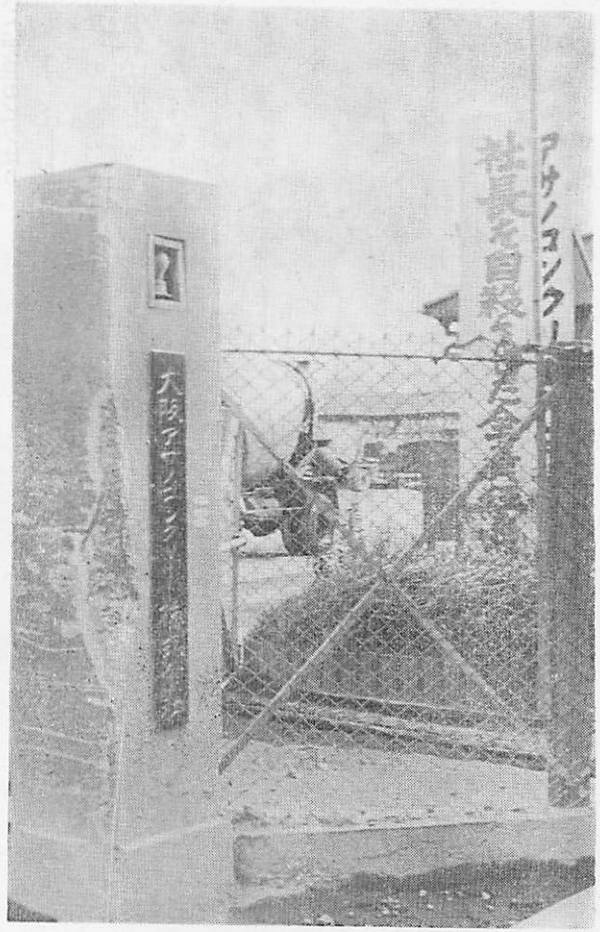
帰り際に、山中は種やんにそっといった。

「〝せんぼんの渡し〟で、あんたがやめたら関扇のたたかいは敗けやといわれた、あの言葉で、田舎に向かっとった足がとまってしまったよ」

種やんはニャッと笑った。その言葉は、何日か前、種やん自身が寺やんにいわれた言葉であることを山中は知る由もなかった。

こうして、しだいに、関扇運輸支部中核部隊のたたかいへの生活がためができていきつつあった。

第二章　警察・労務による首切りと逮捕の攻撃



1　忍びよる首切りの手

狙われていた元旦のビラはり

昭和四〇年一月一日――池川では多くの組合員が集まって、元旦にあたってのたたかいの決意をこめて会社への抗議のビラはりをした。

すべての生産は停止し、いつもスモッグにおおわれている大阪の空も、この日だけは太陽が顔をだし、労働者の休日を祝福しているように思えた。若者たちは嬉々としてビラを書いた。新聞紙に墨汁で思いったけ書きなぐった。「団結！　団結！　団結」「差別扱いは即時やめろ！」「アサノ・関扇、法律を守れ」「道交法による二重処分反対！」

構内に人影はない。ミキサー車も、今日ばかりは洗車されて、きれいになったクリーム色の巨体をズラリと並べてすましている。

労務も守衛も警官の姿もない淀川の構内を、若者たちはのびのびとビラをはり歩いた。ブロック塀にも、ガラス窓にも二階の壁にも若者たちはよじ登りはりついて、ノリをぬりビラを貼りつけた。

それは、ゼニと力ずくで分裂を強行し、仕事をとりあげ、あらゆる差別介入を行なって恥じない、関扇―アサノ経営陣に対する労働者のささやかな抵抗の意志表示に過ぎなかった。関扇―アサノの今日の繁栄を一人ひとりの血と汗のにじむ、低賃金重労働でつくりだした労働者の怒りと願いのこめられたビラはりであった。

「何時も、こない静かでわいらだけなら会社もええなぁ！」柴田がスットンキョウな大声をだした。

「そら、そうや！　相手がおらなケンカすることもあらへんしなぁ！」松岡が答えた。

「ほんまに、頭にくるなぁ！　会社はぎょうさん搾取するもんやで！　みてみい！　こんだけの広い敷地で、ほんまに生産手段を動かして、剰余価値生みだしとる労働者いうたら、何人いるんや！　プラント関係数人とあとは雑役やろ！　あとは俺たち運転労働者だけやで！　お偉方や労務だけが、いばりくさって……」

「うわあ、西丸さん、何やて……ジョウヨカチ……セイサンシュダン……えらい、先生みたいなこと知ってはりますなぁ！」

だれかが、目下、学習中の西丸の演説をひやかした。西丸はムキになってセメント独占と日本独占資本主義についての習いたての知識をヒロウした。岩男はニヤニヤ笑ってきいていた。二組誘惑事件以来、西丸、松岡は学習をはじめ、労働学校に通い、行動に積極的に参加し、グングン変わってきた。岩男は、自分が労働学校にいって学習した後、山中について京都のある集会に参加した時のことを思いだしていた。報告の時、寺やん、秀やん、山中たちのようにしゃべるには、どうしても、「高度経済成長政策」と「アメリカ帝国主義」という言葉を、どこかへハサまんと

いかんと心にきめ、一生懸命、場所を考えるがうまくいかん。そればっかり考えていると、何をしゃべっているか分からなくなり、とうとう汗をかいて途中で山中に交替してもらった。

西丸がひやかされてもムキになってしゃべっているのをみて、労働者が物をおぼえていくときは、誰でも一緒やと岩男は思っていた。あの、ペラペラ口から先に生まれたようにしゃべる種やんだって同じだった。哲学の勉強のしはじめの頃――寄場だろうが、飲み屋だろうが、淀川にこようが、どこでも、仲間をつかまえて威張ったものだ。

「矛盾って、何や、知ってるか？」

「？？？？」

「知らんやろ、教えてやろか！　矛盾とは対立物の統一や！　へへへ、どうや！」

と、やたら肩で風を切って歩いていたものである。岩男は、あの分裂以来、淀川の仲間たちがどんどんかわり、成長していくのを頼もしく思った。かつては淀川でリクツをいうのは藤原や大沢たち幹部の専売特許であった。だが、今や百花斉放、若ものたちが労働学校通学とともに、次々にしゃべりだしたのである。柴田、毛利、松岡、西丸などなど。

こうして、おだやかに、のびのびと、ビラはりの正月がすめば問題はなかった。だが、この時、敵はじっと物陰からみていた。そしてこの日の行動を理由に後日、一斉弾圧にのりだしてくることになるのである。

「人員整理対策費御融資御願」

ここに一通の文書がある。

表題は右の通り。差出人は関扇運輸代表取締役、上田清太郎。宛先は、大阪アサノコンクリート代表取締役、中川一久。本文は次の通り。

「謹啓、貴社益々御清栄之段、慶賀の至りに存じます。平素弊社業務に関しましては、格段御支援を忝うし、有難く厚く、御礼申し上げます。

扨、今般当社労務対策の一環として、労務混乱責任者及び実行者の馘首を行なうにあたりまして、退職金、一月分賃金及び予告手当を支給することを必要としますので一月二十二日当日に一金壱百五拾万円也を現金にて御貸下の程、御願申しあげます。（後略）」

大変、読みにくい文章であるが、要するに、関扇で労働者のクビを切るから、そのために必要な金一五〇万を貸してくれと、アサノに申しこんだ文章なのである。

この文書が正式に作成された日は昭和四〇年一月二〇日。その席に立会ったのは上田社長、植野支配人、口野業務部長、吉政労務部長と高森労務担当である。上田社長は九名のクビキリ対象者の中身を確認し、署名捺印して吉政に渡した。上田はホッと嘆息をついていった。

「やっと、これで、アサノへの義理が立つわ。そやけど、ほんまに色川法律事務所で、この方針でええっていうとるんやろなあ…」

「大丈夫です。無断欠勤、職場離脱、ビラ貼り、みんな就業規則違反間違いありません。理由

は十分です」口野が答えた。
「そやなあ……そやけど、地労委が、第二組合や、残業のことどない結論だすやろか……」
上田社長はいささか不安そうに言った。彼にとっては、こんなしぶとい労働組合相手に会社経営に関係したのも初めてだし、親会社アサノの要請とはいえこんな荒療治も初めてだった。
「社長、もうこうなったら、考えたり、弁護士のいうこといちいち気にすることありませんで。いっきょに勝負ですわ。警察の方の準備も順調ですさかい……社長、連続パンチでいきましょう…」
高森が世慣れて人を食った表情でいった。吉政が代表してこの文書をもってアサノ本社、藤田総務部長に会うために出発した。

このクビ切り計画は、すでに前年来のビラはりや各官庁への抗議行動の頃から計画されていた。対象者九名の選定については、不当解雇の印象を与えないように苦心した跡がみえる。顔ぶれは会社が関扇支部にもっとも決定的な打撃を与える基準で選んだことは事実であるが、表向きは就業規則による違反点数を決め、その合計が一定の基準をこえたものをクビ切ったということにしている。その基準が無断欠勤であり、職場離脱であり、ビラ貼りというわけである。
この時の解雇の内幕は、やがて組合が入手することになる会社側機密書類によってその全貌が明らかにされることになるが、冒頭に引用した〝貸金願い〟の文書もその一部である。この文書

をみて、もっとも奇異に感じることは、クビキリの是非は別として自分の所の社員をクビキル費用をアサノに貸してくれと申しこんでいる点であろう。
このような〝融資願い〟はこの時だけではない。前年秋の関扇労使対決の発端となった合理化計画強行の時にも、「非常時対策資金」として、二組づくりの援助資金や日雇運転手賃金を含め三〇〇万円の借金申しこみをアサノにしている。
この異常な関係は何を物語っているか？　この点が、後に関扇倒産の事態の中で、組合がたたかいのホコ先を親会社であるアサノにむけ、四年間にわたってその労働者に対する経営責任と、不当労働行為を問いつづけるポイントとなり、零細下請あるいは関連企業労働者が親会社独占とうたたか道を切り開くための生きた証拠となったのである。
その中身は、一つには、関扇はアサノの仕事だけをする「限定輸送」を業とする会社であって、アサノに泣きつかねば労務対策一つ、独自にはとれない関係にあったということ。第二に、要するに、関扇輸送は別会社の形をとっているが、実質はアサノコンクリートの輸送部門以外の何ものでもないということである。そして、これ以後の経過の中で、明確にこれが実証されることになるが、アサノの輸送部門なら、最終的に経営責任はアサノ経営陣がもつが、別会社の形をとることによって、経営破綻の責任は一切、関扇経営陣に負わせるシステムにしていたということである。
上田社長がアサノへの義理といっている中味も、要するに半年前、運賃値上げをアサノに申請

し、値上げ許可の条件として、一・三公休制などの合理化計画実施と、労働者のクビキリを約束させられていたということである。すべてが「高度経済成長政策」のひずみ是正とセメント過剰生産のシワヨセを労働者と末端企業に押しつけてのりきろうとするセメント独占企業の思わくによって進められた、悲劇の進行だったといえよう。しかし、まだ、この時期には関扇労使ともに、その判断を的確にもつことはできなかった。

直接、対決する関扇労使の激突の瞬間が、刻一刻と近づいていた。上田社長のアサノへの約束——労働者九人のクビキリ、人身御供によってその火ぶたは切られた。

九人の首がとんだ！

山副はその朝、午前中一回目の仕事は、ある大企業の建設現場への運搬だった。

彼はいらいらしていた。もう一時間半にもなるのに、まだ生コンは残っている。早く帰って、昨夜の職場集会の時、仮眠室を無届けでつかったと執行部に警告書をはりだした会社に、一発抗議しなければならないのに、さっぱり仕事ははかどらない。何しろ、広い現場のあちこちの溝に、少しずつ、まるで兎の糞のように生コンを落とさなければならないのだ。移動のたびに、大きな車体を鉄筋にぶっつけないように、ドッコイショと動かす。時間のかかることおびただしい。

やっと終わって帰途につく。

「相変わらず、やたらと警告書を貼りだし、その上、近頃は警察がしょっ中出入りしている。

正月早々から淀川でも津守でも、ビラはり現場を写真にとり、証拠物件のように一枚一枚ティネイにはがして持っていった……そろそろ、何かやってくる頃か……」

山副は知らず知らず制限速度ギリギリでつっ走り、津守工場の門をくぐって、車庫に車をおいて外へ出た。種やんが小走りに近づいてきていった。

「とうとうきよったわ！　クビヤ！　俺と寺やん……津守では二人だけや、淀川は七人もやで！」

ついにくるところへきた。種やんの顔も蒼ざめている。

「寺やんは？」

「寺さんは地域のビラまきからまだ帰らんし、秀もまだや！」

「淀川は大丈夫やろな……」

岩男をはじめ大沢、藤原、松尾、松岡、小川、伊達と七人も一挙に解雇された淀川の仲間たちのことが心配だった。

淀川では岩男たち解雇者を先頭に全員、事務所におしかけ、所長の藤崎に抗議していた。

「何やて！　就業規則違反で、ほんとは懲戒解雇になるとこ……何言うとるんや！　協定破って勝手に合理化はじめて、不当労働行為はじめたのは会社やないか！」岩男は烈火の如く怒った。

「おい理由は何や？　ほんまの理由は何や！」大沢がつめよった。

「知らん……上で決めたことだ、俺は知らん」藤崎はとぼけた。
「無届欠勤は、比嘉が専門やぞ！　所長！　組合活動を理由にしたクビキリやろ！　え！」
藤原が迫った。柴田弟が、太い腕を握りしめて前にでてきた。殺気立っていた。淀川は若者が多い。敵の分裂攻撃とともに目覚め、はじめて会社への憎しみをこめて組合活動に参加した青年たちだ。ハイピッチで学習中といえ、どうしても口より手が早い。分裂攻撃以来、淀川では毎朝一〇分間、車を動かす前に、事務所に抗議行動をすることを日課にしていた。そんな時でも、藤崎所長以下、職制たちの態度が悪いと若者たちはトコトン頭にくる。ギュウギュウ相手を徹底的に追いつめるまでやらないと若者たちはナットクしない。会社が警察に連絡するようになってから、よほど注意しないと敵は業務妨害や暴行脅迫、あるいは、警察官に対する公務執行妨害にひっかけてくる。岩男たち執行部はギリギリまで敵を追いつめ、津守の先輩たちのようにサッと身をかわすたたかいのクセをつけなければならない必要性をはじめて痛感した。いかに、正義のゲンコツでも、この場合絶対に押えなければ、敵は手ぐすねひいて待ち構えているのだ。岩男は仲間たちの怒りが激発しないように気を配りながら、この日は徹底的に食い下がり抗議した。
かつて、会社の組合破壊攻撃で敗北した経験をもっている大沢は、津守に比べ七名という淀川の解雇者の多さに異常さを感じ、敵の意図をあれこれと考えていた。
津守では、昼休み、山口所長が帰ってきた寺やんにあらためて処分書を渡した。
「もっともらしい理由をつけよったな！」寺やんは所長を見すえていった。

「給料、退職手当、予告手当を預っているから渡します。健康保険証や雨衣を返しなさい」
寺やんは白々しく脅かしている相手の口元をじっとみつめていた。種やんがきて一緒に並んだ。
「あんたたち、退職願いを出しなさい」
「アホいうな！　会社が一方的に不法にクビ切るのに、退職願いがかけるか！　ええか、今、地労委であんたらのやってること調べている最中にこないなことしてええのか！」
寺やんの語気はするどかった。掲示板にはった処分告示を秀やんが写真撮影している。敵が証拠づくりでくるなら、こっちも敗けとらんというわけだ。年末来の敵のビラはがしも、すべて秀やんがパチパチ撮りまくっていた。
「もう一度いうが、君らは今日限りで、関係とは縁切れだから、明日からは会社の構内に入らんようにしてくれ！」と、所長がいった時、秀やん、山副、山中たちを先頭に組合員が押しかけ、口々に不当解雇に抗議した。
「勝手に解雇しておきながら、従業員でないとは何事だ！」秀やんが頑強に食い下がった。
「みんな、すぐ仕事にとりかかりなさい。寺沢、田中両君は許可もえず、構内をうろうろしたらこちらにも覚悟がある」とひらき直った所長にむかって、種やんが怒鳴った。解雇通告の時の緊張がとれて、いつもの種やんにもどっている。
「おどかすつもりか！　所長、いうとくけど、この田中種男はやな、昨年一〇月の組合大会で書記長に選ばれ、組合員としての義務を果たす責任がある。会社が何といおうと、組合事務所

に行く権利が俺にはあるんや！　それをジャマするつもりか！」

この関扇労使の対決をあざ笑うように、後部座席に深々と身体をうずめた、アサノの藤田取締役総務部長の車が門を出ていった。身体を隠すようにして同乗している上田社長の姿もみえた。

首を切られて何を思った？

首切りは労働者の生命を断つことと同じである。一見平和にみえる〝昭和元禄の世〟の階級と階級が生命をかけてたたかう決戦場で、決定的な手段の一つが〝解雇〟である。激しいつばぜり合いであればあるほど〝解雇〟によって労働者は生活の場を奪われ、再就職の道を閉され、一生自分の技術と職場に生きる可能性を奪い去られることにさえつながる。事実、関西生コン輸送労使の関ヶ原＝関扇をクビ切られた労働者をまともにやとう職場がいったいどこにあるだろう……関西の生コン業界にはブラックリストがとうに回っているし、大阪運送業界では、関西経営者組織の情報が行きわたっていた。わずか半年前までは、予想もしなかった、労使対決の深みはアッという間に入りこみ、九人の労働者の職場が奪われたのだ。

松岡の場合　松岡にとって、最初は、寺やんや岩男たち指導部に混って自分の名前が入っていることが信じられなかった。何かの間違いではないかと何度も告示を見直した。だが、何度見ても松岡忠義の名前が最後にくっついている。

「俺が首を切られた……」

松岡の頭の中をこの数ヵ月間の出来事と自分の立場がつぎつぎにかけめぐった。不安もあった。だが、不安以上に、この下っ端の俺が何故……という疑惑の方が強かった。組合運動が何かを深く考えもせずにやったこととはいえ、三ヵ月前には仲間たちを裏切ろうとしたこの俺……やっと、みんなに申し訳ないという贖罪の気持から離れて、一緒に行動できるようになってから、まだいくらもたたない。「みんなの後からやっと、ついて歩けるようになったこの俺をなぜ、クビに……ビラはりも、抗議も、外まわりも人並みにはやったが、決して、それ以上ではない。その俺をきるのは一体、何の目的があるのか……そうだ、目的、敵には目的がある、俺たちのような後からやっとついて来た労働者を、中にいれて、幹部クビキリの目的をごまかそうとしているんだ……俺はあて馬だ！」

松岡の腹の中はにえくり返ってきた。

アパートでは結婚まで滋賀の紡績工場で働いていた新妻がせい一杯のくず肉の御馳走をつくって待っていた。

「あんただけがどうして……」

一言、聞いて彼女はそれ以上いわなかった。松岡は少しでも、妻を安心させるように、一生懸命、状勢を話してきかせた。結婚間もなく、こんなカッコよくない暮らしをさせることが申しわけないという気持が胸につっかえている。柔順で穏やかな妻であるだけに、松岡は一層、つらかった。だが、あれ以来、二人の新婚生活を心配してくれ、励ましてくれる仲間の友情が身にしみ

る。松岡は、茶碗を洗う妻のきゃしゃな背中に語りかけた。
「田舎で親にいわれた通り、俺はみんなの後からついていったつもりだ……会社はその俺でもクビをきったんだ！　岩ちゃんや大沢さんたちのように先頭に立ってもクビをきる、俺みたいに後からついてってもクビを切る！　先にいっても後からいっても、労働者はクビを切られるんや！　やってもやらんでも、同じなら、やらなきゃ損だ！　俺はこれからやる！」
松岡の瞳に、生まれて初めての強い怒りと闘志が湧いてきた。
種やんの場合　種やんの家庭の環境はもっと複雑だった。地元富田林や大阪市内で、割合、裕福に暮らしている親戚が多く、種やんが運転手で労働運動の旗振りをするようなゴクドーはあかんという保守的意見が支配的だった。正月、生野の親戚の家で、集中放火を浴びたばかりだった。
「お前は早うそんなことやめんと会社から首キラれるで！　嫁ハンや子供がかわいそうと思わんのか！」
「お前は今まで、子供の頃から長いこと、ゴグドーしてきて、親戚みんなに迷惑かけた……この頃、ようよう、ちょっとはましになってきたと思うたら、今度は赤旗ふりよる。あかんで！もうこれ以上、みんなに迷惑かけたらあかんで！」
「お前ももう三〇で、子供の親やで！　嫁はんに少しはらくさしてやろうという気になれんのか！」
みんなで、よってたかって、まるでゴクドーの大阪代表みたいにいって、種やんを攻撃した。

今やっていることは、ゴクドーではないと一生懸命、説明してもわかってもらえる人たちではなかった。奥さんも一緒になって言われることが一番つらかった。
今、その恐れていたクビきりが現実のものとなって現われたのだ。奥さんはもう、アキらめたのか新しいゴクドーと観念したのか、黙ってしまった。
「ここで、頑張らんとあかんのや！　分かるやろ、今やっとることが、ゴクドーかどうか……そら、今まで、いろいろ心配かけてきたさかい、心配するのはもっともやけどな……」
種やんは、たしかに、ゴクドーとよばれても恥ずかしくない過去をもっていた。二〇歳で奥さんと一緒になってから苦労のかけ通しだった。奥さんがいつか寺やんにいったことがある。
「あの頃は夜が来るのはこわかったです」
いろいろあったが、要するに原因は酒とバクチがメシより好きということだった。奥さんがあの頃という頃に、種やんは遊びほうけて家に帰ってから、また、一升酒をのんだ。それも、一本二本、燗をしてなどというメンドくさいことはしない。コップ酒でもいちいちつぐ手間がかかる。第一、起きてのまなければならない。種やんは、ゴロッと寝て天井の節穴を眺めながら、絶え間なくアルコールを飲み続ける道を考えだした。
一升ビンの口にコルクの栓をする。そのコルクに穴を開けて、ゴムの細い管を中にいれる。その管を口にくわえ横になって人生の最高夢幻の境地にひたるわけだ。まさに、酒の道を極める、ゴクドーと呼ぶにふさわしい。バクチはカブにホンビキ。競輪なら、一人ひとりの選手のこまか

い習性、好みまで暗記していた。何しろ、種やんは〝酒でうぶ湯をつかい、自転車乗りは競輪場でおぼえた〟といわれるくらいで、道を踏み間違えて、労働組合書記長などにならなければ、今頃は日本一の競輪ノミ屋にでも出世して財をなしていたかもしれない。彼の勝負予想は見事で、いい時は九八〇円の配当で一五〇枚、約一五万円を一勝負でものにしたと、自慢する。もっとも、その辺の事情は、自転車と札と夜がコワかったという奥さんの言葉が真実を雄弁に語っているようだ。

彼はゴクドー、ゴクドーと一方的に周囲でいうのは気にいらない。女遊びやケンカはせんしそれほど人に迷惑かけとらへんで、というのが彼のいい分である。競輪にしても、青年団の団長などをしている頃で、ゼニがなかったから研究ばっかりして憶えたんやという。

たしかに、彼のいい分にも一理ある。ゴマスリばっかり優遇しよる学校教育への反発が、力だけが物いうようにみえた競輪に熱中する原因になったのだろう。また、アサノの前にいた運送屋で意気に感じて労働組合づくりの手伝いをしかけたら、ボスが会社と慣れあって同盟に入ってしまったときも大ゲンカをして会社をやめてしまった。威張る奴やインチキする奴をみると虫ずが走る。だから、関扇入社後、出口創価学会の横柄な折伏と学会入信を労務管理に利用する職制のやり方が頭にきて、労働運動とマルクス主義の原典を片っぱしから読みはじめ、おまけに、ジャンケンにまけたばっかりに執行委員になってしまったというわけである。

運送屋時代、八幡製鉄の守衛が一々、写真はったパスポートを見せなければ入門させない横柄

な態度が頭に来て、歳暮に届けられたビールの栓をぬいて、中味を半ダースくらいのんで、後に水をつめておいたこともある。

酒、バクチに酔っても、不正を憎み、正義を愛する好漢、種やん――こういえば、カッコよく終わるのだが、すべて奥さんの体験からでた告白の中に真実が存在する。

組合活動をやりだしてからもこんなことがあった。どうも、家に運んでくるゼニが少なすぎる。ある時、洗濯しようと思ったズボンのポケットから、払ったはずのメシ屋の本物のメシ代の請求書がでてきた。彼女がうけとった請求書とはケタ違いに少ない本ものの請求額であった。バレたぜ、種やん、万才！

とはいえ、好きで一緒になった人―彼女も夫を信用しないわけではないのだが……組合活動と学習をやるようになってから、バクチはやめ、競輪はのぞく程度になり、変わってきたことは分かっている。だが、あまりにも〝クビキリ〟という現実は厳し過ぎるのだ。

「なあ、おかあちゃん、俺は今まで、俺が一番しんどい、俺だけやっても損やという考えがどっかにあったんや！

けどなあもう逃げられへん……俺が逃るつもりでも、相手が逃げさせてくれんのや、俺はもう、うまいこといかんやったら、よそへ流れていく一人の運転手ではのうなったんや。俺が逃げたら、関扇の労働者みんなが泣くんや！

もう、泣いても笑っても、クビ切られてしもうた、これはわいが間違うてるからやない！

ゴクドーだからやない！　悪いのは会社や！
なあ、かあちゃん、分かってや……。親戚みんな俺のことやかあちゃん子供のこと心配しとるようにいうてる、あれは敵の思想やで…クビ切った奴らの思想やで！
血筋や親戚のいうことが一番コワイ！
なあ、おかあちゃん敗けたらあかんで」
いつの間にかふだんの種やんに戻って、しゃべりまくっていた。
「なあ、おかあちゃん、おんなじたたかうんやったら、ユカイに楽しみながらやったろや、な、そうやろ、おかあちゃん……」
この先、どうなるのか、妻の不安は消えない……だが、いつものように、何かやらかしたあと、オドケて笑わされていると怒りがきえていく、夫のにくめないおしゃべりにひきこまれていた。そして、よく分からないが、今までとは少し違う、何かきびしく強いものを種やんの態度の中にみていた。

"二組は敵やない"ではたたかえない

分裂―第一組合員だけの残業停止以来、次々と姿を現わしてくる内外勢力とたたかってきた。第一組合員の怒りは九名のクビキリと警察の組合員一人ひとりに対する任意出頭通知の中で、いやがうえにも高まった。

会社はさらに、日雇労働者の数を増した。それでなくとも、例年一月は仕事が少ない。そこへ、二組、三組、日雇運転手と並んで早出から残業までと、通しで車を使って仕事をさせる。第一組合員には仕事がまわってこない。組合員は毎日、ビラかき、諸官庁への抗議、地域や全自運職場への訴えと、やらなければならないことは山積している。会社はわざと、第一組合員には仕事をまわさない。自分たちは、車にのせてもらえず、唇をかんでいる眼の前で、第二組合員たちはジャンジャン働き、残業、徹夜と稼ぎまくっている。この露骨な差別の現実を見せつけられて、頭にこない労働者はいない。
淀川でも津守でも、暮以来、連日、朝一〇分の事務所への抗議を続けている。その抗議もききき目がないと、事務所から車庫にまわって、俺の車に乗せろという要求をすることにした。それぞれ、自分の車のところへいって、職制をつかまえて、わいわいやった。
「何で、俺をのせんのや！」
「何で差別するんや！」
「俺の車、大事につかわんと、承知せんど！」
淀川一の大声で、セコ松こと松迫がドナリあげた。それでも、いうときかんと、次にはみんなで大挙してアサノの事務所に押しかけた。
「アサノは差別のあと押しするな！」
「アサノは口出しするな！」

こうして、もみ合っているうちに、九時半から一〇時近くなってしまう。
また、たまに、昼間、車に乗せられると、早速、ボディに要求ビラをはりつけて走る。
現場につけば、待時間をつかって、訴えのビラをまく。会社は早速、アサノのジープをつかってそっと後をつけてくる。そして、車やビラまき現場の写真をとりにきた。会社は労働者を怒らせてトクすることはない。
第一組合員は徹底した遵法闘争戦術をとった。ゆっくり走り第二組合員が追い抜きでもしようものなら、徹底的に文句をいった。また、生コンつみこむときは、制限積載量二・五リューベ以上は絶対つませないことにした。
生コンをプラントから車に落とす係は柴田弟の係である。彼は第二組合幹部の額を見ると、ムラムラと怒りといたずら心が湧いてくるのをおさえることができない。
彼らの車の時は、生コンを積み終わったら鳴らすことになっているベルを鳴らさない。また、生コンをつみこむとき、スムースにはいらないと、途中で固まって、つかいものにならなくなってしまう。第二組合員の車になると、時々、その事故が起こる。固まったら、鉄の棒でつついて固まりをとらなければならない。たちまち、三〇分や一時間は時間がたってしまう。分秒刻みで仕事をする生コン運送業にとっては、致命的な遅れになってしまう。アサノは得意先には平あやまり、関扇の職制を怒鳴り、大忙しである。

柴田弟は若干二〇歳だが、職場委員をした兄貴より、はるかに豪傑である。中学をでてから三年ばかり、東京日本橋の呉服問屋で働き、自転車で都内の配達をさせられ、鍛えられた巨体の持主。いいだしたらテコでも動かない。その頃は兄のように理屈ではなく、会社のやり方が頭にきて、身体を張って、抵抗していた。
彼の仕事場である、プラント下部にある、小さな調整室のガラスを、彼は太い腕で叩き割った。職制が驚いてかけつけると、彼は、落着いていった。
「こないな寒いとこで、仕事ができるか！　ガラスいれるまで、仕事せえへんで！」
また、Kはみんなから〝故障発見機〟というアダ名をもらうほど、車のどんな小さい修理個所でもみつける名人であった。第一組合員の車が入ってくると、
「あ、こらあかんで！　ジョイントに油ささな！　いっぺん点検せんとあかんな！」
といった具合で、つぎつぎに修理場へ車を送りこむ。津守でも、淀川でも、時には修理を待つ車が修理場に行列をつくることがあった。
「こら！　こんなん、たいしたことないで！　すぐ、走ってくれ！」
職制が文句をつけると、仲間たちがみんなぞろぞろ、ぞろぞろ集まってくる。
「なんや！　なんや！」
「運転手殺すつもりか！　たいしたことないなら、あんた乗ってんか！」
とやりだす。これでまた三〇分くらいはすぐ過ぎてしまう。

やっと、労働者の意見が認められると、修理工がひきつぐ。第二組合長比嘉は修理工の肩書であるが仕事はロクにできない。

淀川では毛利組合員が先頭に立って修理を始める。ところが、これがまた輪をかけた遵法修理をはじめて、バックミラーのとりかえに、なんと一時間もかかるのである。絶対安全に確実に、労働者の生命を守る修理のために、ゆっくりとハンマーをふるうのである。

日雇運転手は高くつく。当時でも、徹夜すれば一万円近くになるといわれた。そのうえ、こんな状態が続けばソロバンに合うはずがない。だが敵もこれくらいでは引き下がれない。九人の首をとばした以上、組合の息の根をとめるまでやり口をエスカレートするしか道はない。

たたかいは職場だけではない。寄場にも、組合事務所にも、風呂にまで続く。

各人の弁当は、寄場に名札をつけておいておくことになっていた。しかし、第二組合の幹部の弁当は、必ずチョボチョボのおかずしか入っていなかった。首をひねる二組幹部の顔を、みんなニヤニヤ笑ってみていた。メシには白墨の粉が入っているかと思えば、坐ろうとすると、長椅子がスッとひかれて、尻もちをつく。さながら、サル・カニ合戦の猿の家のようなものである。二組幹部が誰かに文句をつけようものなら、柴田弟など低い背をのび上がるようにして、相手の顔に近づけてやり返す。比嘉たちは第一組合の連中はわざとツバをかけるといってカッカと怒っていた。だが、第二組合員には団結はなかった。幹部が怒っていてもわれ関知せずだった。結局、淀川では比嘉、知名、しば川たち幹部は昼はアサノに貸してもらった二組事務所にひっこんでいるより仕方なかった。

第二組合員のことで一番頭に来るのは、会社と一緒になって「どうせ、第一組合の敗けや！会社は日本一の弁護士やとってるんや」といったり、全自運の悪口をいうことだった。それをいう奴の名は、便所にかき並べて、勝っても、こいつらは組合に戻さんとかいた。仕方なく二組に行っておとなしい奴は寄場で一緒にメシを食い、酒も飲みにいった。そして、第一組合員が帰ってしまった後、比嘉たちは、コッソリ寄場に入って来て、残業する第二組合員に威張りちらしていた。

津守でも、事情は以たりよったりだった。出口たち、創価学会員はアサノの敷地に建ててもらった第三組合事務所で小さくなっていた。

お茶をわかしたり、掃除をする津守の佐々木のおっさんも、淀川の広岡のおばさんも第一組合員だった。

「おい、おっさん、お茶！」

と威張って、出口や三野たちが入ってきても、おっさんは黙って口もきかなかった。おっさんが強いのでも、理屈があるわけでもない。事実、その後、おっさんは途中で頑張りきれずにぬけていった。でも、今でも、おっさんは寺やんに合うとなつかしそうに、当時のことを話す。今は釜ヵ崎のドヤの番頭をして暮らしているのだが、寺やんたち第一組合の連中の人間にホレたからついていったのだと話す。

広岡のおばさんはもっとひどい。ある夜第二組合員が一汗かいて、素っ裸で風呂にとびこもうとしても、一滴のお湯も入ってなかった。
「おばさん！　どないしたんや！」
「あんた、まだやったんか！　そら、えらいすまんことしたなあ！」
ぶつぶつこぼしてひきあげる第二組合員に頭を下げて、上げたおばさんの顔にはいたずらっぽい笑いが浮かんでいた。
また、柴田などは、第二組合員の車をみるとさけんだ。
「この前は生コンこぼして悪かったなあ。今度は気をつけるからなあ」
ミキサー運転手は生コンがこぼれて、車体にこびりつくのを一番嫌う。おとすのに一苦労するのである。
「ああっ……すまん、また、やってしもうた！　この次はほんまに気いつけるわ！」
にが虫をかみつぶした第二組合員がボディにかかった生コンをうらめしそうにみつめていた。

2　かちとられた全員黙秘のたたかい

わいら二人バクってんか！

会社は九人を会社からはじきだそうとして、暴力団をやとった。七分袖をきた片目のジャック

たち数名だった。守衛をつくるという名目で関扇の制服を着せ、組合員が抗議行動をすると、職制のまわりについて肩をいからせてまわった。だが、彼らの脅かしはあまり効果はなかった。関扇労働者はみんなそれぞれ、今こそ、ゲンコツでなくスクラムで統一しているが、若い頃は種やんに限らず相当な場を踏んできている。寺やんにしてからが、関扇に入る前、因縁をつけられ、トラック二台八人の荒らくれ相手にドライバー片手に対決したことのある硬派だった。しかも、貧乏暮らしをしていても、不思議に肉づきよく、ガッチリした身体つきがほとんどである。
そのうえ九人の仲間の首を切られ、深く静かな怒りが、組合員みんなの胸に燃えはじめている時期なのだ。ヤーさんにとってヤクザの一人や二人で恐れをなす状況ではなかった。
九人はそれぞれの職場へ入るため職制やジャックたちの脅かしを突破して、まず、組合事務所までたどりついた。そして、棟つづきの便所へ行き、ついでに寄場へと顔を出すようになった。寄場で労働者に守られていれば、敵は外をウロつくだけで、ジャックたちは手も足も出ないのである。
この頃、淀川の組合員への淡路警察署から元旦のビラはりについてききだすための任意出頭の通知はますますひんぱんになった。もう、二〇人近い労働者に声がかけられていた。アパートや下宿の近くの交番のおまわりが始終、うろついたり、近所に様子を聞きにきていた。職場の行き帰りにひょっと気がつくと、人相の悪い私服らしい男がジッとこっちをみている。
組合では、国民救援会大阪支部の人にきてもらって、弾圧にあたっての心得を勉強した。警察

が家などに聞きにきても何にもしゃべらないように家族にも徹底させること。任意出頭には応じないこと。組合関係の書類など大切なものはおいておかないこと。万一、捜査にきたときには令状を必ず提示させること。家宅捜査の時は必ず立合人を要求すること、そして、本人の黙秘のやり方についてなどと徹底的に学習した。

「今日も警察きいへんやったで」寺やんのお母さんも毎日、息子に教えてくれるようになった。お母さんは〝後からついて行け〟と毎日、口をすっぱくしていってるのに、こともあろうに委員長までやっている寺やんが気に入らなかったが、今や内輪ゲンカをしている時ではないと思ってくれたのだろう。文句一ついわず、寺やんに協力してくれた。

淀川の組合員の主婦たちも近い所は連絡しあって、一朝事ある時は協力し合う話し合いをすすめていた。だが、準備をすればするほど敵の存在が気になり、どこからでも警察の眼が光っているように思えた。背広を着ている男はみんな私服刑事にみえたと淀川の組合員はいっている。

森は三人の子持ちで、淀川では最年長者だった。彼は淀川一の酒豪だった。柴田弟とよく飲んだ。警察の幻影におびやかされ、誰も夜一人になるのが恐ろしかった。だから、森と柴田は夜になると、ヒマとゼニがあれば飲んでいた。ある夜、二人はがまんし切れずトコトンまで飲んだ勢いで近くの派出所にドナリこんだ。

「おい！　任意出頭、任意出頭いうなら、わいら二人、逮捕せえ！」森が怒鳴った。

「いや……あんたら、別に……さあ、家へ帰りなさい！」

「何を！　ケチケチするな！　みんなを任意出頭で脅かしといて……わいら、その手にのらんで！　さあ！　逮捕せんか！　わいらを中へ入れ！」

その夜はゴネるだけゴネて帰ったが、翌晩、また、酒が入った勢いで同じ交番を襲撃した。警官は恐れをなして本署に連絡をとった。さっそく、パトカーがかけつけてきて、二人を本署までつれていって事情をきいた。だが、彼らには任意出頭の声もかかっていなかった。

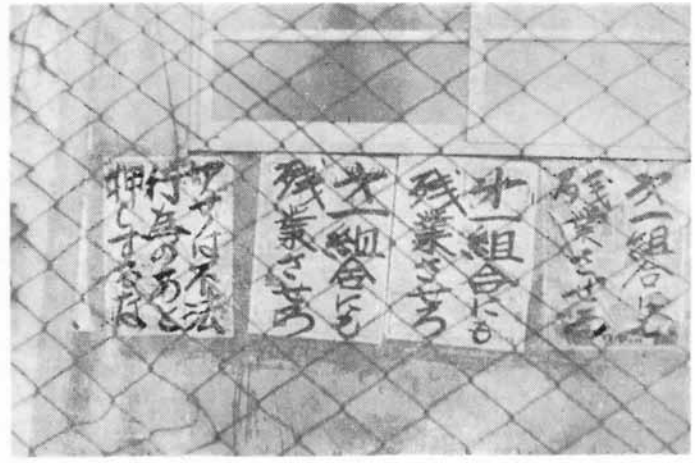
「さあ、手数かけんで！　帰って、帰って」本署の警官もうるさそうに、二人のヤッカイな酔っ払いを外につれだした。

「おい！　逮捕しろ！　ケチケチするな！」

「どうせ、逮捕するなら、俺たちを一番にしてみろ！　やい、逮捕してみろ！　敗けへんで！　おい！」

二人は本署の前で、ありったけの声でわめいた。みっともないし、どうも感心した行動とはいえない。だが、とにかく彼らは警察の陰けんな看視がこわいという気持と、どうせやるなら一番乗りで弾圧の心得通りみんなの先頭に立ってたたかおうという気持とがいりまじって、警察への先制攻撃をくわしたつもりだったのである。

大阪府警は間もなく、津守、淀川両組合事務所を捜索し、その後三月初旬、七人の淀川の仲間たちを逮捕した。だが、その中にこの二人は入っていなかった。



七人の逮捕

三月五日―大沢はこの日、会社を休んだ。前夜、急に妻が産気づいたのだ。二月いっぱい続いた任意出頭攻勢の中で職場は極度に緊張していた。岩男、藤原とともに、淀川執行部として、毎日職場の状況と警察の動きをとらえ、方針をだし指示する責任があった。

だが、妻の出産をほおっておくわけにはいかない。前日最初の痛みがあって病院にいったが、まだだと帰され、五日午前一時頃、二度目の痛みでやっと入院を許可された。入院すると間もなく、陣痛が起こり二時過ぎに男の子が生まれた。とも稼ぎで郵便局に勤める奥さんは、職場の活動も忙しく、しかも関扇のもっとも大変な時期にお産ということで、出産への影響を心配した。とにかく、たたかいの中で、十数年

ぶりに長男が無事生まれてくれたことで大沢はホッとした。

朝六時、アパートは中学生の長女にまかせてもう一度、病院に様子を見にいった。出産前、大沢の家には二度、高槻署員がきて身重の奥さんに任意出頭の書類を渡していた。あるいは逮捕があるかもしれない、あればまず、執行部にくるだろうと考えてはいたが、女房のお産に気をとられて、やはり現実感は薄かった。

一〇時に家へ帰ってカギをあけて部屋に入った。人の気配で外をのぞくと刑事が二人立っていた。

「大沢儒治だね。脅迫容疑で逮捕する」

といって、令状を見せた。その瞬間、大沢の頭には生まれた子供のことと、長女がどんな風に思うか、一人でチャンとやれるだろうか、そのことが頭に浮かんだ。

津守の組合事務所で大沢逮捕の電話を受けたのは種やんだった。相手は中学生の娘さんだった。

「あの、お父さんが一〇時頃、淡路警察の人に連れていかれました……」思ったより落着いた声だった。

「心配せんでなあ。お父さん、悪いことしたんと違うからね。悪いのは警察やさかい……お母さんに、お父さんのことはみんなで、メンドーみるから心配せんようにいってや。お母さんとこにも誰かいくけどな……」

種やんは一言一言、人生最初のショックにぶつかっている少女の気持を励ますようにしゃべっ

た。

この日、淀川の職場ではつぎつぎに六人が府警本部の刑事に逮捕されていった。翌六日の一人を合わせて、七人が一人ずつ、十三、西淀、福島、吹田、大淀、茨木、淡路の各警察署に分散されて、留置された。岩男、藤原、大沢の執行部と西丸、伊達、松尾、阿部の組合員だった。大沢一人がアサノの職制に怒って、「殺したるぞ」といったというデッチあげで脅迫容疑とされ、あとの六人は元旦のビラはりについて、「建造物侵入」「建造物損壊」の容疑だった。

岩男も藤原も職場からつれていかれた。岩男はジープにのせられ、幹部をいれるところといわれる大淀署の独房にいれられた。大淀署に着く直前に、規則だからといって刑事から手錠をはめられた。藤原の場合は職場でみんなの前で手錠をはめられ、くさりでグィグィひっぱって車にぶちこまれた。

つぎつぎに職場を襲い、仲間をひきたてていく大阪府警の刑事たちの群に、組合員はみな最初はひるんだ。恐ろしかった。幹部がつぎつぎと逮捕されていく、津守の様子もわからない……だが、ここで俺たちがしっかりしなければ……淀川の若者たちはみんな、刑事をとり囲んだ。

「なぜ、逮捕するんや！」

「どこへつれていくんか！」

「お前は誰や！　令状をみせ！」

毛利も松岡も松迫も柴田も、みんな残された自分たちの責任と立場を肌で感じて、刑事の前に

身体をはって、立ちふさがった。……令状の一言一句、一文字でも間違えたらつっかえせ……みんな、救援活動の心得を思い起こして刑事たちに食い下がった。

西丸が逮捕される時は証拠写真もとった。

「おい！　名前をもういっぺん、ちゃんとよめ！」

セコ松がいつもの大声をはりあげて、令状を読む刑事に迫った。刑事は労働者に包囲され、必死に間違えないように令状を読んだ。令状をもつ手が小刻みにふるえていた。

セコ松は刑事の硬ばった顔と、ふるえる手をみつけた時、ハッとわれにかえり、「俺たちは正しい」奴らは震えている。俺たちが恐ろしいんだ。ビラはりは労働者のささやかな権利だ。ゼニに差別に分裂に、警察や役所まで手をまわして、不法不当に組合と俺たちの息の根を止めようとする会社と権力への当然の抗議だ！　ビラはりがなぜ悪い、俺たちは正しいんだ！」と、腹の中から怒りがつきあげてきた。

それからが大変だった。津守と残った淀川の組合員で手分けして、七つの警察への差入れと七つの家族への激励をやらなければならなかった。何しろ大阪府下アチコチに点在している警察署一つひとつに有効な抗議と差し入れ行動を組織するだけでも大変な仕事だ。幸いペットのポンコツではあるがモチ屋の機動力を発揮できた。全自運各支部の労働者も急をきいてかけつけてくれた。各地域の労働者もきてくれた。

差し入れも、警察によって態度が違った。福島署では、牛乳に毒が入っているかもしれないと

いって許可しない。岩男の入った大淀署ではすしの差し入れをさせた。しかし、差し入れも、みんなの敏速な抗議行動の中で、強く働きかけないと、いつ本人に渡されるか保証はない。とくに、生まれたばかりの母子を残してぶちこまれた大沢のことが一番心配だった。種やんは一策をかんがえついた。淡路署の近くのうどん屋から、やけどしそうに熱い鍋焼きうどんをもってきて、担当刑事の眼の前につきだした。

「さあ、差し入れやで、すぐ食べさせてんか！」

「何や！　こんな物！」

「何が、こんな物や！　鍋焼うどんは熱い奴を食うもんぐらい、あんたも知っているやろ！

さあ、今すぐもってって食べさせてんか！」

「誰も、差し入れさせんとはいっとらん！」

「あてにならんさかいな。さ、そば屋でも、いれ物がすぐいるんや！　待っとるから、すぐ、持ってってや！」

返す言葉がなくなって刑事は渋々と、鍋焼うどんを奥に運んだ。こうして淡路署始まって以来の鍋焼き差し入れ作戦を成功させた。大阪では、その後毎日放送労組員の逮捕の晩、ビフテキの熱いのと、氷柱を冷房用に差し入れる戦術に成功している。

初めての差し入れ作戦に、警察から警察へととび歩いたセコ松は移動の車の中でボヤいた。

「ほんまに、次から次と、敵が出て来よるな！　どこもかしこも敵だらけやで！　親まで、そ

んなこといつまでもやっとらんで帰ってこいいってきよる。親兄弟まで敵や！」

「そやけど、ほんまに、忙しいなあ！　これからまた嫁はん連中を安心させなあかんし……こら、中にパクられとった方がよっぽど楽やないやろか」

セコ松兄貴がボヤくのもムリなかった。この時の淀川組合員の奮闘はすさまじかった。幹部を全部とられ、それでなくとも津守より少ない組合員をゴッソリやられたのである。

淀川にいった津守の組合員は文句をいわれた。

「なんで、淀川ばっかりパクッて、津守はパクらんのや！」

少々、おかしな文句ではあるが、気持は大いにわかる。それに、そういう反応が組合員の中に起こり、若い淀川の組合を壊滅させようという敵の狙いがあったかもしれない。

家族の援助も、毛利や柴田が中心になってすすめられた。だが心配したより、奥さんたちはしっかり、旦那から聞いていた、弾圧の心得を忠実に守り、女性らしい機智を働かせて警察とたたかっていた。

大沢の娘さんは一人残されたアパートの部屋を片付け、種やんに連絡し、母と幼い弟のために献身的に働いた。阿部の奥さんは、ドカドカ侵入してきた刑事に対し、物おじせずに令状を全部、書き写させることを要求した。イライラして、わめく刑事の前でていねいに一字も間違えないように書いた。

岩男夫人は、四人の刑事の姿をみると、すぐ、隣の奥さんに立会いを頼んだ。そして、捜査模

様を写真にとった。彼らが勝手に部屋をかきまわすのに抗議して、岩男夫人はいった。
「立会いの人は、あなたたちと同じ数にして下さい」
その時、毛利もかけつけて一緒になっていってくれた。
「ダメダー　ダメダ！」
刑事は横柄にどなった。毛利は黙ってつかつかと上にあがった。
「こらっ！　中に入るないうのがわからんか！　捜査の邪魔すると、公務執行妨害でおまえを逮捕するぞ！」と血相を変える刑事に毛利はいった。
「しょんべんや！　そこ、どかんか！」
毒気をぬかれた刑事を押しのけ、毛利はゆうゆうと、便所に入って長い長い小便をした。
こうして、何度も押しかけて、抗議してくれる毛利の応援が、岩男夫人の気持をどれだけ落着けさせたことか……弾圧されて初めて知った、仲間の連帯の心強さだった。

親父ガンバレ！　黙秘でいこう！

厚い壁の向こうでは、親父たちが仲間の顔、女房の顔、子供の顔を思い浮かべながら、それぞれの性格とやり方で、黙秘をつづけていた。
大沢は一二時半に中にぶちこまれ、すぐ、指紋をとられた。指紋はあまり抵抗しても仕方ないということだからとらせた。すぐ取調室に入れられ三時間ぶっつづけに取調べられた。

「お前はビラはりは出とらんのやな、脅迫やな……えーと、この日アサノの事務所へいったのはお前の他、誰や？　何人いったんや！」
つぎつぎとかまをかけるようにきいてきた。大沢が答えないとわかると、つぎつぎと、その日の出来事を並べたて、一言でも言質をとろうと誘導した。
「お前のはたいしたことないんや。いえば、すぐ終わるんや！　意地はっとるだけやで！」といったり、また、しばらくすると「俺はお前がどうしゃべっても関係ない人やで！　役目できいとるだけやからなあ……」といかにも、なげやりな様子で緊張感をほぐして言葉をひきだそうとした。
西丸はパクられた時から、頭に血がのぼって、そのまま怒りっぱなしであった。外面だけではない、腹の底から怒っていた。「二組幹部にダマされ、野球部の義理で仲間を裏切りかけるくらい、この人のいい俺をこんなところへいれた……」
彼は一言も口をきかなかった。すべて態度で示した。昼飯も晩飯も一口も口をつけなかった。
「こんなもん食えるか！」と、犬の食器としか思えないアルミの容器ごと、グチャ飯をほうり投げた。
「何をするか！」
最初は大声をあげた、房吏も二度目には、ネをあげて、
「何とか、食べてんか……」と西丸に、懇願した。

西丸は何といおうと答えず、疲れと怒りで顔をへこませて沈黙をつづけた。そして、房吏が脅かそうがわめこうが、毛布をかぶってゴロリと横になって起きなかった。

岩男も西丸のようにアルミ皿を投げはしなかったが食い物が頭にきた。麦飯に、小鳥が水をのむようなさ湯、どうみても、クソをひっかけたようにしかみえない、チョッピリの味噌の塊、それに小指の先ほどの天ぷらが二つ……何もかも頭にくる、非人間的待遇だった。夜になると底冷えするコンクリートの床、うすい毛布、部屋の端の便器。だが、岩男は貧乏暮らししかしらなかったし、頑丈な身体を持ち合わせていた。奴らの人を人間扱いしない態度が頭にきても、別に不自由は感じなかった。田舎ではタンパク質などないゴチ飯になれていたし、凍てつくすき間風の中で寝るのも平気だった。

彼が一番、気になったのは、やはり他の仲間たちがどうしているかということだった。一日目にすでに、井関弁護士から逮捕者の顔ぶれと外の様子は聞かされた。二日目の取調べの時、一日目に差し出した煙草を光男が「お前らの煙草すえるか！」とつき返えしたことにふれて刑事がいった。

「阿部は煙草すったんやで……」その言葉で、岩男は奴らが、各警察毎の状況をたえず連絡しあっていることを敏感に嗅ぎとった。うっかり奴らの言葉にのれないぞと、もう一度、腹に力を入れ直した。奴らはあらゆる情報や調査を取調べに利用した。

「あんた、前に、傷害でつかまったことあるなあ？」若気のいたり、彼がケンカで、クサイ飯

をくった時のことをいっている。一瞬ギクッとした。だが言葉はださなかった。しかし、奴らがあらゆることを調べあげていることがわかった。自動車事故の罰金まで口にした。大沢もかつてヤミ物資で物価統制令違反にひっかかった時のことまでひっぱりだしてきかれた。警察の恐ろしさが次第に岩男の胸にしみてきた。警察は正月以来、いや恐らくたたかいの初期から、淀川の活動家のすべてに眼をつけ、職歴、過去の傷、性格、趣味、家族関係まで、すべてを調べあげ、七人をマナイタの上にのせて料理しようとしているのだ。あるいは、おりにいれたねずみのつもりでいるのか……だが、俺は人間様だ、と岩男は腹の中で言葉をかみしめていた。

「あんた、どこの国が好きや？　アメリカか、ソ連か？　ソ連は労働者の国やからなあ…」

馬鹿者！　俺は日本人だと、岩男は心で叫んでいた。

「あんたも、組合運動ばっかりしとると、貧乏して奥さんかわいそうやで！　いい腕しとるんやから、もったいない話や！」

抗議に押しかけた仲間の歌声が岩男の胸に、熱い感動と追いつめているのは俺たちやという確信をうえつけた。

三日目がやはり一番、気持が動揺したとみんな釈放後語っている。大沢は最後まで、脅かされたり、すかされたりした。

「ささま、オーバー二枚も着やがって、生意気な奴っちゃ」といったかと思うと、「ここに入

ったら、大臣もジャコも同じやからな！」とすごんでみせた。
逮捕される時、できるだけたくさんの衣類を身につけてでることという心得が非常に助かった。早春の夜の冷たさを防ぐことができた。そして、全自運と東中法律事務所の電話番号をシャツの裏に入れておいたのもよかった。三日間、大沢の頭にこびりついてはなれなかったのは、病院の妻のこと、息子のこと、そして一番気がかりな長女のこと、一人で御飯をたいて食べているだろうか、何を食べているんだろうか、女の子だからおかずなんか結構器用につくるだろう。心配なのは感じやすい年頃……父親も母親も職場で毎日、たたかいつづけているのは何のためか、そのことをわかってくれるだろうか。あの子のためにも、頑張りぬかなくては……。
西丸はあまりにも興奮しすぎて、メシものどを通らず、みんなの心ずくしの差し入れさえ、刑事の前では食べられない。房に帰って一人になると空腹を感じる。これではいけないと思い、二日目からはジクジクしたたき直しのおかゆのような飯をたべた。家庭のこと、職場のことが、つぎつぎと頭に浮かんでは消え、疲れても寝つかれない。夜は寒かった。寂しかった。睡眠不足と疲労で憔悴している自分がわかった。こんなことではいけない。三日じゃない二三日間の勾留にたえなくてはならないんだ……俺は間違っていない、正しいことをやっているんだといいきかせても、三日目になると確信がなくなってきた。静かな夜……孤独とのたたかい……自分自身とのたたかいだった。三日目に、逮捕された人間が必ず感じる不安と懐疑につけこみ、威圧するような検察庁での検事の取調べ……西丸は警察できいた、支援の仲間たちの呼び声を胸の奥で思いだ

しながら、必死にたえた。
「お前のために日曜日わざわざ出てきてやっているんやで！　もっとお前のいいことだけでもしゃべった方がトクやで！　どうせ、お前はまた勾留や！」
と刑事にいわれると、岩男も、三日目には、少しはしゃべった方がいいのかという不安が襲ってきた。三日目に襲ってくる勾留請求するのか、請求が通るか却下になるのか、この迷いはリクツではない。誰でも一度は経験すること、その時に力強い仲間の声が聞こえず、民法協の弁護士さんが敵の奥深く入ってきてくれなかったら、果たして何人の人間が、この三日目の危機をのりこえることができただろう。

全員釈放の時

三日目の勾留延期請求の時刻――関扇支部と全自運、地域の一〇〇名近い労働者たちは、大阪地裁の勾留請求をする部屋の前に並んでいた。間もなく六人の仲間たちがここに現われる。大沢は一人だけ勾留請求をせず淡路署で釈放されることになった。
拍手が起こった。岩男だ。
「岩男！　よく頑張ったなぁ！」
「最後まで、頑張れよ！」
みんなの激励の笑顔と拍手に岩男は元気にうなずいて答えた。続いて、藤原が眼鏡の奥で警察

を怒らせるインテリのような眼を光らせて入ってきた。阿部は少しはにかんだような表情で歩いてきた。西丸……ゲッソリやせて、笑顔も力がない、〝彼はあるいは、しゃべったかも……〟みんなの胸に、まずそのことが浮かんだ。

勾留請求、全員却下！　万才！　その夜、七人を囲み全自運や支援の仲間たちとともに警察での七人のたたかいを聞く報告集会もやった。

誰一人しゃべらなかった。全員黙秘を頑張りぬいたのだ！　あんなにつかれきった西丸も、立派に沈黙を守り通したのだ。松岡は黙って西丸の手を握った。アリガトー、みんな！　中でたたかった七人も、三日間、大阪府下を走り回った外の仲間たちもよくたたかったんだ。そこにはたたかいぬき、労働者の宝を守りぬいた、誇り高い関扇の男たちと、数十人の全自運と地域の労働者たちの顔があった。

阿部は中で聞かれたことを報告した。

「あんた、いい男やもんなあ！　友だちになろうや！」

「あんたの組合はアカがぎょうさんおるやろ？　誰と誰や？」

「今度、わしと琵琶湖に魚つりにいこうや！」

「もう、関扇みたいなとこやめた方が得やで！　わしがええ仕事世話したるで」

西丸もきかれた。

「佐世保の原潜寄港について、あんた、どう思うんや？　きかしてんか？」

「あんた、社会党か、それとも共産党か？」

「関扇の争議は誰が指導しとるんや？」

「あんたも、嫁さん、子供もいて、いい加減やめとかんと、ほんまに損するで」

藤原もきかされた。

「お前も共産党か？」

「こんなことをしていると、お前も家族も一生うだつがあがらんぞ！」

誰も同じような質問をうけた。しゃべらないとみると、もうビラはりのことは離れて、思想調査をはじめたのだ。会社のイヌになって、警察の取調べ室をつかい、組合員の経歴、思想調査を行ない、労働者の団結権を堂々と踏みにじる行動に出た。

「あんたいい人なのに、パクッてすまんかったな！」

岩男は最後に刑事にそういわれた。

「あんたらに、バリバリやってもらわんとわいらの賃金もあがらへんで……わしらも公務員やさかい……頑張って下さいや……わしらも陰では応援してます」房吏はソッと岩男にいった。

一月の九人の首切り、そして三月の七人の逮捕――関扇の仲間たちはまた一つのヤマを越した。その夜、六〇人の組合員の眼にはもっとも狂暴な国家権力とたたかって屈しなかった自信と、次に現われるどんな敵にも、必ずスクラムを組み直して、立ち向かう闘志がみなぎっていた。

クビ切りに続く逮捕、これで敵の短期決戦の焦りが読めてきた。敵の出方とたたかい方のつか

めなかった年末のあの苦しさをこえ、今、厳しい攻撃の中で一つの確信が生まれ始めていた。敵はやっぱり、早く結末をつけて、第一組合を追いだしたいのだ……敵の集まりに対して組合側では、クビ切り組が中心となり、失業保険でたたかいつづけるたたかいの生活づくりの第二期にとりくみはじめました。

3　創価学会ではたたかえん――一組の旗高く

学会への疑問

国家権力と独占資本が情け容赦なく、労働運動に襲いかかる時――その暴力がはげしければはげしいほど、労働者の団結の真価が問われる。

団結がほんものなら、叩かれるほど苦しいほど痛手をのりこえ、労働者一人ひとりも組織も鍛えられ、たくましくなっていく。

この半年の苛責ない攻撃は、半数近い脱落者を生むとともに、多くのたたかう労働者を生んだ。若者たちは字を憶え、労働学校に通い、プラカードを書き、ビラをまき、職制に全員一言ずつ文句を言い、警官と対等にわたりあった。実に多くのことを学んだ。関扇労働者は二〇年、三〇年の人生で知らなかった数々の真理と感動を、わずか半年で知ることができた。たたかいこそ、働く若者たちの最高の学校であった。

この第一組合の旗を誇り高く、胸を張ってかかげつづける若者たちの中に、元創価学会員であった三人の青年がいた。岩男、井口、毛利。正確には、その当時は、二人といった方が良いだろう。毛利は苦しんで苦しみぬいて第一組合に残り、学会をぬけることを決意したが、まだ、「御本尊さま」と縁切りすることができないまま、押し入れの片隅に、置いたままになっていたから、きっと、まだ、当時毛利の名は創価学会の一員として登録されていたはずである。

運転手は流れ者であり、さまざまの道を転々とした男の行きつく吹き溜りであると山副がいった。たしかにその通りだろう。山副自身、三重の田舎の自作二反、小作八反の貧農の息子に生まれ、少年時代、聖戦の美名に踊らされ、予科練の桜に生命を捨てようとした情熱が敗戦とともにふっとんでしまった。その反動で、村に残された元日本陸軍の物資倉庫の管理をする身でありながら物資を全部、五人の男たちでもちだし売りつくしてしまった。なんと、昭和二二年頃の金にして五〇〇万円というから、ちょっと気の遠くなる悪銭であった。連日、四日市、名古屋、大阪と遊興三昧にひたり、輝ける日本軍の隠匿物資を一文残らず使い果たしたのだ。種やんよりスケールの大きいゴクドーである。気がついたときには後の祭り。村当局も当時のことだから、米軍の追及から逃れることもあり、表沙汰にせず、五人の裏道の英雄たちを村から追放して、ことを収めたという。これが、好漢山副のそもそもの放浪の始まり。そして、最後の身のおさめ所と一生の伴侶とともに子孫を育て、落着こうとしたのが、アサノ・コンクリート株式会社と全自運労働組合。彼だけではない。誰も彼も、同じような放浪の経験と関扇への期待を抱いて集まっていた。

ただ断わっておくべきことは、流れ者であることは、生来、頭が悪いことも不真面目であることも意味しない。人一倍、純粋で生涯をかけ、身体をはって、真実と青い鳥を求めてきた青年たちであったといえる。だが、信じこんでつかまえた青い鳥が黒い鳥であることが多い。

岩男にとっての創価学会が正にその通りだった。字を憶えること、人前でしゃべること、そして何よりも、貧乏から救われることを求めて学会に入った。数カ月、いわれるままに早朝四時に起きて朝の勤行と読経を続けた。燈明をあげ、御本尊を拝み、御題目を唱え、三時間の苦行を続けた。それは、若い岩男でも、汗びっしょりになるお勤めであった。そのこと自体、彼は腹を減らす運動くらいに考えて、とくに抵抗を感じなかった。問題は座談会だった。何度出て話しても、信心すること、拝むこと、それがあなたの幸せと利益を生むという言葉しかでてこなかった。ただただ、題目を唱え、折伏行せよ、ともいわれた。岩男は何か、自分の求めているものと違うものを感じ始めた。一方で岩男は職場では初めての労働組合に疑問とともに魅力を感じ始めていた。よく分からないが、関扇の職場はそれまでの彼の職場――労働組合のない低賃金無権利の職場にくらべると、月とスッポンの違いがあった。ゼニや労働条件だけではない、委員長の寺やんもねっちりとよくしゃべる男やなと思ったが、その代わり岩男のいささかつむじ曲がりの発言も、みんな辛抱強く聞いてくれた。これが、自由とか民主主義というものか……岩男はとにかく、勉強したいと生まれて初めて腹の底から思った。その彼の手に渡された一冊の雑誌『学習の友』には彼をわくわくさせる言葉が一杯のっていた。「労働者が歴史の主人公である」「労働者階級がこ

の世の中を変革する」

岩男はある日の座談会で思い切って、胸につかえていた疑問をぶっつけてみた。

「学会では信心すればよくなる、あんたの暮らしがよくなるというけど、隣の仲間の暮らしはどうなるんや？……自分だけでなしに一人だけでなしに、みんなよくなる道はないんですか……労働者は団結してみんなでよくなることを考える。学会はそのことをどう考えるんですか……」

岩男は真剣に質問した。先輩たちの言葉を待った。だが、その期待はむなしかった。岩男が訴えた〝労働者階級の団結〟という考え方は学会員の教えとは無縁であり、自分にとってトクになるかどうかが、彼らの唯一の関心事だったから。〝自分一人の利益を考えたら、必ず仲間の労働者をけ落すことになるし、資本家は喜ぶだけで、結局、自分も損するから、どうしたらいいんやときいているのに、何にもいえん先輩たちに用はないわ〟と、岩男はサッサと学会を脱会してしまった。

創価学会員の労働運動に対する姿勢は労働者個人の利己主義と分裂主義を一つの特徴としているし、さらに、労使協調思想が基本の考え方となっている。

井口が学会に入った事情はもっとも端的にその特徴がでている。かつて山中副委員長が〝学会の話はご免や〟の一言で学会員中岸班長から、悪い仕事ばかり押しつけられたように、入信しない労働者は徹底的に仕事上の差別をうけた。井口の場合も、臨時運転手から本採用されたいばかりに中岸班長の折伏で入信した。

アサノ運送部時代はこの下級職制＝班長制度をつかって、アサノは運転手の支配を行ない、その尖兵として学会員を利用した。その功績で、中岸は班長の上の職場長という職名を与えられ、車には乗らず、大きな顔で折伏活動を行なっていた。

だが此花運送に組織がえになった時、労働者は〝みんな運転手なのに班長などいらん〟と職制制度の移行に反対し彼らはやめていかざるをえなかった。中岸だけはアサノに泣きついて今もアサノ社員として飼われている。

また、第三組合幹部の一人、学会員出口は自分のトクになる計算だけは天才的にうまかった。組合でかちとった〝公傷制度一〇〇％補償〟を悪用して、ちょっとした不注意のケガも公傷にして一〇日も休み、労働者のひんしゅくをかう行動を平気でやった。会社は学会員のこの反労働者的傾向を使えるだけ使って分裂攻撃に利用した。だが、利用価値がなくなると、やがて出口たちが、第二組合員と一緒に関扇破産とともに、アサノから五万円の縁切り金で追いだされることになる。第一組合が地労委で勝利したことでアサノは関扇に見切りをつけ、また第二組合にも見切りをつけていた。要するに、アサノ独占にとって、創価学会も沖縄出身者も野球部も同盟組織も労働者支配の手段の一つでしかなかったことは間違いない。

御本尊様！　労働者はどないしたらいいんやろ？

毛利の場合がもっとも深刻だった。彼の伯母が、前述の中岸班長の後輩学会員だった関係で、

強く誘われ、三八年に入会した。入ったらじっとしていたらあかんといわれ、岩男と違い朝の勤行をやりながら、折伏にもせいをだした。関扇の合理化分裂攻撃が始まった頃は、一番熱心に動いていた。そのころ柴田たちも、毛利の折伏をうけている。もっとも誰も新しく入信した者がいないことをみると、あまり、迫力はなかったらしい。当時彼は、学会新庄ブロックの地域班に所属していた。彼が真剣に悩みだしたのは分裂攻撃の激化の中だった。会社側の激しい組合分裂策動とアカ攻撃の中で、自分は何を目指し、何を基準に生きていったらいいのか、この厳しい労使の対決をどう考えたらいいのか、考えても考えても、学会の教えからは回答を得られなかった。悩みを伯父に打ち明けたら、

「お前の信心が足らんと違うか。お山（大石寺）詣に一べん行って、御本尊様を拝んできたら、きっと、違うで。わしが面倒みるから行って来い」といわれた。

いわれるままに身体一つで大阪駅に行き、信者の行列に驚いた。伯父がゼニと米を渡してくれた。後できいたら、伯父が何人大石寺に送りこんだかで、幹部昇進の腕を評価されるということだった。何のことはない、毛利は伯父さんの出世ノルマの員数だったわけである。

毛利の大石寺の願いはただ一つ、学会が大宇宙の生命力を凝集したという大御本尊＝板まんだらを拝めば（御開扉）、労使対決の中でいかに生くべきかの疑問への回答がでるのかということ、そして、そこに集まる数千数万という男女の交流の中で、ほんとに頼れる信頼と団結をうることができるか、その点につきていた。

三門を入っても延々と続く大道、富士を背に立つ巨大な殿堂、そこを目指す貧しき人々の大群——それ自体、一つの宗教的ドラマの開幕を思わせ、どこまでも清くすき透った空気の冷たさと厳しさが人々の心に、すでに非日常的な緊張感をつくりだした。灰色の空と排気ガスの中で働き、薄汚れて貧しい大阪の職場と生活のすべてがむなしくみえ、ここにこそ求めている何かがあるのではないか、と毛利も一瞬考えた。何もかも、驚異の連続だった。青年部の隊列は学会の戦闘部隊であるといわれ、どこへ行くのもかけ足だった。各宿舎に別れての座談会。毛利は胸にたまっている疑問のすべてをはきだした。

「どうしたらいいんやろうか……俺たちはただ、一生懸命働いてきた。俺は修理工です。会社は景気が悪くなって赤字だといい、責任を全労働者に押しつけて、組合を分裂させ、残業もさせません。私もいろいろあやまちもおかしました。バクチにこって家財売り払ったこともあります。しかし、職場では真面目に働いてきました。一体、どうしたらいいんでしょうか……第一組合の人たちはみんないい人ばかりです、裏切ることはできません……今、私は何をしたらいいのでしょうか……」

岩男と同じように、みんなの言葉を毛利も待った……だが、やはりむなしかった。

「ただ、信心し、お題目を唱えること。そして、折伏行につとめる中から、御本尊の功徳があなたの中に現証するのです。今はただ、大御本尊開扉の御利益にすがるのです……」

出てくる言葉は、まったく非現実的でコッケイなものだった。労働者も資本家もなかった。階

級もたたかいもなかった。それどころかどう生きたらいいのか……職場を守ろうとする労働者の心になって、考えてくれる謙虚さも暖かさもなかった。ただ信心せよ、折伏せよと……。

そしていよいよ夜半の丑寅勤行——待ちに待った御開扉、薄暗い殿堂は数千の人間の異様なふん囲気に包まれていた。僧侶の唱える経文とともに正面に「板まんだら」が姿を現わす。ただクスノキの大板に彫った「まんだら」、しかも、日蓮筆はウソと証明されている、ただの板っ片。だが人々は願文を口にし、一心に拝み、涙さえ流している。踊るように身を震わせるもの、うずくまるもの——これはもはや人間の世界ではない。人間から、理性も愛も民主主義も、すべてを失わせる狂った世界だ。その中にひきずりこむこの宗教の力が恐ろしい。毛利の心は、急速に冷却し、それとともに、関扇の仲間たちのことを思っていた。

「六〇人の一人ひとりの知恵をよせ、励まし合い、たすけ合って、労働者の職場と生活を侵すものに不退転の決意で今、たたかいつづけている。踏まれても蹴られても、ゼニにも分裂にも敗けず、警察・日本セメント・アサノの干渉にむかって、労働者のすべての力を集めてたたかおうとし世にもまれている。その願いは一つ——ただ、まともに残業して、もう少しましな稼ぎをしたい、そのことを資本家に守らせるために、それを妨げる者とたたかう。そうしなければ関扇運輸に働く労働者の生きる道はない。ここで敗ければどこへ行っても同じ運命が待っているだけだ。どんなことがあっても、この団結を崩してはいけない。第一組合の団結を瞳のように大切にし、地域と全自運のすべての仲間たちとともにたたかいつづける。その中に、われわれの手でつかみ

とる確かな幸せと未来の希望がある。学会は労働者の敵だ。組合を分裂させたではないか！　邪宗は労働者を眠らせる。毛利よ、目覚めよ、自分の眼でみ、自分の頭で考え、仲間のスクラムでたたかい続けよう……」

毛利の胸に、まんだらをつき破り、はるか大阪の仲間たちの声がきこえてきた。

「御本尊様の御利益です。これで、私の身体がきよめられたようです」

「御本尊様のおかげで、私の身体に、生命力ができました」

「さあ、みなさん、この生命力で明日から、苦難をのりこえましょう」

酔ったように、興奮して語る学会員たちの眼は虚空をさまよっていた。毛利はいつの日から、この人たちの目をさまさせるためにも、俺はたたかう、と一人決意し、すぐその場から仲間の待つ大阪へとんで帰りたい衝動にかられた。

第三章　敵はアサノ独占だ！

1　地労委での勝利と上田社長の自殺

地労委での勝利―祝賀会やるか！

ついに待ちに待った日がきた。大阪地労委命令書には次のように書かれていた。

一、使用者は昭和三九年一〇月一六日付、申立人組合員に対する時間外労働の停止の通告を取り消し、従前通りの方法で時間外労働を行なわせると共に、昭和三九年一〇月一七日から時間外労働に就労させるまでの間に申立人組合員が時間外労働によって得たであろう賃金相当額を支払わなければならない。

二、使用者は昭和三九年一〇月二〇日付の申立人組合に対するチェックオフ協定の廃棄通告を取り消し、チェックオフを行なわなければならない。

三、使用者は申立人組合員に対し組合脱退を勧誘するなどの支配介入を行なってはならない。

四、使用者は昭和三九年一一月七日付の田中(秀)、田中(種)、瀬底、石川、三原、井口、大沢、松迫、藤原に対する譴責処分を取り消すこと。

勝った！　まったく全面的な労働者の勝利だ。寺やんは小林弁護士と固い握手を交した。審問の進行状況からみて不利ではないという情勢判断はしていたが、こうまで完全な勝利命令が出るとは考えていなかった。不当労働行為を認めるとともに、残業停止以来の労働者の推定損害額―約一三〇〇万円を支払えという願ったりかなったりの条件だ。

この地労委命令をかちとるうえで忘れることのできないのは、三月末に開かれた大阪総評・南大阪地区評・全自運大阪地本主催の関扇運輸支援総決起集会の成功である。アサノ津守工場の横にある日本セメント空地にトラックをもちこみ、即製ステージをつくりあげ、五時の定時終了後、あっという間に、大阪総評オルグ、南大阪地区評議長、全自運大阪地本柳川委員長を先頭に、一〇〇〇名の労働者が集まったのである。

日本セメントの労務があわてふためいた時はすでにおそかった。関扇、アサノと日本セメントに抗議する労働者の声が津守の工場街にひびき渡った。

この集会の成功のために、関扇労働者ははじめて、地域のすみずみの労働者に訴えて歩いた。解雇者九人を先頭に、全員が、一組合一組合、一人ひとりの労働者に、独占の労働組合圧殺の現実を訴え、みんなの問題として集まってもらえるように訴えた。この集会の成功こそ、これ以後の関扇のたたかいが真に地域に根をはるたたかいの出発点であったといえる。

地労委勝利の報せが伝わった関扇の職場は第一組合員の喜びの声で埋まった。

「よかったでえ、ほんまに！」

「残業料まで入るんやで！　貯金しといたようなもんや！　かあちゃん孝行できるで！」

「そやから、わいははじめからやるなら徹底的にやらな、あかんていうたろうが……」

「何や、カッコいいことといいよって！　年末にやめてどこぞいこうか、いうとったのはどこの誰かいなあ……」

寄場も風呂も、騒々しいおしゃべりと笑いがたえることがなかった。

第二、第三組合はまったく形なしだった。この頃は第四組合から第七まではもう第三に統合されていた。会社へでて第一組合員と顔を合わせる勇気もなかった。翌日、会社の外の会館を借りて第二組合員が集まって、経営陣に予想外の結果についての釈明と責任追及をやった。その会場に入っていく高森を寺やんがつかまえると、「もうあかん。今から比嘉や三野たちに事情、説明してやるとこや」と自嘲的にいっていた。

六月九日、地労委命令を具体的に処理するための団体交渉が開かれた。組合側としては関扇経営陣が逃げだすか、ツメ腹切らされるかもしれないという情勢判断の下に、命令内容を誠意をもって実行するのか、その点の回答を求めた。すでに上田社長をはじめ、吉政も口野も経営陣の様子にはかつての気迫も感じられなかった。情勢に押され、とまどっている様子が言葉のはしはしにじみ出ていた。組合の追及の中で、争議解決の具体的メドを出すことを約束させ、その日から次の二点を実行させた。

① 第一組合員の残業停止を解く

② 委員長他、八名の解雇の撤回

一三〇〇万円の支払いについては、「地労委命令にそって処理しますわ。いま金策について、アサノと折衝中やさかい、二、三日時間を貸して下さい」と、上田社長の約束をとりつけた。

「おい、喜楽別館を貸り切って、祝賀会やろうで！」

「そうやなあ、一晩飲み明かそうや！」

「おーい、第二、第三組合から、またもどってくるで！　坂井も上村もや」

「おーう！」

久しぶりの残業仕事で一汗かいてきた風呂場は九カ月の烈しい攻撃にたえぬき、一一〇名の過半数六〇名を守り抜いた誇りと自信と満足感に満ちあふれた仲間の顔が並んでいた。二〇名の仲間が組合に復帰し、第二、第三組合の大半は福島区にある元関扇本社の一室に出勤して、終戦処理を待っていたようだった。もう関扇社員としての労働はせず、親会社アサノの指示と援助を一日千秋の思いで待っていたのだ。つまり彼らの関扇における労働組合としての存在は否定され、メンツは丸つぶれ、関扇経営陣も途方にくれていたのが実際の実状であろう。

一方、上田社長は一二日になって、組合に「残業賃金についてアサノと折衝しているんやが、どうも別会社のことやし、一べんに話がまとまらんで困っています。そのことで、組合として、ちょっと、力を貸してくれませんか。日本セメントの山下総務課長に会うてくれませんか。そうすれば何とか道が開けると思います」と、申し入れてきた。

組合では検討した結果、それは会社内部の事情だから組合が介入する性質の問題ではないと断わった。六月一四日、午後の団交には会社側はでてこなかった。

「おい、金がうまいことといかんのやで！」寺やんが執行部の仲間たちを見回した。

「その日本セメントの山下に、泣きついてるんやろか……」

「とにかく、ほっといたらあかんな。重役たちみんな雲隠れやで！　ようある手やからな」
田中秀やんがいった。
「みんなで、探そうやないか！　奴らのいきそうなとこ、車で追跡や！」
種やんが呼びかけた。その場から、手のあいているものみんなで、大阪市内の彼らの立回りそうな行先を探し歩いた。

社長、どこへ消えたんや？
心当たりを探すうち、会社側の弁護士・色川法律事務所を思い当たった。どんな手を打ってくるにしても、必ず弁護士に相談するはずである。アサノ―日本セメントの出方によっては、最悪の場合、倒産、夜逃げというケースも考えられる。地労委命令が出て一〇日ばかり、組合員の中に流れた楽観ムードは不安に変わっていった。「金を握るまでは安心できん！」といっていた秀やんの慎重論が情勢を正確にみていたことになるのか……まさか、まだ大阪から逃げてはいないはずだ。
「もしもし関扇の者ですが、今日、上田社長はそちらに行くことになっているでしょうか……」
組合員とバレればいわないだろう。
「ええ、今日、午後こちらに見えることになっております」若い女の声が返ってきた。
しめた！　寺やん先頭に、車二台で目的地にむかった。色川法律事務所のある、ビルの近くに

車を隠し何カ所かにはりこんだ。
エレベーターが開き、上田社長、吉政、口野、岡田の四人が顔をだした。組合員の顔にギョッとして、くるりと方向をかえ、また入口の方へむかった。何人かが後を追った。
寺やんはふと気になって事務所のドアを押した。案の定、中に高森が一人、ポツンと坐っていた。
「どうしたんや、高森さん。逃げて歩いてどうするつもりや？」
高森は観念したか寺やんを近くの喫茶店に案内した。そこで社長以下経営陣とあった。
「すまん、昨日の団交に出られんで……実のある返事をもっていかんならんと思うて、努力しとったんや。もう二日ほど待ってくれんか……日本セメントの山下さんが東京の本社に行って今夜いい返事をもってくることになっとるんや。一六日に、きっと返事する……」
上田社長と吉政は、その前日、山下とあって関扇解決への具体案をきいてきた。山下は関扇経営陣も、アサノの中川社長、藤田重役も経営能力ないから、自分が直接のりだしてやると明言して、さらにつけ加えた。
「一億もゼニがあればいいんやろ！」
帰りに吉政は日本セメントとはいえ一課長の権限でそんなことができるのか、とその疑問を社長につげた。
「あの人にお任せするんや。そうするより他に道はない。アサノから委任されとることやし…

…日本セメントの力にすがるんや」

一日以来、連日の日本セメント、アサノとの折衝――第一組合だけでなく、子飼いの第二の連中の不満をきくのに疲労し切った社長の老いの眼にはワラにもすがりつきたい気持がこもっていた。吉政たち重役たちにはその道にすがる不安は感じられた。比嘉や出口たちから、第二組合員が関扇経営陣をとびこえ、アサノの山下たちと交渉している様子もきいていた。だが、彼らとしてもこの際、日本セメントの山下にすがることが不安だから、こうした方がいいという代案など思いつくはずもなかった。さんざん、第一組合員たたきだしのため、ゴリ押ししてきたことの結果がどうしようもない重みになって上田社長の肩にかかってきていた。この日が地労委命令不服の申立を中労委に提出する最終期限になっていたが、もはやその手続をとって、第一組合とたたかいをつづける採算も意欲もなくなっていた。「ただただ、日本セメント独占の財力で、当面、組合への一三〇〇万円を払ってもらい、後の経営についてはアサノの思いのままにやってもらえれば……何とかその状態にして自分たちは手をひきたい、いや、ひかして欲しい、もう年をとりすぎてしまった……」と上田社長は考えていた。

「よしゃ、一六日まで待ちましょう。われわれ第一組合は、一日も早く関扇の職場が元に戻ることだけが願いや。上田社長、われわれは地労委命令の後、アサノからあんたたち関扇経営者をとびこえて、直接、話し合おうという誘いをうけたけど、組合はきっぱり断わってきたんで

す。分かりますか社長。アサノが後で全部糸を引いてることを組合は知っている。しかし、われわれは関扇の経営者はあんた方だと思っている。アサノは都合のいい時だけ、あんたらを利用しよる。悪くなったら、あんたら、ほおり出しても自分らに都合のいい解決の道をつくろうとしてる。われわれ労働者をゴマかそうとするだけでなしに、上田社長、あんたらも、今、被害者になろうとしてるんやで！　アサノや日本セメントを信用しとったら、えらいことになりまっせ。われわれはあんたらにこの九カ月、えらい目に合わされて、やっと、ここまで頑張ってきた。上田さん、あんた今までやってきたことが、ちょっとでも悪いと思うんやったら、自分の足もとを考えることや」

寺やんのいうことを上田社長は、最後にはうなずいてきいていた。吉政たちももう一言もいわない。

「アサノに頼り過ぎたらあかん……あんたの言うこと、わしなりに分かるで……もう今度だけや、今度だけ山下さんの返事を待ってんか……な、頼んます」

寺やんに頭をさげる上田社長の姿には、合理化開始の頃の面影はどこにもなく、老残の一零細企業主の敗北の影がただよっていた。

その眼がアサノの空をにらんでた！

六月一六日夜、国電立花駅で一人の老人が入ってきた電車めがけて飛びこんだ。運転手がブレ

ーキをひいてもどうにもならない距離である。あっという間のできごとだった。老人のカッと見開いた眼は、苦痛をこえ、はるか彼方の空を見すえているようだった。

背広のポケットから出てきた封筒には、夜目にも鮮かな鮮血がしみついていた。関扇運輸取締役会御中　上田清太郎と署名された会社封筒だった。

「永らくお世話になりました。

今回の労使紛争については、意志と異なり不測の結果を来し、誠実に協力下さった皆様に、何ら報ゆる所なく、誠に申訳ありませんが、総ての責任は代表者にあるのですから、自決いたします。将来のある皆様には御健康に、今後の御幸福をお祈りいたします。

上田清太郎

役員御一同様

職員御一同様

今度の紛争で残念なのは、たとえ地労委の決定がどうにせよ、異議の申立をして行けば良いものを、アサノの指示により、シュンジュンしたため、第二勢力が崩れたためと、会社に金がないため自主的に進めなかったことによる。

残念、残念でたまらん」

（原文のまま）

七日朝の新聞でこの事実を知った組合員は、みんな職場に集まった。一日一日と猫の目のように変わってきた経営者側の動きが、このような結末になろうとは誰も予測していなかった。

仮眠室に集まった組合員の顔にはかつてない沈うつな表情が浮かんでいた。あの厳しい弾圧攻撃の中でも、労働者の瞳は燃えていた。ある時は怒りに、ある時は不敵な笑いに、屈することのない労働者の闘魂がおどっていた。今日の沈みきった悲痛な労働者の心には突如襲ったこの異常事態をどう判断すべきか、必死に探し求める苦痛があった。

新聞論調はいつものことながら、労使の板ばさみで、社長が犠牲になったという表現をつかっていた。「何やて！　労働者の故やて！」セコ松が大きな声で叫んだ。

後で吉政、高森たちが語った自殺前の真相はこうだった。

一五日―組合員につかまったその夜、上田社長をはじめとする関扇重役はアベノの料亭で東京から帰った山下と会った。最後の望みをかけ、祈るような気持で部屋に入った上田社長にむかって山下はいった。

「あんたら、関扇の問題は関扇で始末するんやなあ」信じられないほどそっ気ない一言だった。

「あの、そ、それはどういうことで……」上田社長の声は震えていた。

「どうもこうもないよ、だいたい、このわたしが関扇のこと、なんでそない面倒みる義理があるんや！　関扇のことは関扇で、アサノのことはアサノの経営者がやることや！」

いいたいととだけをいって山下はさっさとひきあげていった。上田社長はしばらく苦ざめて声

も出さず、じっと坐ったままだった。
翌日、関扇経営陣はアサノ本社をたずねたが中川社長はおらず、藤田総務部長にけんもほろろにつき放された。
その日、いったん関扇事務所に引き揚げた上田社長は、突然、四人の重役に「辞職届を出して下さい」といった。その眼は異様に輝いていた。
「これをもって、わてはこれからアサノにもういっぺんいってくる。これをアサノ本社にぶつけてきたるわ！」
「社長、そんな阿呆なことしなさんな！」と、重役たちがとめても無駄だった。
「いや、わては三日でも四日でも、アサノの玄関に坐りこむんや！」と、吉政たちのとめる手を振り切って、アサノ本社目ざしてでていった。アサノ本社に上田社長が行ったのかどうか誰も知らない。

「会社はそないに、ゼニがなかったんか？」
「そや、まるで労働組合がいじめて、ゼニ要求したから社長が死んだみたいにいうとるで！」
「関扇にゼニがないのはあたり前や。関扇ははじめから、アサノとの輸送契約しかない、一銭の自由もきかんアサノ輸送部門やったんや！　一番しんどい労務管理の責任だけとらされるために関扇はあったんや！　上田社長はアサノの名前に乗せられたんや！」秀やんが組合員の疑

問に答えた。
「社長が何や！　死んだのは社長だけやないわい！」と叫ぶ井口の眼に涙が光っていた。
「うちの母親は薬が買えんから死んだんや！　残業停止で心臓の薬が買えんようになって死んだんや！　薬さえ買えたら、薬を飲ませて、静かに養生させてやれたら、まだ死なんでもよかったんや……」
せっかく、とりもどせそうに思えた仕事と職場がどうなるのか、明日からの生活はどうなるのか、関扇がつぶれたら、この責任を一体、誰がとってくれるのか、みんな考えていることは一つだった。井口の悲しみはみんなの悲しみだった。
「そうや、井口のお母はんも殺された、上田社長も殺された……〝社長、あんた、労働者いじめてばっかりおると、畳の上で死ねんでえ〟と、俺が冗談言った通りになってしもうた……殺した奴は同じ奴……アサノや！　アサノが殺したんや！」種やんがいった。
「そうや、みんな、アサノのためや！」山中がいった。岩男が続けた。
「朝日奈は争議のために嫁はんと別れなならんようになった……うちの嫁はんは、ミルクを買うゼニがないから、赤ん坊に重湯のまして育てたんや……みんな、今まで、どないな暮らしをして、頑張ってきたか……ここで敗けられへんで！　これからやたたかいは！」
「そうや、関扇をつぶすなら、アサノに責任とらせるんや！」
労働者は口々に叫んだ。

その時、寺やんが入ってきていった。
「おい、みんな！　もし関扇がゼニを払わん時の用心に、陸運事務所にミキサー車の仮差押え申請のことでききにいったら、もう先に車の謄本とりに行った奴がおるで！」
「え！　誰や！」
「きっと、アサノの代理人や！　アサノはミキサー車はアサノのもんやていうとるんやで！」
「車、アサノにやったらいかん！　何とかせんといかん！　車だけが俺たちの宝や！」
「車は俺たちのもんや！」
もし、間に合うなら一刻も早くミキサー車仮差押えの申請手続をしよう。その場から組合員は手分けして行動を開始した。社長の死にも涙して追憶にひたっている暇はなかった。生きている労働者の生活の根がアサノによってくつがえされようとしていたのだ。

2　バクロされた弾圧の全貌

ミキサー社仮差押え作戦

まさに一日一日がたたかいのあけくれだった。
六月一日の地労委勝利の日から、関扇労働者と関扇―アサノ―日本セメント経営陣との間にくりひろげられた労使対決のつばぜり合いは、たたかいの新たな局面に発展していった。それぞれ

の集団が生活をかけて、必死に出口をさがしだす毎日だった。
第二組合ボス比嘉は日本セメント山下に泣きついて、自分たちのメンドーをみろとせまった。山下は俺についてこい、働かなくても賃金を保証してやる、そのうち関扇破産、第一組合員を叩きだして、君らだけをやとってやろうと約束していたのだ。
比嘉は、藤田にもいった。
「藤田さん、約束をどうしてくれる？」と、比嘉は藤田の眼の前で、頭髪をバッサリ切り落とし、その髪を投げつけた。
また、社長自殺後まもなく、こんなこともあった。アサノ津守工場の金網塀に毛筆、走り書きの檄が貼りだされていた。恨みと憤りのこもった訴えだった。

声　明　書

悪辣な陰謀をもって鬼畜にも優る非道を極め遂に、我が上田代表を死の止むなきに至らしめ、尚、我等関扇従業員を窮地に陥し入れたアサノに対し、玆に重大決意のもと敢然として天誅の刃をとり、あらゆる手段を尽して最後迄闘うことを声明す。

天　誅　組

大阪アサノコンクリート
専務取締役　中　川　一　久　殿

これをみて驚いたのは執行部。組合員にこんな馬鹿なことをするものはいない。関扇の〝三派〟

とあだ名のあるセコ松君も、スグ頭にきて大声はだすが、今や立派な組織労働者である。さては第二組合にでもテロリストが発生したかと調べたら、非組合員の下級職制の一グループであることがわかった。この声明の出される前に、すでにアサノは津守・淀川工場の生産を中止し、六月二三日には関扇自己破産申立が行なわれた情勢だったのである。この檄は一言の文句もいえず、ただひたすら上田―吉政体制の末端業務を身をもって実行してきた下級職制の、押えに押えた怒りの一声だったのだ。

その頃、寺やんたち執行部は、小林弁護士からの情報と緊密な情勢分析にもとづいて、敵の関扇破産―労働者追い出し攻撃を想定し、いかに先手をうつか、その具体的行動を検討していた。

〝敵はアサノだ！〟という腹の底からつきあげてくる関扇労働者の怒りと、ようやく姿を前面に現わしてきたアサノ、日本セメント独占にたたかいの目標を定める方向は〝社長の死〟という厳しい事実の中で全組合員が確認し合った。だが、気持と分析だけでは敵に勝てない。今、必要なことは、敵が関扇であろうとアサノであろうと、関扇労働者が一〇年かかって働き、たたかいとってきた権利と地労委命令でかちとった債権をフルに活用して、職場を新たなたたかいの武武器にすることだ。

この判断から、一七日中に二つの具体的行動を決定した。一つは関扇社の建物の占拠、もう一つはミキサー車四台の仮差押えだった。

ミキサー車の仮差押え――これが簡単な仕事ではなかった。陸運事務所職員の話では、七四台

の車の仮差押え手続きなら、普通、一〇日はかかるということだ。

「駄目です！　情勢は一刻も猶予を許さない。アサノ側が車を押え、事務所を所有権を理由に占拠すれば君たちの職場に根がなくなる。建物と車、これが君たちの職場を守る最後のトリデだ。こうなれば一日でも一時間でも早く、手続を完了するために全力をあげること。敵の方が先に、準備をはじめたことだけは確実だ、さあ、すぐ行動だ」

小林弁護士は情勢の緊急性を説明した。

車の仮差押えに必要な手続は複雑である。①車の登記簿謄本②会社代表者の商業登記簿謄本③車の評価額④納税証明⑤組合員全員の委任状⑥申立書類一式。

これだけのものをそろえるために、任務分担して、それぞれが関係官庁や手続き有資格者のところへ走った。陸運局、府税務事務所、登記所などあらゆる役所の門を出入りして、腰の重い役人たちにお願いして書類作成をいそがせた。中でも、もっとも難物は、七四台の車の登記簿謄本と差押え評価額の査定だった。前者は陸運事務所、労働者の力を借りなければならなかったし、後者は、全自交の整備士免許をもつ組合員の一晩完全徹夜での評価額書類作成が必要だった。六月一八日一杯と一九日朝までかかって、文字通り一睡もせず、すべての書類を準備した。一台一台の差押え評価額も全部、調査し、書きこむことができた。

こうして、わずか二四時間の組合内外の総力をあげた作戦遂行によって、六月一九日土曜日午前中ぎりぎりに寺やんを先頭に、裁判所に、ミキサー車七四台の仮差押え申立の書類を提出する

ことができた。

「終わった！」

組合幹部一同が小林弁護士とともにほっと、胸をなでおろしている眼の前に一台の車がすべりこんで来た。あたふたと降りてきた、アサノコンクリート社員と代理人弁護士の手には、同じ、ミキサー車仮差押え申立書類があった。

わずか、一〇分の差だったのだ。三〇分でも何かの理由で遅れていたら、アサノによる車仮差押えが成功していたのだ。

「ほんまにスリル満点やなあ！　西部劇と同じや！　ええ方が最後の最後で、悪い奴にやっと勝ちよる、あれやで！　ほんまに……」

種やんの冗談どころの騒ぎではなかった。この時、車が組合の手に入ったために車置場と事務所とともに、組合の重要な拠点となり、職場となり、生活の場となり、たたかいのトリデとなっていったのだから。まさに、緒戦における労働組合のアサノに対する作戦勝ちの局面だったといえよう。

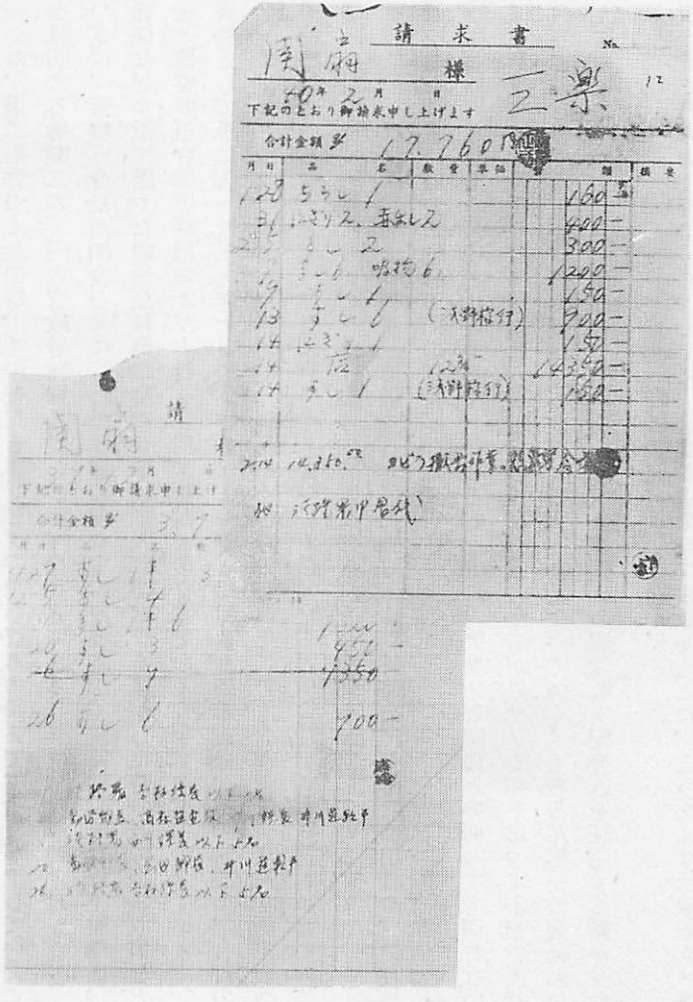
明るみに出た分裂・弾圧の全貌

労働組合による事務所の一時的管理の中から思わぬ副産物がうまれた。それは、前年、合理化

強行、分裂、警察権力の介入にはじまる関扇・アサノ経営者の陰謀の全貌が残された資料によって暴露されたことである。

通常ならこのような文書が組合の手に入るということはまずありえないことである。たとえ労使決戦に敗けたとはいえ、会社は会社である。しかし、四〇年六月下旬の関扇運輸事務所はすでに会社組織の機能を失っていた。六月一八日に、アサノが淀川工場、津守工場を閉鎖し関扇との輸送契約を一方的に破棄してきたことが決定的だった。アサノにはこの二工場を一時的に閉鎖し、城東、魚崎二工場の生産できりぬけ関扇問題にきりをつけ、手に負えない関扇労働者をほおりだそうという成算があった。第一組合員をのぞく、関扇従業員は蜂の巣をつついたような騒ぎになった。「天誅組」の呼びかけもでた。だが吉政たち主脳陣は、六月二三日に関扇運輸株式会社の自己破産申立の手続をするとともに、いずこともなく雲隠れしてしまったのである。仕事はなくなり破産申立てが出て、経営者はいなくなった。非組合員の従業員は櫛の歯が欠けるようにぬけていった。あっという間に、関扇運輸事務所には、住む人もなくなってしまったのである。第二、第三組合員はとっくに逃げだしている。後に残ったのは、その時、総評全自運関扇運輸支部の旗をかかげる五十数名の第一組合員だけだった。

経営者たちが恥も外聞もなく逃げだした事務所の中に、かつての労務関係資料がごっそりつんであった。その中には組合のたたかいの有力な武器となる、大別して三種類の重要な証拠書類が含まれていた。


請求書
関扇
様
三楽
下記のとおり御請求申し上げます
合計金額
17,760
関扇運輸株式会社
明細書
吉政課長後
関扇運輸株式会社
明細書
吉政課長後
関扇運輸株式会社
明細書
課長後
100,000

一つは、第二組合づくりの時、その費用をエンピツ、消しゴムの類まで、会社が出していたことを証明する総額二六万円の吉政労務課長渡しの明細書などである。

つぎは、警察と会社が酒食を共にした料理屋の領収書、府警本部、淡路警察署長以下警備係、交通係など多数に贈った贈呈品目録、警察が職場に入ってビラをはがした時の慰労金領収書など、会社と警察の組合弾圧謀議および実行を証明する数々の文章である。

資料として手に入った三九年七月段階での公安一課との打合せの事実は、その前後の組合員のブラックリスト作成の事実と合わせて、相当早くからの合理化にともなう弾圧クビキリ約束の準備を物語っている。三九年一二月（前ページ下段）から四〇年二月（前ページ上段）へかけての淡路署との接触は、岩男たち、ビラはり事件逮捕の周到な打合せ準備を証明している。

そして、三番目は、関扇のアサノに対する合理化強行と時間外停止にともなう出費や、労務機密費を含む非常時資金三〇〇万円の貸付願などである。

これ以外にも前出のクビキリ資金の貸出願などとともに、アサノと関扇との切っても切れない関係を示す文書は数限りない。これらが、その後、関扇労働者がアサノを相手どって不当労働行為の当事者として地労委に提訴した時の重要な証拠物件となっていく。もちろん第一の会社丸がかえによる二組づくりの証拠は、当然、会社の組合活動への露骨な支配介入を証明する動かせない証拠となった。

組合はこれらの文書のうち、とくに、警察関係の証拠書類をもとに、とりあえず大阪総評・全

自運大阪地本・関扇運輸支部の連名で、淡路警察署長等を収賄容疑で告発した。一ヵ月後、検察庁は自分も一枚かんでいるビラはり逮捕事件のことも考えたのか不起訴処分にするという一枚の葉書を送ってきた。

組合はここでも、また新たな敵の野合結託の事実をはっきり知らされた。この警察の収賄事件不起訴とともに、検察庁は、ビラはり事件の〝不法侵入〟と〝建造物損壊〟を理由に岩男と藤原を起訴したのだ。

「うーん、また、敵や！　検察庁に裁判所、数え切れへんでえ！　アサノに日本セメントに、警察に陸運局……えーとまだあったで……そや、安定所に、府の労政課か……両手で数えきれへんわ！」セコ松がまた悲鳴をあげた。

「全部、敵ちゅうのはあかんで。警察や検察庁はまず、敵や。そやけど、他のとこは、そないきめつけるのはあかんで」藤原がセコ松をたしなめるようにいった。

「そやけど、ほかのとこも、みんなで押しかけて抗議せんと、すぐ、悪いことしよるで！　松川事件の弁護士さんがいうたちゅう……」

「たたかいの主戦場は法廷の外にある」

「そや、そやろが、藤原さん……」

セコ松君は大きな身体をゆすって、胸をはった。

関扇労働者五十数名はこの一年足らずの敵の猛攻撃の中で鍛えられた。自分たちの残業をとり

あげ職場を奪い、情け容しゃなく外にほおり出そうとする敵の正体は何か、そのことを無我夢中でたたかいながら教えられた。

敵が攻撃を強めれば、こちらもスクラムを組み直す。関扇労働者は不起訴ぐらいでひっこみはしなかった。この時つかんだ敵のマル秘文書を縦横に駆使して、これ以後の法廷、地労委など、あらゆる場で、敵の不法不当な労働組合破壊工作の実態をバクロする戦術をとっていく。

3　アサノ本社へおしかけろ

さあたたかいの態勢づくりを！

七月から、この年の秋にかけては、アサノの意をうけた裁判所の破産宣告―別企業による操業開始作戦をいかにくいとめるかが、組合の主要なたたかいの方向だった。

組合員を主力二部隊に分けて、一隊は、関係役所に連日、抗議行動を行なった。

「何で、破産宣告申立なんかうけとるんや！」

「破産宣告は労働者に対する不当労働行為やで！」

「アサノの労働者追い出しの陰謀や！」

「そないなことといっても、破産申告があって破産原因があったら、裁判所としては宣告出さざるをえんのでっせ」大阪地裁民事六部の係官が答えた。

「破産原因？　何や？」

「破産原因とは、資産と借金のアンバランスがあれば、原因ありいうことですわ……」

「何やて……資産と借金のアンバランス？　そんなもんどこでもあるやろ！　ちょっとでもあったらすぐ、破産にするんかい？」

「われわれは、地労委で、会社の不当労働行為を証明させたんや！　会社はわれわれに、ぎょうさん貸しがあるんや！　関扇かて、アサノかて同じや！　あんたら、裁判所は〝破産法〟とかで労働者の権利をとりあげるんか！」

寺やんや秀やん、藤原たちが先頭に立って、裁判官をつるしあげた。たびかさなる権力機関による弾圧・不当待遇・差別の中で、労働者の態度は厳しくなり、強い言葉で役人たちと対決することを憶えた。いつの間にか、権力に対しては市民や労働者が、身体をはって、強い抗議の声とスクラムで立ち向かう以外に、正義を貫徹する道はないことを彼らは身体でつかんだ。

「あんたらが、営業認可をした会社をそんな簡単につぶしてしもうてええんか！　あんたら、監督官庁として行政指導せなあかんやないか！」

寺やんの腹の底からでる太い声が陸運局職員をふるえあがらせた。

断わられても逃げられても、毎日毎日、抗議と要請をつづけた。アサノ本社と陸運局と大阪地裁民事六部、この三つの建物を雨の日も風の日も関扇労働者は訪ねた。

半数の留守部隊は、津守と淀川の事務所を守った。車の差押えに失敗したアサノが、必ず、実

力で建物の取り返しにくるであろうという情勢判断の下、夜となく、昼となく、大勢の労働者で守った。その頃、全自運は、闘西方面だけでも、阪神急行、石川定期、関西急送各支部の争議団をかかえていた。また、生コン共闘各組合に対しても合理化攻撃は厳しく、三生運送では人員整理、東海運では協定破棄・賃金切りさげとたたかっていた。苦しいたたかいの中でも、同じ全自運産別に働く運転労働者として、おたがい助け合い、支援しあった。大阪柳川地本委員長の呼びかけで、全自運の仲間たちは連日連夜の関扇職場防衛の泊りこみにかけつけてくれた。米一握りと残業一時間分の給料を関扇のためにカンパしてくれた。

昼間、手のあいている労働者は内職をした。ワイシャツの箱の中にいれる、スフの糸を通して結ぶ仕事だった。この内職は、生活費稼ぎではなく、職場を守りながら、闘争資金かせぎとせめて風呂代だけでもというのが目的だった。

この時期、生活費は基本的に失業保険でやることにしていた。失業保険金の基礎としては、地労委命令の方向で、過去六ヵ月間、残業したものとして金額を算定したので、平均一人、二万七、八〇〇〇円の手取りになった。従って楽ではないが残業なしでたたかいつづけた時期と収入内容はそれほど変わらなかった。

この失業保険金をとるのにも、また一つ権力機関とのたたかいがあった。まず破産申立以後は関扇職員は一人もいなくなったから、離職票を書く総務課員がいない。そこで賃金台帳をみんなで、ワッショ・ワッショと運んで、職業安定所の職員に離職票を書かせた。ここまでは、まあ通

常の手続である。次に、失業保険金の受取り場所の問題でハタと困った。それぞれの住所の近くの安定所でもらうということになれば、大変である。場所もバラバラ、受取り日もマチマチ、この団結して職場を守るべきときにそんなことをしているわけにはいかない。何とか、一括してとる道はないか……みんなで知恵をしぼった。

……失業保険金の受取り場所は法律によれば、住所または居所……

「そや、みんなで府庁へ行こう！」

また、大挙して大阪府庁の玄関を入り、失業保険課の課長を呼びだした。

「あの……住所いうたらどこでっしゃろ？」

「それは、あなた方の住民登録のある場所です」

「はあ、さよか……ほなら、居所いうのは？」

「居所は、実際にあなた方の居るところ……」

「はあ、さよか……そないすると、私らみんな、今争議中で、職場に寝泊りしとるよって、会社のある西成区津守町が居所ちゅうことになるわけでんなあ……」

「その居所の証明はどこでしてくれまっか？」

「そんな証明はありまへん……」

「あほな、ちゃんと居所とあるやないか」

追及し、けっきょく、津守の民生委員の証明で、一括してもらえることになった。

この頃は、また、地域へのオルグと闘争資金づくりのためのアルバイトにいく体制もとっていた。のちの生活保護でたたかう時期になってからのような全面的体制にはなっていなかったが、一部の仲間たちが、交替で出かけていった。オルグの人たちはたたかいの現状を訴え、支援を呼びかけながら品物を買ってもらった。また、アルバイトもあらゆる仕事にでかけた。いずれにしろ、この時期のアルバイトは、あまり固定した長期の仕事でなく、闘争資金のプールが目的だから、本職の運転は少なく、その日その日の雑役か、職場でできる内職が多かった。

たとえば、外では土方か、家のとりこわしの請負い。少し臭いが、いい稼ぎになるのはこえくみ業のホースもち。これは一日四〇〇〇円にもなった。内職の方は、ビニールの袋はりなどもあったが、電気代がかさんで結局赤字になった。

こうして、みんなが稼いできたお金は、全部、闘争財政責任者、秀やんのとこへ集中する。この人がまた、ゴテて種やんあたりが広げた大風呂敷をしめるだけでなく、ゼニの方も、またまったくのケチケチ体制。全自運への組合費とたたかいのための交通費、これだけはだすが、あとはよっぽどのことがないと支出しない。すべて、闘争勝利のためのオルグに集中するこの考え方と日常体制確立の努力こそ、一八五六日の長期闘争を可能にした大きな理由の一つだった。

倒産の結果、全員が残業ストップから失業保険金暮らしに移行しすでに一年近く、二万数千円での暮らしに慣れていったことも重要な意味があった。寺やんたち指導部の考え続けたきりつめた生活で、日本セメント独占と対決し、責任をとらせるたたかいへの態勢がしだいに、現実のも

のとなりつつあった。

操業再開の挑発！　アサノ本社へ押しかけろ！

六月以来の関扇第一組合員の職場を基礎にしたねばり強い破産宣告反対のたたかいに対して、アサノも着々と彼らの意志を貫徹させようと動いていた。

七月一三日には組合のミキサー車仮差押えに対する第三者異議の訴訟を起こした。そしてアサノは八月末、関扇運輸と取引のあった精光自動車、鈴木石油などの債権者を動かし関扇内部破産申請につづいて外部破産の申請を行なわせた。

その頃、精光自動車外間社長が同じ債権者として話し合いたいからと組合に申しいれてきた。どうせ、懐柔工作だからと思っていたが、飲み屋で話したいということなので、寺やんを先頭に、種やん、柴田、森などという、飲んべえがみんな出かけていった。案の定、

「いや、世の中はやっぱり、川の流れにさからわん方がいい。関扇はもうつぶれてしもうたし、あまり意地をはらんで、お互い折り合いのつく線をみつけだすのが、一番いいことですなあ」

などと、その沖縄出身の社長は、一人あかい顔してしゃべっていた。その間、話の方はうわの空で、関扇最強の飲んべえに食道楽連中がのむこと、食うこと。何しろ、お酒にも肴にも不自由するそのころのこと、いや、日頃のウップンを思い切って晴らすこと、晴らすこと。追加注文も遠慮せず、全部平げて、はい、ご馳走さまと、みんなで帰ってきてしまった。

また、中馬大阪市長の秘書をやっていたことのあるMという男から、地評に話をもっていき、手打条件がもちだされたことがある。その時の話では、中馬会のメンバーである、ある銀行筋が中に入って、一〇〇〇万円のゼニだけで手を打ちたいということだった。そうでないと、アサノは近々、車をもちこんで仕事をさせるから、必ず、トラブルが起こると脅かされた。

もちろん、組合は関扇労働者の権利をわずかなゼニでかいとろうというこの話をけった。すると、アサノは今、府警の警備・公安に手を打っているからという脅迫がどこからか聞えてきた。

こうした、さまざまな脅迫やはたらきかけのある中で、ついに一〇月六日、破産宣告が出された。そして、待っていたとばかり、翌七日、アサノは工場を再開し、アサノの城東工場の運送をひきうけている恩加島運輸の車をもちこんで、生コンをつみだした。

組合は歯がみした。自分たちの眼の前で、操業を始めるのを黙ってみていなければならない。全自運や地域の仲間たちが応援に来てくれても手一つだせない。自己破産申立から四ヵ月の冷却期間をおき、今、第一組合員に挑発をかけ、手を出せば一気にほおり出そうという構えをみせて車を動かしている。

執行部は敵の情勢を判断して、ビケをはって、出荷妨害する戦術はとらないことを決めた。

「手を出すんやないで！　みてみい、奴らの手に持っとるものを！」

はやる組合員を押えて、寺やんが言った。アサノの労務や私服たちの手にあるのは、カメラ、8ミリ撮影機、携帯用マイクまで肩にかけている者もいる。門の外には西成署の警備がいる。明

らかに、もし、組合が出荷を阻止すれば、「威力業務妨害」にひっかけるため、証拠をとる目的だ。そして、さらに、トラック二台の大阪府警機動隊が待機している。ゴボウぬきにして、できるだけ大勢をぶちこんで、気勢をそいでおいて、一気に「立入禁止」仮処分を強行しようという計算に違いない。

「おい、出発だ！」

「どこへ行くんだ、どこへ！」

「梅田や！　アサノ本社へ押しかけるんや！」

関扇労働者の総抵抗を予想した敵の裏をかいて、みんな梅田の阪神ビルを目ざした。阪神デパートの七階に、アサノコンクリートの本社と日本セメントの大阪支店があるのだ。

寺やんの胸の中は複雑だった。いよいよ、アサノとの全面対決だ。社長の自殺の時からこれからのたたかいはアサノとだという気持は組合員の中で、何度も確認されてきた。警察や権力機関とのたたかいの中でも、そのつど、陰になり、日なたになり、独占資本の立場を擁護する、体制と黒い影を常に感じてきた。今、関西経営者たちの眼が関扇争議の収拾の方向にむけられている。日本セメント―アサノの力で、関扇労働者をふり切ることができるか、その点に集中してきた。

一方、小林弁護士の話でも、今まで地労委で下請関連企業における不当労働行為を親会社に責任をとらせた例はないという状況がある。別会社の形をとっている大独占企業が当事者として下請の労働者に対して、不当労働行為の責任をとった例は皆無ということなのだ。

「しかし、やれんはずはない。関扇の場合は、これだけ、アサノとの結びつきもはっきりしている、証拠もある。われわれがくいついていけば道はないはずはない……弁護士さんもいわれた。日本の無数の中小零細の系列下請会社労使が、今後、情け無用の独占のやり方にくさびをうちこむ、突破口となる任務が関扇労働者にはあるんだと……だが、一体、今日のような敵の威圧的なやり方にたいして、どんなたたかいをしていけば、いいのか……」

阪神デパートの雑踏の中を、抗議シャツを着た五〇人の男たちが進んでいく。〝社長を殺したのはアサノだ！〟〝アサノは関扇労働者に仕事を与えろ！〟〝破産宣告は不当労働行為だ！〟〝アサノは俺たちを殺すのか！〟

胸にも背中にも書きこまれた切実な要求の一語一語……だが、このはなやかに装った、消費文化のメッカの中では、異様な風態にみえる。不思議そうに見送る母子もある。

「俺たちだって、慣れたとはいえ平気なわけじゃない、誰が好んでこんなことを……俺たちもできれば、妻や子をつれて、あなたたちのように、買物の一日を過ごしたい……だが、今俺たちは家族つれだって買物できる生活を保証させるために、責任のがれをし、労働者を見殺しにしようとする資本家をつかまえるために、こうして階段を昇っていかなければならない……」

みんな空腹をかかえ、七階の大食堂の真中の通路を眼をつぶって通りぬけ、真っ直ぐ大阪アサノ本社のドアに体あたりした。驚くアサノ労務課員たちの前に、関扇労働者の怒りの顔が並んだ。

「中川社長出てこい！　われわれ、関扇労働者は大阪アサノコンクリートの不当な操業開始に

抗議しにきた」

「いえ、社長は今その、おられんので……」

「逃げたな！　どこや、どこいった！」

「部長出せ！　部長を！」

夏以来、連日続けられた抗議の行動だったが、この日の労働者の怒りの声は七階の全フロアーにひびきわたった。日本セメント事務所では様子を知って、あたふたと労務がでいりしている。

「アサノが責任をとるまでわれわれはたたかいはやめない！」

「われわれはアサノを不当労働行為で提訴する！」

「アサノは関扇労働者に仕事を与えろ！」

「われわれは何度でもくる！」

「要求通すまで、何べんでもくると社長にいうとけえ！」

労働者はアサノ本社から日本セメントに移動し、抗議をつづけた。

こうして、機動隊、私服総動員の操業開始というアサノの挑発行為にのらず関扇労働者は、労働者階級連帯の力で、日本セメント―アサノ独占を包囲し、追いつめる、長期かつ壮大なたたかいの第一歩を踏みだした。

帰りにエレベーターにのった。おりる時、可愛らしいエレベーター嬢が組合員のポケットに、紙包をいれていった。

「忘れものです」
「誰ぞ、他の人のものと違いますか……」
「いえ、お客様のです。どうぞ」
「……??????……」
「毎度、ありがとうございました」
彼女は深々と頭を下げた。
みんなの前で、そのチリ紙の小さな包みをあけてみた。中には、たべかけのおかきの袋が一つ、そして紙片に走り書きで「頑張って下さい」とあった。
「頑張って下さい……頑張って下さい……」
何度も、何度も、この一言をみんなに読んできかせた。みんな泣いた。やさしいその一言の励ましの心に泣いた。一粒、一粒のおかきをみんなで一つずつ、かみしめた。どんな贈物にもまさる、同じ働く娘の激励……俺たちを応援してくれる仲間が、この大阪にたくさんいる、俺たちのたたかいを見守ってくれてる人がぎょうさんいる、俺たちは敗けられない、俺たちはもう俺たちだけの身体やない、全大阪の労働者のためにたたかうんや……みんな、いつまでも、あの、さりげなく頭を下げてくれた阪神デパートの娘のことを思っていた。
「そやけど、キレイな娘さんやったなあ！」
「そや、日本一の美人や！」誰かがスットンキョウな大声をだした。

第四章　闘いのなかでメシ食うんや

1　メシが先かたたかいが先か

社長自殺事件から、破産宣告、そして関扇労働者を挑発するような操業再開へと、この時期のたたかいからアサノ独占が真の敵であるという事実が誰の眼にも明らかになってきた。

だが、関扇労働者が身をもってつかんだ、この真実を、白日のもとにサラし、アサノを社会的制裁の場にひきずりだすことが、どうしても必要だった。その目標が法廷での刑事事件の勝利であり、地方委へのアサノのひきずりだしであった。

アサノは関西の独占企業代表として、あらゆる手をつかい関扇労働者に直接、責任をとることを回避しようとした。具体的には四〇年暮から四一年春にかけて次のようなことがあった。まず、組合員が車を仮差押えし、物件の監視人として住みこんでいることに対して、アサノは破産宣告の後、管財人に対し家屋明渡し請求の訴訟を起こした。この不当な訴訟に対しては組合員は法廷に抗議の腕章を着用して出席し、はずすことを要求する裁判長と議論し続け、何度も開廷できない状態が続いた。弁護士は女性が室内でも帽子をかぶることとどこが違うかと主張し、組合は腕章はたたかう労働者が当然つけてるものやと頑張った。

また、誠光自動車などを利用し、債権者会議を有利にすすめ、この面から労働者追い出しの作戦を急ぐアサノに対しては、一つひとつの債権を確認する手続きをふむように要求してたたかった。

とくに誠光などアサノの腰巾着の債権は徹底的に否認した。

もっとも中心的なたたかいは、直接の使用者ではないようにみえるアサノが、実は真の使用者としてふるまって組合に介入しているのだというアサノを相手とする不当労働行為の追及だった。つまり「関扇運輸としてなしてきた不当労働行為はアサノ社の命令指示のもとで行なわれたものでアサノ社は、それをおおいかくすために関扇の破産を申請したものである」ということを告発していくことが、一番難行していた。地労委の使用者側委員が「使用者でないアサノは不当労働行為の相手とはならない」という立場で猛烈な反対行動にでたからである。その背景のひとつには、労組法は、組合活動などを理由にして「使用者は」次のことをしてはならないと定めているところから、アサノは使用者ではないということがタテにとれたこと。次に親会社の子会社に対する経営責任と不当労働行為責任の追及まで、他の企業でも可能にする道を開く審問そのものをやめさせようとする、大阪経営者団体の圧力があったのだ。

こうして法廷と地労委の場で、困難で辛抱強いたたかいが続けられている最中に、六〇人の労働者の失業保険給付期限の切れる日がやってきた。

失業保険が切れたら、何でメシを食っていくのか――組織財政の中からやっとひねりだした一律五〇〇〇円のボーナスで過ごした四一年の正月がすんで間もなく、組合員は連日この問題でしんけんな討議を開始した。二月から三月の間にほとんどの仲間の失業保険給付がなくなるのだ。

めしが先か、たたかいが先かと、それぞれの腹の中にある疑問を率直にだし合っていいあった。先輩争議団の経験に学ぼうと東京争議団の日本ロールや京都の小川分会などへ代表を送った。

「組合の正しいことは分かっとる。正しくてもメシが食えんではたたかえん。うちはもう一人赤ん坊が生まれるんや！」

「今まで、さんざん、家族に迷惑かけて、犠牲にしてきたんや！　もうこれ以上は無理や！」

「馬鹿！　そこが、敵のつけ目や！　アサノは失業保険が切れたら、俺たちが散ってしまうだろうと、それを待ってるんや！」

強気のものも、弱気のものもそれぞれに切実で血のにじむような言葉のやりとりだった。五〇〇日をこえたたたかいの重みと泣きつく妻や親兄弟の言葉が男たちの胸をしめつけていた。

執行部は全国の争議団の経験を分析し、関扇での五〇〇日のたたかいの成果の上にたって、つぎの方針をうちだしてきた。

第一に、めしが先かたたかいが先かという考え方はおかしい。まともにめしを食うためにこのたたかいが始まった。このたたかいに勝つことが、運転労働者がよりよい職場でよりよくめしを食う道である。たたかいには困難はつきものである。だが、あくまで、たたかいの中でメシを食う道を切り開くべきである。

第二に、その観点に立って、アルバイトの道より、生活保護をとってたたかいつづける道を提案する。

この提案をめぐって、津守でも、淀川でも激しい議論が行なわれた。まず、「なんで、そんなにしんどい目してまで、たたかわんとならんのや？」という疑問だった。これは理屈というより五〇〇日のたたかいの中から生まれた実感に近かった。執行部は答えた。

「たしかにしんどい。楽なたたかいではない。しかし、よう考えてみてくれ！　五〇〇日はムダに過ぎたんじゃない。地労委で不当労働行為の命令は勝ちとった。寺やんたち九名の解雇無効の判決もとった。会社と警察の贈収賄の事実もつかんだ。車と事務所も、事実上差押え管理している。そして、今、アサノが不当労働行為の張本人だから、すぐ関扇支部の組合員に仕事をさせるように企業再開しろ、失った賃金を支払えと救済申立てをしているのだ。苦しいが、ここまでかちとってきたのだ。この重大な段階にきて、たたかいを放棄することはできん」

そういわれれば、誰も反論できなかった。たたかいは確実に一つひとつ成果を勝ちとっていた。

次に出た意見は「たたかいの中で生活の道を考えるにしても、アルバイトで技術を生かして働いた方がいい収入になるし、積極的な生活ができるじゃないか」という意見だった。寺やんが答えた。

「たしかに、生活保護での暮らしは苦しい。アルバイトに運転技術でも生かせば、はるかにいい暮らしができることは間違いない。だが大事なことは職場に根を下して、できるだけ早く敵を追いつめることが目的で、生活はそのたたかいを支えるものである。ところが、他の争議団の経験でも、アルバイトでいい収入になればなるほど、アルバイト仕事が中心となり、時には、

着服したり、生活が人によってマチマチになったり、ぜいたくになったりする傾向がある。つまり、結果としてアルバイト主、たたかい従の姿勢が生まれる。従って、生活は生活保護水準で切りつめ、すべてを職場を基礎にした一日も早いたたかいの勝利を目指す、たたかいの生活づくりに集中すべきである。そのことが資本家の不当労働行為を止めさせ、職場復帰する日まで生活保護を活用するという生活保護法活用の精神にも合致する」

つぎにでたのは、「生活保護では暮らせん」「生活保護なんか恥ずかしい」という意見だった。後の意見は数字や生活というよりは、周囲の生活常識の中に存在する保守的な姿勢のせいだからなかなか簡単には解決せず、保護をとるようになっても、たえず、繰り返しあらわれる考えだった。前者については、一体いくらあれば暮らせるか、今までの残業停止時代、失業保険時代の実際の数字に基づいて、各人から最低必要経費を提出させた。その際、関扇の会社相手に契約を結んでいた、電気器具、洋服などの月賦の掛金は、それぞれの店に話をつけて争議解決の日まで待ってもらうことにして、出費から除外することにした。

こうしてださしてみると、家族の多少で、額に違いはあるが、基本的には生活保護収入プラスαで生活できやしないかという結果がでてきた。

この段階になってみて、寺やん、秀やんが中心になって、残業なし、または失業保険だけで暮らす、ケチケチ生活方針を意識的にとって、一年半近くやってきたことが、非常に重要な意味をもっていたことがみんなに理解された。山中副委員長がいった。

「俺たちみんな、今までも生活保護者なみの暮らししとったちゅうことになるで」

「そや、寺やんや秀やんにうまいことのせられて、貧乏暮らしの訓練されとったようなもんやで！」

種やんがつけたした。この日の集まりでは、比較的、執行部提案が理解されたかにみえた。そのときNが立っていった。

「執行部のリクツはよう分かるで、聞いとったら、その通りやと思うわ。そやけど、やっぱりなあ、生活保護はカッコ悪いでえ。家族・親類に泣きつかれるんや！　わいはよう説得せん、誰ぞうちの嫁はん説得してくれるか……」

Hが続いて立った。

「それもあるけどなあ、一番わからんのは見通しや。アサノとケンカするちゅうのは分かるで、一体、これから、どうなるんや？　執行部には勝てる自信があんのか？」

執行部の中で、種やんがまず口をきった。

「そんな、見通しなんかいうても、こうなって、こうなるゆうようなことが分かっとるなら、そら、誰でもやるに決まっとるわ。分からんさかい、こうやってみんなで討議しとるんや。車券買うのと同じや。初めから、勝つ奴がきまっとるのは八百長や！」

寺やんがひきとっていった。

「争議は競輪とは違う。当たるも八卦、当らぬも八卦とも違う。たたかいには必ず法則みたい

なもんがある。しかしやなあ、ロールの労働者が〝争議に見通しはない、勝ったときが見通しや〟っていうたようやけど、それはこういうことやと思う。見通しは、自分一人でやる仕事なら何時・何日にこうしようという計画も立てられる。しかし、争議は敵とのたたかいなんや！むこうが強けりゃ、見通しもくそもない、今日にでも叩き出されてしまうで。こっちが団結強うなって、追いこんでいけば、割合はよう勝つこともあるかもしれん。大事なことは、それを決める力は俺たち自身がたたかってきり開いてゆくもんやということ」

「それとやな、そんな、ずーっと先のことまでは分からんけど、当面の目標ちゅうか、フシみたいなものはあるやろ」

秀やんがいった。

「関扇の不当労働行為を徹底的にバクロし、地労委で勝つという目標、それから、今はアサノをどうしても関扇のかわりに地労委の椅子に坐らせる、これが一つの目標や。ヤツラをひきずりだせば、勝利に一歩近づくことは間違いないんや！」

執行部の説明を黙ってきいていたHは帰りぎわに松園にそっといった。

「俺はやっぱり、何時、どうしてこうなるという、見通しがはっきりせんようなことを生保までとってたたかう気にならん。嫁はんも病気やし、子どもは一年すんだら二年になるんや！生活は見通しなしではできんのや！」

「おい、もう一ぺん、話し合おう……」

「何ぼ話しても同じや……俺が弱いんや……みんな、えらいと思うで……すまんとも思うでしやないんや……元気でな……」

黙って、手を握って立去っていった。今日もまた、二人そっと消えていったのだ。「俺はいいんやけど女房がなあ……」と別会社に就職していった。

寺やんたち指導部は六〇人中半数の組合員が戦列から離れていく中で苦しんだ。だが、残業ストップでたたかう生活の最初の試練の時期とは苦しみ方が違っていた。寺やんは敵のねらいも分からず、労働者の信頼も薄かったあの時期の方が困難だったと思った。

敵が失業保険切れで労働者が蒸発することを期待していたことは間違いない。このもっとも困難なときを切り抜ける道はこれだけである、敵が権力機関の命令に従わず、審問にも応じようとしない不法不当なやり方で、職場と賃金を奪ったのだから、われわれの正義の立場を貫くために生活保護でメンドーみさせるのは権利である、この考えが残った三〇人の強い確信の基礎であった。〝敵が不法な労働者圧殺行為にでているのだから、われわれは自衛のために、南ベトナム解放民族戦線のように、敵の武器をとってたたかおう〟

このガメツィ闘魂が労働者の胸に燃えはじめた。残業停止から失業保険暮らしへと一年数カ月の耐乏生活の中で鍛え、大阪らしく、ちゃんと生保で暮らせるゼニのソロバンもはじいた。正義もわれわれの側にあり、生保でたたかう権利もある――この確信が男たちの団結を支えたが、生保のたたかいの困難さは、その一人ひとりの権利意識が日常生活の中でためされる点にあった。

おやじは、〝生保は権利や〟とわりきっても、家族や血縁、近所の中で、そういってすませない環境の中で暮らしているのだ。生保を現実に獲得するたたかいから、真の生活と権利を守るたたかいが開始された。

2　生活保護体制をかちとる苦闘のなかで

生保闘争は決めたけれど……

生活保護でたたかおうの方針は決めたけれど、生活保護はどうすればとれるのか、どんな手続きが必要なのか、知らないことばかりだった。津守、淀川、それぞれから生活保護担当者を選んで、イロハのイから勉強し、〝生活と健康を守る会〟の人たちに相談した。

「組合の考えは正しいですな。しかし、保護は、一人ひとりの労働者の自覚と権利意識がしっかりしとらんと、なかなか簡単にはとれまへんでえ！　まず、本人がしっかり考えを固め、家族と話し合って、たたかいとるという気持ですねえ、大事なことは」

守る会の人にいわれて、あらためて、みんなで、たたかいの中で生活保護をとる考えと思想を学習しなおした。この時期、二九名の脱落者のうち、一〇人は生活保護闘争の困難さと、苦労して手にするものの少なさを考えて落ちていった。

納得いく学習と討議を積み重ねてから、三十数名は民生委員、福祉事務所、市役所、府庁など

の民生機関をかたっぱしからまわり、連日押しかけた。とくに地元の西成区役所と東淀川区役所は一週間ぶっつづけに通い続けた。いわれたとおり、役所ではなかなか首をタテにふらなかった。

「あんたらのような立派な体格して働く能力もってる人たちに、生活保護は適用できません」

といって、役人はジロジロとみんなを見回した。一瞬みんなひるんだ。なるほどいい身体が多いのだ。やせているのは、病み上がりの山中と毛利くらいのもので、後はみんなまことにガッチリとたくましい。昼ぬき、夜ラーメンの暮らしをしてもあまりやせていない。とくに七〇キロ以上ヘビ　級の柴田やセコ松兄貴や岩男たちは思わず肩をすぼめた。

「身体がええのは親の授かりものや。俺たちは、アサノのために不当に職場を奪われ、この身体と腕をつかう場を奪われたんや！」

種やんがくい下がった。

「君たち、働く意思はあるんですか？」

「そら、もちろんや！　働きたくてウズウズしてるんや！」

「そんなら、アンコでも、街のくず拾いやっても、保護の倍以上の収入になりまっせ」

役人はネチネチとからんだいい方をする。

「あんた！　俺たちは、アサノに企業を再開させて、就労するためにたたかっとるんや！　よそに行って働くぐらいなら、とっくにいっとるわい」秀やんがくいった。

「あんたらはアサノの肩をもつ気か！」

「いや、別に、そんな……」
「よそにいって働けいうことは、アサノとのたたかいをやめゆうことやからな。いうとくけどわれわれは、憲法・労組法を踏みにじって、労働者を追い出そうとするアサノの考えをあらためさせようと、毎日、たたかってるんやで！」
何度も、どこでも、同じやりとりが行なわれた。今日も、明日も、何十回となく各区役所で抗議のたたかいが続けられた。
淀川の福祉事務所とのやりとりのなかでは、
「もし、アサノとのたたかいを役所がかわりにやって、要求とってくれるなら、あんたらのいうとこへ働きにいくで！」と、岩男や柴田たちが坐りこんだ。
生活保護のたたかいはとってからの低い生活との対決がたたかいであるとともに、毎月、役所のイヤミや周囲の無理解にたえることが、それ以上に困難なたたかいの中身である。若い柴田の場合は、兄が生保闘争の中で脱落した口惜しさを胸に秘めて、その巨体を役所に運んで保護をかちとった。
「裏切者！」
「馬鹿野郎！」
と、兄弟で何度、ドナり合ったことか。柴田兄弟は瓜二つといっていいほど似ている。彼は弟の面目にかけて裏切るものかと、この生保闘争の中で、腰がすわったという。それ以来、盆正月

に滋賀の田舎に帰る汽車の中で一言もお互い口をきかず、帰りついた親の前でとっくみあい、近所にわざと聞えるように、「裏切者！」と彼は兄貴を呼ぶことにしているという。親も兄貴も、近所に恥ずかしいからやめてくれと頼むが、彼はますます大声をあげて叫ぶ。にもかかわらず、いっしょの汽車で帰るところなど、ほほえましい。
その柴田が、保護をとりはじめた頃、順番を待っている老人や病人の間で、七五キロの身体を小さくしていたら、ある老人がそっときいた。
「あんたは何の病気ですか？」彼は慌てて思わず答えた。
「は……あの、頭の病気や…脳の具合が……」としゃべってしまって、自分で苦笑した。権利であり、ちゃんとした理由があっても、やっぱり若者がもらうこと自体、恥ずかしいことと思わせる雰囲気が役所にはあるのだ。

家族を説得するなかで

だが、若者チョンガーの場合の困難はまだ単純であり、陽気にかたをつけることができる。女房もち家族もちとなると状況は複雑だ。たとえ男が保護は権利だといって決めてきても、とりにくいのは女である。まず、福祉事務所へとりにいくのが大変な苦痛である。山中夫人の場合、住吉区に住んでいたころ、まわりは、割合、裕福そうな家が多く、そういう近所が気になって、どうしてもとりに行く気がしなかった。そんな気苦労が重なってか、二番目の娘さんが五カ月くら

いだったがお乳がパッタリ出なくなってしまった。だが、もらいにいかなければ暮らせないのだ。恐る恐る、誰か近所の人が見ていやしないかと、周囲に気を配りながら事務所に入っていった。いた！　近所の奥さんが……思わず、逃げようとして気がついた。「あの何時でも幸せそうにいい着物をきている奥さんが、やっぱり保護をもらいにきている……私だけじゃない、あんな、奥さんまで……」そう思うと、山中夫人は急に元気が出たという。

岩男夫人の場合も同じだった。夫は副委員長であり、デッチ上げ事件の被告でもある。はじめのころこそ、少しくらい弾圧された方が鍛えられていいなどと考えたが、貯金も消え、保護だけの暮らしになってしまった。あるときなど、保護費をもらいにいく片道のバス代しか残っていなかった。何かの都合で、保護費がもらえなければ家へ帰ることもできない。それなのに、やっぱり事務所に入れない。もう、誰も行く人のなくなる締切間際の時間にかけこんで、やっともらった。そして、帰りに、魚屋で魚のアラを買って帰って大根を煮るのだ。保護家庭の子どもに魚の絵を書かせたら、頭と尻尾と骨だけの魚を書いたという。そしてお頭つきのイワシをみせたら「これなあに？」ときいて、魚だとおしえても信じなかったという笑えない話もある。

そういう主婦の悩みを知ってか、山副の場合は、前もって奥さんには何にも話さず、全部手続きをすませて、いよいよもらいにいくようになってから、奥さんに話をした。奥さんは情けなくもなり、悲しくもなった。たたかいの初めに、山副を励ましてよそへ行くことをやめさせたことを後悔した。

「もう、ばたばたしてもあかん。関屋のたたかいの中で、将来のこと考えるんや！　恥ずかしいことなんかない。元気出すんや、関屋で頑張れいうたのはお前やからな」

「うちと子どもの生活費ぐらい、自分で働きますから、保護はやめて……近所の人がうるさいし、子どもの身になって……」

三重の親元で、大した生活の苦労もなく育った山副夫人にとって、保護暮らしで子どもを学校にやらなければならないことが何よりもつらかった。田舎の親から、そんな暮らしを何時までやってるのかと、会うたびにいわれるのがつらかった。

保護をとるときは、必ず田舎に調査が行く。「親兄弟として、お宅の息子さんを扶養することはできませんか？」という福祉事務所の問い合わせがいく。地方出身者はそれが一番つらかった、とみんないう。

九州出身の松園のお母さんからは、「お前、大阪に行って、一体、何をしてるのか」と心配して手紙が来た。それもそのはずだ。争議に入って生活が苦しくなると、金を送れといってきた。そして、間もなく妻と離婚したのだ。今度は、いよいよ生活保護をもらってつぶれた会社にしがみついているという。

「広い大阪で、いい腕をもっていながら、家の息子は……」と親が心配するのも無理なかった。

「もう、家の息子は勝手なことをして、縁を切ったから、勘当しましたといって下さい」と、田舎に手紙を書いて松園は悲しくなった。

「俺は、今、生まれて一番、人の役に立つ事をしているつもりなのに、遠い田舎の親たちに心配させ、分かってもらえないまま、たたかわなければならない……」

一人者の松園も家族もちと同じようにつらかった。

寿命のちぢむ思いや！

でも、やはり若いということは、貧しさのもつみじめさを薄め、あるときはほほえましい苦労話にしてしまう。第二組合にいきかけた松岡の奥さんは一番若く、また夫に柔順だ。熊本の親たちに何と　われようと、夫の道をひたすらともに歩く。貧乏のグチをこぼさず、たたかいの間、一度の夫婦ゲンカもしなかったという。「今の若者は気分屋でゼイタクで」という言葉の軽薄さをとがめたくなるほど、珍しく夫唱婦随のおしどり夫婦だ。

この二人の場合は新世帯で赤ん坊が生まれたばかりだったから、子どものミルク代と衣類に一番苦労した。親は何とかやりくりがつく。だが、子どものものは買えなくてもどこからか都合しなければならない。知人や仲間たちの応援で松岡家長男は、全部誰かのおさがりで大きくなった。夜、松岡にあじのお頭つきでもつけると、松岡夫人はラーメンか、おかずぬき、お茶づけで過ごした。役所通いは、他の人ほど気にならなかったが、質屋通いが大変だった。彼女は労働の経験はあったが、質屋通いははじめてだった。誰も見ている人もいないのだが、やっぱり、唐草模様のふろ敷包みなどにいれていくと、何となく、カッコ悪いと思って背広の箱に衣類をつめて運ん

だ。できるだけ、キレイな箱にいれて、いかにも、今、デパートから買ってきたとこやという顔で、さっそうと歩いた。こうして何度も吹田あたりの質屋に通っているうち、彼女が嫁入りの時もってきた着物も、彼の背広も全部中に入って、ついに、陽の目をみることはなかった。

年をとると、若者たちのようにはいかない。戦中戦後の数かぎりない苦労の連続、はいて捨てるほど体験した貧乏話……貧乏のつらさ、恐ろしさを知れば知るほど、せめて余生を二度と貧乏に縁のない世界で暮らしたいと思う。

寺やんのお母さんにとって〝生活保護〟という言葉は、地獄の呼び声にも似た響きをもっていた。亭主が早死にしたばっかりに、三〇から二人の男の子を育てあげるために棒げつくした彼女の一生――その時期はまた、戦災、寺やんの召集、次男の疎開、焼跡生活と、日本人の多くが悲しく、労多くして報われることの少なかった戦中・戦後の時代であった。

たくましく成長した寺やんの力にすがって、やっと老後を、静かに子どもたちの家を回ってでも暮らせるかと思いはじめた矢先の、とてつもない闘争生活だった。それでも、根っからの苦労人であるから、少々のことではネをあげるようなことはなかった。だから、生保問題が起こるまでは例によって「喜代次よ、先頭に立つんやない」と、ときどき、グチをこぼすぐらいですんでいた。寺やんが労働組合の委員長になるについては、気にいらないが子どもの頃のことを考えると、しかたがないと親ながら思っていた。「親類の子はいい服着て、いい物食べて、いいとこへ行く。何でうちだけボロなんや？　おやじがおらんだけで、なんでこんな違いがあるんや？　生

んでくれいったおぼえはないで！」
と母にゴネて、困らせたし、学校では先生に「日本人は大臣も軍人もみんな二合五勺の配給だけで暮らしてるんやろなあ？」とカミついていた。
そんなわけで、残業ストップから失業保険の暮らしまでは、この程度のがまんはと思ってすんでいた。だが生保となるとまったく問題は別だった。寺やんはソロバンはじいて、組合からいれる一万円と、お母さんの生活保護費で何とかやれるといっても、お母さんにとってはやれるやれないの問題ではなかったのだ。貧乏してるとはいえ、キッスイの浪速育ち、町内に親戚知人は多いし、民生委員は古くからの知り合いである。
「それだけは、何ぼ、お前のいうことでもあかん」と血相変えて抗議した。
だが、寺やんという人は温和なようで、いいだしたらきかん。まして総大将である。
「どうしても、嫌やというなら、弟のとこへいって、暮らしてくれ」
と、一歩もひかない。そういわれれば、住みなれた浪速の土地と長男の家から離れたくないのが親心……泣く泣く、生保暮らしをはじめたのだが、何もかも気に入らない。何よりも嫌だったのが、月一回のケースワーカーの訪問と民生委員との顔合わせ。訪ねてこられるたびに近所に見つからないように、慌てて相手を座敷に押しあげて、隠れるようにして話す。相手が帰った後、深いため息をついていった。
「ああ、あ、イノチがちぢむ思いや……」

それに福祉関係でくれる品物には、みんなソレと分かる署名が入っているのも頭痛の種。救急箱からタオルまで、「大阪府社会福祉……」といれて、それがもらう人のレッテル貼りになるという保護生活者の気持を役人は理解しない。
寺やんがそのタオルとゼニをお母さんに渡して、久しぶりに銭湯にいっといでと親孝行のつもりでいったら、「こんなタオルをもっていくなら、一生、風呂に入らん！」と、まっ赤になって怒った。ほんとに心細い毎日だったと思う。
酒屋にたまの酒を頼むのにも、必ず日曜日にした。日曜日には絶対にケースワーカーがこないということが理由だった。保護家庭では酒を飲んでもいけないと思いこんでいたのだ。「大丈夫だ！」と寺やんがいっても、「冷蔵庫に酒ビンが入ってるのをみつかったら、どうしよう、どうしよう……」と、おろおろしていた。

子どものために生保はやめよう？

〝争議は労働者の生活をよりよくするためにある。争議のために生活があるのではない〟
その頃の関扇支部数十家族の間で、何度このことが話し合われたことだろう。〝社長ふくめ、関扇労働者をしぼりあげていたのはアサノだ〟〝アサノにすべての責任をとらせ、職場復帰するために〟――労働者の間でたたかいの目標が不明確であったとはいえない。長期かつ困難なたたかいとはいえ、一年数カ月の破らんにとんだたたかいの中で労働者は鍛えられ、アサノ独占が逃

げられないだけのいくつかの証拠や成果も手につかんだ。だから、やみくものたたかいに、指導部が労働者をひきずりこんだとはいえない。みんなで話し合い、納得づくめでなければ前に進まないクセの確立は、この生保獲得闘争の時期に関扇支部労働者のものに定着していったといえる。執行部を中心とした中核はたしかに存在し、家族をふくめた話し合いをリードした。だが、中核だけではことは運ばない。生活するのは労働者一人ひとりであり、妻であり子どもだった。家族内の民主的討議による意思統一がないかぎり、一点でも家族間の隠し田やヒミツが存在するかぎり、生活保護の暮らしはつづけられない。

水間は二人の子どもの親であり、どちらかというと内気で、人の先頭に立つことのない正直で勤勉な労働者だった。何度、戦列を離れようと思ったかしれない、重い腎臓病が直ったばかりの次男、生まれつき、内気で感じやすい長男……この二人の子のためにまともな暮らしをという奥さんの願いを強く説得する確信はない、しかし寺やんたちに説得されれば仲間の友情をふり切ることもできない。毎朝、首うなだれて、しぶしぶと職場にむかう水間のつらそうな後姿が夫人の胸をしめつけていた。

「このままではあかん。なんとかしなくては……」と、思っている時に生活保護の話が持出されたのだ。

「なんぼ組合で、そういう方針たてたかて、絶対にうけへん。そうなったら、うち働きにいくから」

夫人は、今度こそ腹を決めていた。苦しい生活のこと以上に、神経質な長男が、自分一人教育扶助をうけることの意味を知ったら、ますます学校へ行くのがきらいになるだろう。そんなにまでして、たたかい続けることは、たとえ正しいことでもいやだとはっきりいった。夫婦は果てしなく話し合った。水間にも妻のいうことは分かる、夫人にもおとなしい夫が、これだけ一生懸命自分を説得しようとする熱意と仲間の連帯の気持は痛いほど分かった。

「そんなら、こうしよう。担任の先生に聞いてもらおう。話をきいてもらって、どうしても、保護もらうことが子どもに悪い影響与えるっていわれるなら、お前のいうとおりしよう……」

水間は疲れ果てて妻に最後の提案をした。仲間に悪いと思いながら、この妥協案で行動するしか妻を説得する道はなかったのだ。

二人は東小学校の担任、石川先生を訪ねた。夫人は子どもに恥ずかしい思いをさせたくないという心遣いでとって置きのウールの着物を着て行った。夫婦こもごもの話をじっと聞いていた先生は、言葉の切れ目を待っていたように話した。

「楽でない生活は、水間さん、あなた方の家庭だけじゃありませんよ。この私自身、安月給で大勢の家族で女房に着物一枚買ってやったこともないんですよ」

水間夫人は先生の視線が彼女の着物にとまっていることが分かった。

「うちの子どもにだって、ロクなもの食べさせられません。デパートにつれていくのも大変ですからね。だから、私はせめて、日曜日に子どもをつれてホルモン焼屋にいくんですよ。立食

いでホルモン焼をかじらせるんですよ。子どもはそれでも喜んでいます。どんなささやかなことでも、子どもには楽しみなんですよ。

貧乏したからって、子どもが気がねをしたり、学校へ行くのをきらいにさせるのは大人の責任です。親が貧しくても正しく生きることが何よりも大切な子どもへの贈物じゃないでしょうか……心配しないで、生活保護をとってたたかって下さい。学校でのことはご心配なく。私のできるだけのことはします、頑張って下さい、水間さん……」

夫も妻も、教師のこの思いがけない励ましの言葉に感動して、胸に言葉がつまって出てこなかった。

「どうして、私に直接、もっと早く話さなかったのですか？　おたくの組合から日教組を通じて、学校へ教育扶助の件で申し入れがあったんですよ。そんなまわりくどいことをしないで、どうして私に……」

「いえ、はい、さっそくにと思っていましたが、組合の方針で、そんな具合に……どうもすみませんでした……」二人は汗をかいて、弁解した。

「とにかく、教育扶助のことで、子どもさんに気がねさせるようなことはしません。むしろ、クラスの子ども全員に、とってほしいと思っています。教育費無償が本来、憲法、教育基本法の精神ですからね。教育扶助をとるのは貧しい家庭の権利ですよ。胸を張って堂々と受けて下さい。そして、どうか水間さん、関扇労働者のたたかいが勝つ日まで頑張って下さい。あなた

方がたたかって勝つことは、ぼくたち教育労働者がよくなることなんです」

嬉しかった……おずおずと教育扶助の相談にいったのに、関扇のたたかいまで激励された。地域や学校にまで、関扇のたたかいを支援してくれる人たちがいる……今まで、迷い、苦しんできた、夫婦の溝が先生の一言で埋められ、夫婦が手をとって進める勇気を与えて下さった、そのことに二人は感動し、足どり軽く、子どもたちの待つアパートへ急いだ。

微かな曙光―完全プール制でたたかおう！

組合が生保によるたたかう態勢の確立に苦闘していた時期は、また地労委でアサノの不当労働行為審問を開かせることができるかどうかをきめる重要な時期だった。

組合は内部姿勢の確立の努力とともに、地労委総会のたびに、全自運や争議団や大阪総評の支援をうけ、〝審問開け〟の抗議行動を組織した。そして、このたたかいの真実をできるだけ広く、深く理解してもらうために、前年失保のたたかい以来はじめていた、地域への行商オルグ作戦を班体制でひき、徹底的に展開した。

淀川では北大阪地区評を中心に五人がオルグ、五人がアルバイト、身体の丈夫でない南野が淀川の会計をひきうけて残った。津守では南大阪地区評を中心に、六人がオルグ、七人がアルバイト、広松のおっさんが留守番で風呂炊き兼食糧庁長官ということで残った。奥さんが療養のため入院した井口は子どもを守るために子守を任務にした。残りの執行部のうち、寺やんが裁判・地

労委関係、地区評・総評関係、生コン共闘議長をひきうけ、山中が行商オルグ会計の責任、田中秀やんが、生コン共闘とガリ版きり、そして全体の財政責任者をひきうけた。最後に残った種やんが、大阪と全国オルグをやり、しゃべって歩くということになった。

この体制を確立していくなかで、全国争議団の経験の総括に基づいて、オルグ主――バイト従の基本的な考え方と態勢を固めた。

この考え方の出発点は、職場を基礎に、生活保護で最低生活を維持しながら、地域産別の中に支援の網の目をひろげ、アサノおよび、地労委、裁判所を包囲するということにあった。生産の場は、奪われたから、職場でストライキを背景に実力をもってたたかうことはできない。だが、事務所に住み、車を差し押え管理することによって、立派に〝職場を基礎に〟たたかいつづけているのだ。たとえ、アサノが操業再開しても、組合員が敷地内で広い土地に車をおいて管理し、事務所で犬猫まで飼って昼となく夜となく、生活し続けているかぎりたたかいは終わらない。

この〝職場〟を拠点に、地域で同じ運命でたたかい続ける争議団の仲間の横の共闘をつくり、その共闘を大阪総評に大きく支えてもらう、その中核に関扇労働者がなっていく、そのために必要な行動を全部ひきうけ、尖兵となってたたかっていこう――このことを可能にするための中心部隊は、行商しながら組織から組織へと歩きつづけるオルグ。そして、そのオルグ活動を可能にする生活を支えるアルバイト部隊という考え方が生まれたのだ。

このアルバイトで稼いだ賃金と、行商で稼いだ金額とを合わせて、闘争資金と、生保の対象か

らはずされた組合員一人ひとりの生活資金、家族持ち一人一万円、チョンガー一人＝九〇〇〇円を保障することにした。生保獲得交渉の中で、扶養義務者である組合員に正義の闘争のため扶養能力がないから、扶養家族に対して生活保護費を支給するという条件をかちとったのだ。

つまり具体的にいうと、山中の場合では、母子三人の保護費一万七〇〇〇円ほどと、山中の生活資金一万円、合わせて二万七〇〇〇円ほどで生活するということだ。寺やんの場合には、お母さんの保護費七〇〇〇円と本人の一万円で、計一万七〇〇〇円ということだ。

このオルグ主、バイト従で、隠し田なしの各人の生活体制を「完全プール制」と名付けた。この体制を決定する根拠は二つあった。

第一は、もちろん、オルグ主という戦略体制そのものであったが、その際、日本ロールの場合にアルバイトで生活を支える体制をとったため、個人個人の収入にアンバランスができ、団結が乱れたという経験を生かしたことだった。その他の争議団でも、バイトで稼げるほど、ごく一部を闘争資金にいれれば、後は自由だという考えが拡がって、結局、分散し、敗けてしまった例が少なくなかった。しかも、関扇の場合、産業別の力という点で全自運が総力あげてたたかってくれても、日本ロールが全金の力に依拠してたたかえたようにはいかないのだ。どうしても、南大阪、北大阪地域労働者の生きた連帯と支援を自らの手でつくりだす以外に道はなかったのだ。

第二に、前述したように、こうした最低生活でたたかいつづけられる生活姿勢を、残業ストップ以来の敵の攻撃の中で、一年数ヵ月かけて訓練し、鍛えあげていたということだった。

分裂―残業ストップ攻勢の中で、「貯金が減るから」という理由で脱落した仲間がいた。また分裂直後には、組合は一五〇万円の貯えをもち、月五〇〇〇円貸しつけて三カ月やれる余裕をもっていた。にもかかわらずゼニがあっても落ちるものは落ちた。たたかいはゼニがあればできるものではない。たたかいの中で、隠し田をもち、生活水準を少しでも拡げることが敗北につながるのだ。

こうして、三〇人の男とその家族たちが、文字通り、失うものは何ものもない労働者の生活を基礎に、団結と民主主義を瞳のように大切にする長期のたたかいに突入していった。

3　地域こそたたかいのとりで

涙の淀川徹夜作戦

関扇労働者の地域活動へのとりくみは徹底していた。闘争に入る前も地域や生コン共闘の中で一定の役割を果たしていた。だが、地労委闘争とクビ切り反対、逮捕者奪還闘争の中で、本格的に地域産業別の仲間の支援でたたかうことの重要性を感じた。そして、一年前の関扇支部支援総決起集会を成功させる中で、大阪総評を支える南大阪地域労働者の具体的な協力参加をかちとることができたのが、地域のたたかいは関扇のたたかいそのものであるという考えが、組合全体の思想になっていくきっかけとなった。

関扇の地域闘争の姿勢は、大阪総評幹部に理解してもらっての上からの支援協力と、一人ひと

りの末端労働者に訴えかける下からのたたかいを必ず結合させて、決して手をぬいたりすることのないせい一杯のたたかいだった。

争議団というと、とかく訴える方も首を切られて困っているから救けてくれということだけになり、訴えられる方も、気の毒だからいくらか恵んであげるという形になる場合が多い。つまり争議団の側にもそのたたかいが一般の労働者のたたかいとどう結びついているかを訴える点が弱くなり、一人ひとりの労働者が自分の問題としては考えていないことが多いのである。

関扇労働者が行商オルグに入る場合は、まず南大阪なら南大阪地区評の支援協力要請書をもらって各労働組合をまわり、何月何日に行商オルグにきたいからと挨拶してまわる。同時に一般組合員むけのお願いのビラをまく。そして行動日の前日あたりに、もう一度いよいよ明日くるからよろしくというビラまきをする。それで、当日、その企業の出勤時間や職場の状況に合わせて、もっとも効果的で労働者に接触しやすい形で品物をもちこみ訴える。

たとえばオルグ行商作戦でもっとも機動力を発揮して成果をあげた、淀川の柴田、松岡組の場合、各区役所などで時間中の販売活動が許されるときには、それぞれキャンデーや餅菓子の入った箱を胸にささげてもち、「関扇争議行商班です。闘争支援のための、菓子販売にご協力下さい」と、席から席へもって歩く。

何しろ、巨大な図体の男たちが、か弱き女たちの前に立って、

「お菓子一ついかがですか？」

と、かわいい餅菓子をつまみあげてみせるものだから、浪速女性として買わなければ、女がすたるという心境にさせるのか、売れ行きは非常によかった。口の悪い仲間にいわせると、ゴリラに脅かされた処女の心境で無理に買わされたのではないかというウワサもある。

もちろん、周到な準備をしても、ダメな時はダメ。紙谷と種やんのような口八丁手八丁組でも、一日中、地下鉄労働者に売り歩いて、コブ巻がたった一個ということもあった。

争議団同士の交流もあり、南大阪地区評の中核的組合だった全国金属とか、全国一般、全自交などの組合だけでなく、ふだんあまりつきあいのないような組合の労働者とどう接触するかも重要な課題だった。

津守の相原こと相ちゃんが熱心に開拓した大阪交通の組合や全電通関係の組織など、足繁く通う中で、次第に関扇争議への理解と支援を深めてもらった。その中で、鉄鋼労連傘下の淀川製鋼の行商成功も、処女地開拓、労働者連帯の生きた典型の一つをつくった。

淀鋼の労働組合の了解をえて、職場には入れないが、門の近くに机を並べて販売するのはかまわないことになった。いつものように事前にビラをまいて協力支援を訴えた上で、当日、淀川大橋から左へダラダラと下りた通用門の近くに、店をひろげた。主要商品は場所が場所だけに、五〇円の袋菓子だった。

やっぱり不安だった。全く様子の分からない労働者の人たちが、一体どんな風に関扇のたたかいを理解してくれるか……自分たちと全く関係のない、中小系列組合のことなんか知らないという人が多いのではないだろうか……寒風に吹きさらされながら、柴田と松岡はつっ立って労働者の通勤を待っていた。ここは三交替制である。だからまず、夕方の退社と夜勤の出勤時間をねらった。帰りの人には子どもたちへのお土産に、出勤の人には疲れ休めの一口にアメをどうぞ……二人は祈るような気持で労働者を待った。

出てきた！　最初の一人が見むきもしないで通り過ぎていった。次も……やっぱりダメか……二人は顔を見合わせた。

「二つ、頼むで！」中年の労働者が一〇〇円玉をつきだした。

「ありがとうさん。もうすぐ、地労委にアサノをひっぱりだすとこへきました。ご支援ありがとうございます……」

最初の一人は何よりも嬉しい。二人で最敬礼した。

「しっかり、頑張ってや。ご苦労さん！」

つぎの人は、威勢のいい声で、励まして一〇〇円おいていった。つぎつぎと、考えている暇もないほど売れていった。何もいわずに、黙って金を置き、袋をうけとっていく人もいる。嬉しかった……。一人ひとりの労働者がその人びとの好意をこめて袋を受けとってくれる。初め考えていた不安はとりこし苦労であり、狭い経験主義だったことを知らされた。

「アサノに敗けんようにしっかりなあ」

「ありがとうございます」

金を押し頂いて、思わず、グーっと腹の底から感激の涙がこみあげてきた。「労働者はいっしょだ、大企業の多い鉄鋼の労働者でさえ、セメント独占とたたかっている俺たち運輸労働者の悩みを分かってくれる……中には、俺たちが鼻水たらしてつっ立ってるのに同情して、金をくれる人だっているだろう……だけど、いいんだ、俺たちのこの真剣な面から、悪いのは資本家だってことを少しでも感じてくれたら……」またたく間に、夕方だけで、三〇〇個が売れた。

「よーし、今夜は徹夜だ！　三交替全部の労働者が働いている間、俺たちも頑張るぞ！」二人は、深夜の淀川の川風に身体をはって、頑張り通した。

やがて、白々と東の空が明けてきた。さあ、徹夜の仲間はご苦労さん、新たな気持で職場にむかう仲間たちはお早うさん……さあ、もう店仕舞いだ、関扇支援のキャンデーを買ってくれ……二人は、寒さと疲れをふっとばして、声をはりあげた。

やがて、淀鋼の労働者たちが、その日の労働を開始した頃――淀川べりを、嬉しそうに、売りあげ袋をぶらさげて、職場へ帰っていく二人のトクイマンメンの姿があった。

袋の中には三万五〇〇〇円の現金があった。しめて、七〇〇個の五〇円の袋が一晩で売れたのだ。二人はあらためて塀のむこうで、機械にむかっているだろう、淀鋼の仲間たちに感謝と連帯の気持をこめて最敬礼をしていた。

チョンガーも楽じゃない――メシくわせるとこへ行こう

柴田、松岡組にかぎらず、オルグ行商作戦の中では、チョンガー組や、第二組合からの復帰者もふくめて、新しい活動家たちがその新鮮な行動力を発揮した点は特筆すべきである。淀川での西丸、毛利組がそうだし、津守での松園、宮ノ腰組や相原、水間、紙谷組などの活躍がそれである。

この人たちがそれぞれの行動力を発揮した原動力は何だったろうか。基本的には生保問題をきっかけに確立されてきた、徹底的な組合民主主義の徹底による討議――たった一人の異論でも本人が納得するまで話し合う、三〇人のたたかう民主主義がエネルギー源であったといえよう。だが、もっと別な条件もあったことが考えられる。

人間、食い気とイロ気がなくなったら終わりだというが、まさに彼ら若者たちがお終わりでない証拠に、その旺盛な二つの欲望の存在が彼らの戦闘的地域活動のエネルギーを生んだとみることができる。

彼らは常に腹を空かしていた。世帯もちよりひどかった。食欲旺盛な若さに加えて、彼らの生活費はチョンガーの場合九〇〇〇円ポッキリしかなかったのだ。その額の根拠は　屋代は二人いっしょに借りて別、食事が一日二〇〇円で三〇日分で六〇〇〇円、残りの生活費三〇〇〇円という計算である。この額の決定については、最初は淀川グループは猛烈に反対し、代表して毛利執行委員は最後まで一万五〇〇〇円を主張した。しかし、現在その額を生みだす条件がないのと、将来それが可能になる方向に努力することで津守執行部の意見でまとめられた。

一人者六〇〇〇円の食生活は、家族もちのそれよりはるかに厳しかったろう。後にも先にもこれだけなのだから、光熱費とか雑費とか書籍新聞代などがあれば、すべて、食費にくいこむことになるのである。そこで毛利の口グセだった、〝朝ヌキ、昼ヌキ、晩に一寸〟という食生活が生まれた。当時のチョンガー族の主なる食料は、インスタント・ラーメン。それとも、水につかった格安品を買ってくるのだ。脂肪、タン白質をとるのにも、家族もちなら、カアちゃんのやりくりで、たまには、アジのお頭つきがつくが、彼らはそれも水準オーバーである。彼らが常用したのはにわとりのガラ、肉のすじ、魚のアラといったところ。それも毎度のことなので、市場のおっさんに「あ、お兄さん、今日のガラはいいとこだよ。肉が一杯ついとるで」と、大声で怒鳴られて、さすがに赤面した。

それでもなれたら平気になり、毛利など「おばさん、太根半分、あ、ちゃう、ちゃう、その、小さいやっちゃ！　一五円は高いで！　一〇円にまけとき！」と、ベテランのおばさん顔負けの値切りも上手になった。だが、やっぱりどこかぬける。柴田はヌカミソ女房なみに、漬物一樽つけて、これで、二月くらいやれると思ったら、塩をケチケチしたせいか、全部腐って食えなくなってしまった。

生活は若者を鍛える。たたかいの中で生きぬかねばならない厳しさが、敏捷で行動力に勝り、考えこむより、メシと酒の匂いのする場所をかぎつける動物的嗅覚を育てあげる。

担当地域をオルグして歩いていると、あそこの組合事務所に行けばメシを食わせてくれるという穴場がわかってくる。オルグの順序が、ちょうど、一二時頃にその穴場になるようにして、かけこむ。

「大変や、大変や！　今日もまた大変やったで！」というと、「何や？　何があったんや？　また警察か？」と、労働者が集まってくる。

「そうや、また、機動隊がトラック一杯できたんや！　奴ら、横丁にトラック隠して、こっちの様子みとるんや！　組合が業務妨害やったら、でようと待ち構えとる、そして、アサノの労務はうろつきよる。ところ変わって、組合事務所。わが方は、わずか五人の手勢……もし、暴力団にでも襲われたら、哀れ一コロで落城の運命……」

必死になって、しゃべっていると、だんだん、講釈師みたいになってくる。

「ふん、ふん……それで仲間はどないした？」と、みんな身体をのりだし椅子をすすめ、「まあ、メシでも食うてって！　おーいメシ一丁、関扇の人にあげてや！」ということになる。

〝ああ、これで、一食稼げた……〟という喜びとともに、空腹も忘れてますますたたかいの報告に熱が入る。

メシだけはでない、酒がメシより好きな森はゼニのないのにアルバイト先の労働者をくどいてよくアルコールにありついた。

争議中でも酒に不自由しなかったと威張るのは、やはり種やん。たかりの種やんといわれると彼は怒る。彼が人に飲ませてもらうときは、必ず弁説で相手をその気にして納得づくでいっしょ

に飲むのだから、たかりではないというわけだ。

こうして若者たちは窮すれば通ずるで、さまざまな能力と創意性を生かして、それぞれの担当地域を、一人ひとりの生活とたたかいの根拠地にかえていった。忘れてならないことは、一人ひとりの労働者が自分の個性を生かして、労働者と人間的に結びついていっただけでなく、その地域の労働運動の足となり、メッセンジャーになって、黙々と働いていた点である。

港地域担当の松園は、地協事務局になっている全金田中機械組合事務所を足場にして、地協からの連絡事項や文書などを各組合に運び、伝える仕事をオルグの仕事と並行してやった。また、その他の区や、南大阪地区評集会の立看板づくりなども、車の機動力を発揮して、下働きをひきうけた。彼らとしては、オルグと一石二鳥であり、地域の共闘を強めることが関扇闘争を勝利させることという考え方を、常に頭に叩きこんでいたのだが、なかなか普通ならできない縁の下の力持ち的仕事だった。

だが、困難ではあるが、ふだんの職場では出会えない、いいこともある。大阪中の働きかつたたかう娘さんと、四六時中、見合いして歩けるのである。男たるものショボショボしているわけにはいかない。一食、二食ぬきでも、胸をはって、カッコよく演説をぶたなくてはならない。若者たちが疲れきって、品物も売れず、ショボンとしている時、同じ争議団の娘さんから、励まされ、暖かい言葉をかけられて、たたかうチボーをとり戻したことが何度あるだろう。やがて、この交流の中から、いくつかの、ほのかなたたかう愛が育っていく。

4　最初の家族会―つらいことをぶちまけよう！

男だけにたよらず自分たちの生活をもとう

チョンガー族が飢えと青春の悩みを胸に、夜となく昼となく、地域から地域を歩き回っている頃、家族もちは、いかにして各家族内の悩みや、矛盾を前むきに解決するかで苦しんでいた。

亭主たちがすべてをかけてたたかっている敵の姿と、火花を散らす戦場の有様を知ってもらうために地労委審問廷へも家族をつれていった。ちょうどその頃、地労委では経営者側の圧力にも答えた形で、アサノを証人としてでてもらうが、審問廷は非公開にするという方向をうちだした頃だった。組合はただちに反撃し総評をはじめとして地域二百数十組合の審問非公開抗議署名をわずか二日で集めて、地労委に波状攻撃をかけた。家族たちも審問廷でのあまりにも激しいやりとりに、あらためて労働者のたたかいの厳しさを知らされた。妻たちは家庭で子どもも叱れない亭主が、怒りをこめて資本と権力者にかみついて行く姿に、今まで自分の知らなかった夫の一面を教えられた。寺やんのお母さんが、こわごわと水間夫人にささやいた。

「大丈夫やろか……どつきあいにならへんやろか……」

また、その頃初めての家族会が開かれた。ふだんバラバラでお互いに胸にためているつらいこと、聞いてもらいたいことを話し合おうということだった。みんな、会場につくまでは、何とな

く気が重かった。山中夫人は、「着ていく着物もないから恥ずかしい」といって、夫にゴネた。
「うちだけやない。みんな、親の着物なんかボロや。みんな同じや」と、山中は妻を説得した。種やんのおかあちゃんも、初めての参加だった。
「うちでは、子どものことが、いちばん困ります。幼稚園には保護家庭はいかれんいうし、保育所はいっぱいで、いれてくれません」
山中夫人は、みんな同じふだん着の集まりだったのに安心して、話しはじめた。やはり、子どもに肩身の狭い思いをさせることが、つらい、恥ずかしいという話がつぎつぎとでた。
「うちは私も身体が弱いし、子どもが病気になった時にも、いちいち、役所で医療券をもらわんと医者にもかかれんのがいちばんいやです」種やん夫人がいった。
「ほんまに、あのケース・ワーカーというのが、いちいちこんでよろしいのになあ……人の気も知らんで……」寺やんのお母さんがいった。
「うちの子どもは〝ぼくだけなんで、だすお金がすくないんや〟って聞かれるんで困ります」
誰かが後の方でいうと、寺やんのお母さんが答えた。
「山副さんの奥さんもそういってはった……」
「水間さんとこの先生みたいに、教科書くれはるときにも、水間君は勉強できたから、ほうびにあげるんやって、いってくれはると、ほんまによろしいですなあ……」
「あの……うちの子は、わたしが、いくら内緒にしとっても、近所へいって大きな声で、ぼく

は、服もカバンもみんなタダやでえって、話すからすぐバレてしまいますねん」
「そうですなあ、うちのアパートの前も保護家庭でしたんやが、両方とも隠してましたんねん。そしたら、入学式の日にドアあけたら、ちょうどむこうの子どもさんも出て来て、二人ともカバン、帽子、洋服から、靴まで同じでしたんねん……恥ずかしゅうて、恥ずかしゅうて……」
いつはてるともなく、子どものこと、亭主のこと、食事のこと、役所のことと、話がはずんだ。地域や新婦人の人たちが集めてくれた子どもたちの古着が非常に役に立っているということも……山中夫人が嘆息まじりにいった。
「そやけど、うちらの買うものは、一番安物ですから、お古を回すこともできません。一べん着たら終りです……」
初めは、遠慮しながら話していた人たちも、終わりには、話がとまらないほど、つぎつぎに生活の真実を語った。自分だけの悩みだと思っていたことが、みんなのものであることが分かって安心した。結論として、男だけに頼らないで、女同士も交流し励まし合おうということになった。
この日の集まりが家族会の出発点となり、これ以後、潮干狩や、夏の水泳と、季節季節に、たたかいと貧乏暮らしの疲れを流し、明日のたたかいのエネルギーをつくる集まりをつづけるようになった。

日本一の組合ゴクドー夫婦になろう

その夜、二人の子どもを寝せつけてから、種やんのおかあちゃんはいった。
「お父ちゃん……うちも、今まで、自分んとこのことばっかり考えとったんやけど、保護もらってる人はぎょうさんいる。関扇でもそうやけど、この富田林でも、まだまだ、貧乏しても、保護ももらえんで困ってる人がいる」
「そら、そうや……おかあちゃんもいいことというようになったでえ……」
種やんがひやかすようにいった。
「あのなあ……うちに生活と健康を守る会の世話役やれっていわれるんや……どないしようか……うちのガラやないけど……よう考えたら、おとうちゃんの足ばしっかりひっぱるのが、女房の勤めでもないなあ、と思って、うちでできることなら、やろうかと……」
種やんの眼がすわった。
「もう一ぺん、いうてみい！　かあちゃん！　……ほんまか……そら、ええことや！　……おかあちゃんがその気になったら、わいはこわいものこの世になしや！　子どものためにもいいでえ！　そら、めでたいこっちゃ！　乾杯や！　お祝いや！」
種やんはおかあちゃんの主婦兼世話役誕生を口実に、とっておきの酒をもちだしてきた。
「そやけどなあ、ちょっと、心配になるのは、ねえさんは生活保護のことも賛成やからいいけど、あんたの親戚で、また、どない悪口いわれるかと思うと、ちょっとなあ……何せ、長い間、あんたのゴクドーのことといわれて、今度は、嫁もいっしょにやりだしたゆうことになったら、

どないなるやろか……」
「アホ！　せっかく、ええことといいよったと思うたら、また、そないこと。だいたいわいはもうゴクドーは卒業したんやで！」
「そら、分かってます。だいぶ、苦労させられたけど、今になったら、あんたのゴクドーするには、するだけの理クツが……」
「そやで、そやで！　ええこというなあ。世の中が悪いんや！　敵はアサノ独占資本とアメリカ帝国主義や！」
「また、すぐ調子にのるさかい……」
「なあ、おかあちゃん、いっしょにやろ！　俺は関扇で日本中の労働者のためにやる、おかあちゃんは、富田林の貧乏人のためや、夫婦そろってやろ！　親戚がゴクドーいおうが、何いおうが、かまへん！　まあ、敵からみたら、わいらみたいなゴクドーはないからなあ！　どうせやるなら、敵に、日本一のゴクドーといわれる夫婦にならんとあかん！　夫婦そろって、胸はって生きるのが、ほんまに、この子らのためにもなるんや……」
子どもたちの寝相を直してやりながら、種やんは一人ではしゃいでいた。
種やんの家だけではない。その頃、山副の家でも、水間、山中、岩男、西丸たちの家でも、おかあちゃんが外へ眼をむけはじめていた。生活保護問題をきっかけに、亭主の給料袋だけを待っていたおかあちゃんたちが、地域の人たちに励まされ、自分の足で外にむかって活動を開始した。

たたかいはすべてのものを変える。おやじを変え、若者を変え、とうとう、家族をも変えはじめた。

5　淀川乱闘事件——オルグが楽かバイトが楽か

生活保護でアサノとたたかいつづけることについて、残った三〇人の労働者の間に、家族を含めて一致点を見出すことができた。たしかにその通りである。だが生活の問題は、一度話し合って一致すれば、後は順調にいくという筋合いのものではない。生活の苦しさが続くかぎり、くり返し、現状への不安と不満が押し寄せてくる。まわりの人がみんな幸せそうに暮らして、自分たちだけがこの世の不幸を背負いこんでいるように感じる。家族がそう思うだけではない。女房にせめられると、今度は仲間たちにモンクをいいたくなる。

「俺がこんなひどい職場で、みんなのためにアルバイト仕事で苦労してるのに、オルグの連中はたたかいの第一線とかなんとかカッコいいことといって適当にサボってるやないか！」

アルバイト仕事ということで、しめあげられる運送会社の職場につい文句がいいたくなる。

淀川ではその頃、週一回、必ず集まって、全員で経験交流し話し合っていた。

集まって顔を合わせれば、必ずオルグがしんどいか、バイトがしんどいかの議論になった。

「そら、いっぺん、うちのトラックにのってみたら、わかるんや！　組織のないバイト仕事の

つらさは、お前には分からんで！」セコ松や森がいった。

「バカ、そら、オルグがしんどいに決まっとるわい！　なんぼ、嫌な顔されても、頭下げてしゃべらんとならんのやで！　組合の幹部に話すのが一番嫌や！」

「何いうてるねん、オルグで成績あげたら、威張れるやろう？　バイトはどうせ稼がされるだけや……」

「アホ！　わいらは何のためにたたかうんや！　大勢の労働者に知らせて、いっしょにたたかうためやないか！」

「そなこと、分かっとるわい！　お前いっぺんやってみい！　バイトいっぺんやってみい！」

「おう、やったるで、なんぼでも！」

話はいつでも行きつくとこまで行き、果てしない議論がむし返された。議論で終わればまだいい。誤解が疑心暗鬼を生み、とんでもないことになることがある。

職場が恋しいし、気になるから一日に一度は様子をみにアルバイト中でも顔をだしてみる。その日は、午後一度、職場に寄ってみた。

「あれ！　あいつ、もう……」

なんと、オルグのMの単車がもう、家の方に頭をむけておいてあるではないか。しかも本人が中に、横になってグーグーいびきをかいている。何というこっちゃ、人が一生懸命働いている時に、オルグの奴ら、昼日中にもう骨休みしやがって！

「こら！　おまえは何や！」
とうとう頭にきて、寝ている仲間のムナグラをとってしめあげた。
「馬鹿！　今頃行ってもオルグは相手がおらんさかい、休んどるんや！　そのかわり、お前らが仕事終わる頃にわいらは忙しくなるんや！」
「うまいこと、いいよって！」
「何を！」
この日はとうとう議論だけではおさまらなかった。オルグとバイトがそれぞれのグループにわかれてとっくみ合い、にらみあった。こうなると、淀川の職場では一人ひとりが自分の意見を主張して、収拾がつかなくなる。
副委員長の岩男も若く、気が短い。大沢は何もかも自分の判断でやってしまうくせがある。藤原も理クツに強いが、仲間のまとめはもう一つだ。西丸はしゃべりだしたらとまらない。毛利に松岡はグングンのしてきて、先輩のいうことをなかなかきかない。セコ松はでかい声でドナルし、柴田は淀川きっての幹部批判で先輩をやっつける急先鋒である。要するに、もう、淀川内の話し合いでは妥協点も一致点も見出せなくなってしまったのだ。
寺やんが呼ばれた。
「何や？　何が一体、ケンカの原因や？」
「そやなあ……原因は何やったかなあ……」

頭にカッカと血がのぼってしまっていて、誰も一体、何が喧嘩の原因であったのかも思いだせないほどなのだ。それから、たいてい、寺やんが、一人ひとりのオルグやバイトの様子をきき、その上でもう一度、オルグとバイトの任務について話し合い、原則を確認し合う。話し合っている中で、だんだん落着いてくる。そしてごくつまらないことがきっかけであったことに気づきお互いの誤解を認め合う。
「そら、批判はお互い、必要やで！　何やかんやいいあっても、三〇人一人ひとりが関扇の組織を支えてるんや！　一人ひとりが団結のこと考えるから、自分のことも、人のことも気になる。だから、批判し合うことはええ。しかしやなあ、誰かが批判されとるから、その人間だけが間違っとると思ったら、大間違いやで！　この前は大沢が仕事をマイペースでやるいってたことを、柴田たちが批判した。しかしなあ、大事なことはやなあ、その時、たまたま、大沢がまな板にのっただけやいうことやで。それは、みんなの問題なんや！　今度は、セコ松に、岩ちゃんや。つきつめたら、みんな、同じ問題をかかえてるんや！　それをやっつけるだけなら、批判やない、非難や。大事なことは、たとえ、その時、その人間が間違ったことやっても、それを自分が気がついて、直す気になるようにまわりでいうことやろ！　相手をやっつけるだけのやり方は関扇ではやらんのやで！」
寺やんは、じゅんじゅんと話した。半日間、もみにもんだ対決も、やっとケリがつき、「よしゃ！　また、明日からやろうで！」ということで終わる。

爆発的な行動力も突進力も、若い淀川の組合員の中にある。だから、決まったことをやりとげるエネルギーはむしろ津守よりも強い。だが、人間関係を大切にし理論的に分析し、指導していく能力では、淀川の若者たちは津守の指導部にシャッポを脱ぐ。

組合内の民主主義も、生活保護のたたかいも同じような点がある。常にくり返し、むし返し、討議し、たえずたしかめ合っていくことの中に、新たな明日のエネルギーが約束されるのである。

6　ついにアサノをひっぱりだした

新たなたたかいの出発

四一年初頭の生活保護闘争への突入から、夏の地労委公開審問要求のたたかいをへて、ついに逃げまわるアサノの代表をつぎつぎに審問廷にひきずりだすときがやってきた。

その日は一一月一四日――最初の証人は、アサノ本社取締役総務部長藤田慶治。

申立人側席に並ぶのは、寺やんと小林弁護士。そして全組合員が息をのんで、藤田の証言の一言一言に耳を傾けている。

実に長かった。地労委にアサノだけを相手どって提訴してからでさえ、すでに、一年を経過してしまったのだ。たたかいに入ってから、もう二年を過ぎていた。敵はこの一年間逃げまわり、関西経営者団体のあらゆるルートを通じて大阪府労働部、地労委に圧力をかけ、不当労働行為責

任から逃れようとした。

解決金一〇〇〇万円で不当労働行為の当事者責任をとるのではなく、下請会社の責任をかわってとる立場で解決しようという妥協策も提案してきた。組合側がのまないと分かると、債権者会議や家屋明渡し訴訟を早めて、関扇支部をアサノ敷地内から追い出す作戦をとり、一方では失業保険ぎれで労働者の団結が自然崩壊する日を待ちかまえていた。だが、どちらの攻撃に対しても、組合は受けてたち、反撃する道をもさがし、みつけだしてきた。経営者の圧力でおよび腰になった地労委公益委員に地域二百数十組合の労働者の声をつきつけて、審問公開の原則を守らせ、ついに関扇ぶっつぶし犯罪の主謀者の一人をひきずりだすところまできたのだ。

「三九年九月二六日ごろ、アサノは関扇経営者を呼んで合理化の実施状況について報告を求めたね？」寺やんが藤田に鋭く迫った。

「……そういうことはない」

藤田は、アサノから関扇の経営指導や労務指導をやらせたという証拠事実についてきかれると知らぬ存ぜぬの態度にでた。傍聴席から仲間の怒りの声がとぶ。

「正直にいえ！」

「アサノがやらせたんや！」

寺やんは、組合の手に入った、例の合理化実施にあたってのアサノの指示や関扇の借金願いの

文書を示して、あくまでアサノの意思を追及した。
「関扇から労務対策全般について、報告をうけることはあったのだろう?」
「……関扇の者がこちらにくるときには聞くことにしてます……」
動かぬ証拠をつきつけられての証言だから苦しい答弁をしなければならない。
「何度ぐらい、報告にくるのか?」
「……当時、植野支配人が月に二度ほど……吉政も同じくらい……上田社長は月に一回くらいだった」
「四〇年の初めに、関扇からクビキリに要する費用の融資申し入れを受けたか?」
「……受けた……上田社長と吉政が文書を持参して、融資をうけたいといってきた……私と中川社長が会って話した……」
藤田は必死に、アサノの関扇支配の言質をとられまいとあがきながら、つぎつぎにつきつけられる、事実の重みをどうすることもできない状況だった。
「六月一日、地労委命令が出た以後、あなたは再三、上田社長以下関扇経営陣にあったね?」
「……いや……六月二日以降だ……むこうがやってきたからだ……」
「ごまかしては困る。一回だけじゃないだろう。場所も、日本セメントの応接室だね」
「……はい……」
「上田社長をどう思うか?」

「……真面目な人だと思っていた……」
「その真面目な社長が、なぜ自殺をしなければならなかったのか?」
寺やんは身をのりだすようにして、藤田をにらみつけている。
「……さあ……分からん……」
「遺書には〝アサノにいわれて逡巡したのが残念云々〟とあるが、その点は?」
「……そんな遺書は……みたことがない……」
この不誠実な言葉に、労働者の怒りは頂点に達した。
「嘘や！　殺したのはアサノや！」
セコ松の大声が審問廷にひびき渡った。
この日は続いて、労働者弾圧についての、アサノと警察の周到な準備と緊密な関係について聞いていった。藤田がどんなに巧みにいい逃れようとしても、寺やんと小林弁護士の鋭い質問が後から後から続いた。一年以上のクビと生活をかけてたたかいぬいてきた労働者の怒りと真実を明らかにしようとする執念がこめられていた。だが、敵はあくまで逃げ切ろうとする。この日を出発点として三年近い、新たな審問のたたかいが開始されたのだ。

一点の灯をみつめるなかで

「関扇つぶれてしもうて……なんぼ、アサノ独占に責任とらせるいうても、いつまでかかるか

分からんケンカに、労働者ひきずっていくのはかわいそうや……関扇は寺やんたち指導部が、自分たちの考えで、ひっぱってるんやろ……」

その当時、こういう意見が一部にあった。たしかに、寺やん、秀やん、種やん、山中、岩男たち指導部は関扇支部三〇人の労働者の中核としてたたかってきた。核や指導部のない組織はないし戦闘司令部のないたたかいはない。たしかにその通りである。だが、それは問題の一面しかみていない。三〇人の人間があらゆる思想信条をこえてたたかいつづけられたものはそんなところにない。

三〇人の人たちは、決して強い信念や思想性や行動力の持主だけの集団ではない。人としゃべるのが何よりきらいという人、創価学会員ではたたかえないと思いながら、御本尊を持ち続けている人、軍歌や号令の好きだという人、失業保険金を一日でつかい果たすほど、ギャンブルの好きな人、おかあちゃんにはまったく頭の上がらない人、バイトを休む時は前の晩、かならず二升酒のんでる人などなど、ほとんどの人が平均的庶民の弱点と人の良さをもち合わせた人間の集団なのだ。指導部の中でさえ、寺やんと種やんを比べてみたら、こんなに両極端の長所短所をもち合わせた二人はないだろう。寺やんや秀やんは、「しんどい！」というネをあげない数少ない二人だということだ。これは、やはり〝強い〟といえるだろう。指導者のもつみんなのための〝自己犠牲のド根性〟と呼べるだろう。だがそれも〝三〇人の中で誰か一人は聞き役にまわらんとあかん〟というだけのことだと寺やんはいう。組織の中の任務分担というわけだ。片や、種やんと

なると、これはもう、まさにいいたいことをいい、つらいときはダダをこね、逃げだそうとし、それでいて人を笑わせ、警察を前にカッコいい演説もぶつ。一度は、ギャンブル・大酒と心中しようとした男――これぞまさに、関扇三〇人の、ケンカに強いが、義理人情に弱い、オモろい労働者集団のシンボル的人物といえるだろう。

こうした指導部・一般組合員をとわない、三〇人それぞれの強烈な個性の集まりこそ、関扇争議の特徴といえる。そして〝団結の中身〟としてぜひいっておかなければならないことは、すべて分裂、クビキリ、逮捕、社長自殺、失業保険から生活保護へ、アサノ独占との対決と、そのときどきの情勢の中で、つぎのたたかいの目標をさだめ、行動を決定していったのは三〇人全員一致の意見であるということだ。誰かが、どこかで、上の方で方針を決めて、みんながついていったという筋合いのことではないのだ。生活保護でたたかいつづけるかどうかは、賃上げ三〇〇〇円でやめるか二五〇〇円でやめるかの意思表示とは比較にならない責任が一人ひとりの生活にかかってくるのだ。三〇人の労働者の全員一致の意思と家族の一身同体の協力なくしてこんなたたかいはやれない。一人ひとりの個性と創意性の発揮の上に築かれた組合民主主義の徹底的な追求の中にこそ、関扇のたたかいを持続させ、生保闘争以後、脱落者を生まなかった第一の原因があるのではなかろうか。

四一年暮から四二年初頭にかけて、アサノの地労委での証言態度をみるなかで、三〇人は今後のたたかいの目標をどこにおくかを徹底的に討議した。その結果つぎの方針を決めた。

① われわれのたたかいの目標は、関扇に関係がないといいはってきていたアサノ独占に、直接要求をつきつけてみずからの団結の力でこれを勝ちとることである。その要求の中味は「関扇労働者の身分を保証せよ」「未払賃金を支払え」の二項目であった。そのために、まず彼らを交渉のテーブルにつかせなければならない。その意味で地労委審問の場に彼らをひきだせたことは非常に有利な条件をかちとったことになる。

② 「たたかいの主要な戦場は法廷の外にある」という立場を堅持し、労働者の力で権力機関を包囲し、われわれに有利な状況をつくりだすように努力する。独占資本の冷酷な労働者殺の矛盾をひきだし、全体として、アサノ独占の不当労働行為責任を明らかにする方針でいく。しの労務政策を全労働者、市民の前にバクロし、告発することに重点をおく。

7 大阪争議団の要求をかかげて

たたかいの方針をその都度、全員でガクガクと討議し、たしかめてすすむ。そのことをたえず注意し、実行していても、やはり〝この先どうなるのか？ 俺たちはこんなことしていていいのか〟という不安がこうした処女地開拓のたたかいにはつきものなのである。

そうなる理由の一つは、やはり争議団はストライキができないし、生産の場にいないという決定的な条件にある。地労委は敵を追いつめる一つの場ではあっても、敵に決定的な打撃を与える

手段ではない。では、それにかわる手段は何か？ それは、あくまで、職場を基礎にして、産業別全自運労働者の力と大阪地域全労働者の力に依拠して、敵を包囲する道である。何度も、何度もこの原則は確認され、関扇労働者の眼はしだいに、企業を離れ、外の仲間たちとの連帯に向けられていった。産業別では阪神急行・石川定期、静岡運輸への攻撃を含め、全自運各支部の組織の壊滅をねらう独占グループに対して産業別統一ストライキを準備できるところまで成長した。

また四一年暮は、その前年の西成区役所に対する越年資金をよこせの関扇だけのたたかいの経験に基づいて、全大阪争議団共闘による大阪府庁・大阪市への越年資金獲得闘争をよびかけた。

〝高度経済成長政策のひずみを経営者にかわって、一身にひきうけ、苦闘している争議団の労働者に対して、大阪府政の責任者として、ささやかな越年資金を出してほしい〟

この要求はたちまち、争議団全労働者の要求となり、全日自労の仲間たちの声援もうけ、大阪総評のバックアップで、府庁玄関・廊下を争議団労働者で埋めつくした。

「何やて？ 国政と資本家の問題やから、府庁は知らんて？」

「何いうてんね？ 地域住民の立場に立つのが大阪府政やろ？ 大阪資本家の責任で職場を奪われようとしている労働者の面倒みるのはあんたらの責任やろ？」

たたかう争議団労働者の声が府庁廊下に響き渡った。関扇組合員は、全員、はりきって交渉団全員の世話役から、使い走りもひきうけた。

だが、知事は恐れをなしたのか、どこかへ雲隠れして、出てこない。むこうがその気ならこっ

ちもというわけで、長期戦体制をとった。みんな、アノラックや登山用具を着こんだり、どこでもごろ寝OKのいでたちで、一五〇名の争議団が廊下に坐りこんだ。その日はついに、知事に会えないまま夜になった。

種やんは先頭になって、鍋、釜、コンロをもちこんできて、メシを炊きはじめた。

「あの……煮炊きでしたら炊事場をどうぞ……」

守衛が見るに見かねて、場所を提供してくれた。

「ほなら、貸してもらいまっせ」

とパタパタ、モコモコ、みんなのメシを炊き、握り飯をつくって坐りこんだ。

翌日も、争議団はつめかけた。相変わらず知事はつかまらない。

「知事に会わせろ！」

「どこへ、逃げたんや！」

「争議団に越年資金を出せ！」

みんな、口々に叫んだ。誰かが、知事は新大阪ホテルの夕食会に出席するという情報をつかんできた。

「何やて！　俺たちが年が越せんで、食うもんも食わんで陳情にきとるのに、知事は豪勢な夕食会に出とるんか！　そんなら、そこへいこやないか！　俺たち、晩メシ食わしてもらって、話ししようやないか！」種やんがまた秘書にかみついた。

「そ、それは困ります。」

「困りますいうて、わいらは毎日こうやって待たされてるんやで！　それでも大阪府民の知事か！」

ついに、秘書室長がでてきて待たせたおわびにこの日の晩メシだけは、水了軒の二〇〇円の弁当をだすということになった。

「おーい、弁当やで！　今、何人おるんや？」そういって、人数を数えはじめたら、あっち、こっちから職場に帰った連中がまたかけつけてきた。六〇、八〇、一〇〇人とふえていった。秘書室長は悲鳴をあげていった。

「一〇〇人だけで、もう、うちどめですよ」

みんな、坐りこんで、うまそうに、駅弁を食べているのをみて、守衛がつくづくといった。

「陳情団が煮炊きしたのも初めてやが、駅弁だしたのも、初めてですわ……」

まさに、種やんのガメツイ創意性の独壇場であった。そのうえ、泉州からはるばるきていた二人の争議団の婦人には、天王寺までの車代を出させた。ある争議団の労働者が、関扇労働者の手を握っていった。

「あんたらが、大阪の独占資本とたたかう導きの星や！　あんたらが先頭に立ってくれるおかげで、二人、三人のちっちゃな争議団でも勇気だしてついていけるんや……」

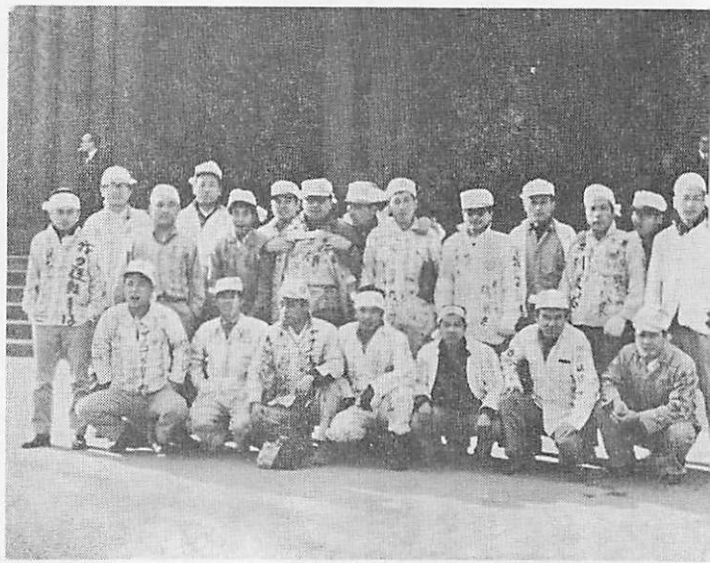
そう語る中年の労働者の眼に涙が光っていた。

〝俺たちが、二年間、歯を食いしばって、地域へ入り、訴えつづけてきたことは無駄でなかった。俺たちのたたかいを見守り、ともにたたかう仲間がこんなにもふえたんだ……俺たちのたたかいはもう、関扇労働者だけのものでも、アサノをやっつけるためのものでもなくなっている……俺たちは敗けられない〟……この越年資金獲得の争議団共闘の中で、関扇労働者は自分たちのたたかいが果たしている役割をはっきりと自覚させられた。

関扇争議団が、今や大阪争議団とともにあるように、種やんの〝おもろさとガメッサ〟もまた、大阪争議団の名物に昇格した。

こうして、厳しいたたかいの連続であった、四一年が暮れ、争議四年目の春を迎えることになった。

第五章　闘えば敵は必ずひきさがる



1　カスメとりから権利へ

三年目の被告の座

四二年四月、待ちに待った、岩男・藤原デッチあげ刑事事件の判決の日がやってきた。仲間たちがかたずをのんでみつめる中でたんたんと判決文が読みあげられた。

「次の通り判決する。

主文　被告人両名はいずれも無罪……」

傍聴席に喜びのどよめきが起こる。開廷前の廷吏の態度から、いい結果を予測してはいたが、さすがに現実にまた一つ勝利を手にした実感は大きい。

「……争議の進行につれて警備警察官の労働組合員に対する監視が強められていったこと、関扇運輸淀川・津守各営業所に警備あるいは捜査に来ていた、所轄の淡路、西成警察署員が同会社から食事を提供されていたこと、淡路警察署の交通課員や警備課員は同会社から歳暮や餞別をうけとっていたことが認められるのである。これは公平中立の立場でその職務を遂行すべき警察官のあり方とは認め難く……」

やっぱり警察の告発資料はムダではなかった……裁判所も、警察の争議行為への不当介入を認めたのだ。

「本件争議において会社のとった態度は、前述の通りであり、なかでも組合に対する破壊工作はその

団結権を侵し、つぎつぎと組合員の脱落を来し、また組合員に対する時間外労働停止の措置は長時間の時間外労働によってはじめて生計を継続するに足る賃金を得ていた組合員に対してまさに『兵糧攻め』の打撃を加えるものであり……従って、組合が会社の激しくかつ悪らつな不当労働行為をはねかえして組合員の団結権を守り、その要求を貫徹しようとするためには、ビラ貼りこそが残された殆んど唯一の争議手段であり、ビラ貼りの効果を最大限に発揮させる必要があった……」

ほう、悪らつな不当労働行為だと、裁判所にしては、気のきいたこというやないか……だいたい組合のいうこと認めよった……地労委での広岡のおばさんの証言もとりあげた……よし、今度はこの大阪地裁の判決を地労委審問でアサノを追いつめる武器に使うんや、これで外堀を埋めたようなもんや……寺やんは岩男・藤原と無言の握手をかわした。

だが、組合の喜びも束の間、検察側は直ちに大阪高裁に控訴した。

その夜、岩男がうちに帰ると、またささいなことで夫人といいあいになってしまった。

「もうすぐ、もうすぐいうて、もう四年目よ。地裁で勝ったいうても、また〝被告〟やないの……何時になったらこの暮らしが終わりになるの……」

「しかしなあ地裁はほとんど全面的にこっちのいうこと認めたんやで。いよいよ最後のツメやで！」

「もうたくさん！」

彼女は内職の刺しゅう道具をなげだした。子供が火のついたように泣きだした。
「こうやって、朝から晩まで、子供をほったらかしにして働いて、一日八〇円……あんたには私の気持は分からん……」
「分かるよ……」
「それも、何にも悪いことしとらんでも、近所に気がねして、音を立てんように仕事せんといかん……こんなみじめな思いをして……あんたには分かりません、私の気持は……」
「生活保護が安過ぎるんや！」
「黙ってて！　もうたくさん！」毎日、毎晩くり返される夫婦のいいあいだった。
「たとえ、お金が手にあるときでも保護家庭の人間は買物に気がねするのよ。保護うけてるくせにあんなもの買ってって……うしろ指さされるのがイヤで……ああ、働いたお金でのびのびと買物がしたい……」
岩男も、もうそれ以上言えなかった。理屈ではないのだ。あまりにも貧し過ぎるのだ。今が一番シンドイ時やなあ、と岩男は自分にいいきかせていた。

ミセス〝ゴッコ〟と相ちゃんの反乱！

岩男家だけではない。闘争生活四年、五年となると、どんな強い団結にもいろいろとグチもでればトラブルも起こる。

職場では相変わらずのオルグとバイトの拠点生活が続いていた。二人ずつ当直をきめ、朝晩のメシは交替で食事当番がつくっていた。津守では広松おっさんの食糧庁長官がケチケチ田中財政のせいか、なかなかコメをたくさん食べさせないし、淀川では南野会計がソロバンがなかなかあわないという理由でゼニを出してくれないといって、みんなブーブーこぼしていた。
その頃、二つの反乱が津守の職場で起こった。一つは相原がどうでもオルグはイヤやといいだしたことである。
「そんなこといわんで、相ちゃん、できるて。そら、楽に協力してくれるとこだけではない。まるで、乞食か厄介者みたいな眼でみる人もいる、これが、同じ労働者かってケツまくりたくなる時もある。そやけどなあ、そこで、頑張るんや！　俺たちのたたかいは労働者みんなの代表やと確信もって、話きいてもらうんや！　話し方だけやない！　まごころや。いつか必ず、分かってくれる時がある。その時まで、何度でも、足を運ぶんや」
山中にいわれた。相ちゃんの頭は割れそうだった。秀やんに貰められ、種やん、寺やんみんなにいわれて、その通りやと思うても、でてくる言葉は「いやや！　オルグはいやや！」ただそれだけだった。六つの時に父親に死なれ、母一人に育てられ、小さい時から立ちんぼに、沖仲仕、ありとあらゆる肉体労働には自信があったが、口を動かすことは苦手だった。貧乏は腹さえ満ちれば別に気にならない。だが、偉そうな労働組合の委員長の前で〝物品販売に協力して下さい〟と筋道たてて話すのが死ぬよりイヤやと思った。

その日も、まばゆいようにまっ白なワイシャツを着た委員長に立派な部屋の席も立たずに、軽べつした口をきかれ、相ちゃんは泣きたくなった。彼の担当する西区は、とくにホワイトカラー組合の多いオフィス街。彼は何度も、何度も、くやし涙がこみあげ、自分の下手な口をぶん撲りたくなった。ダメな時はダメ、もってでたビラがまだたくさん残っている。でもみんなの顔を思いだすと、橋の上から捨てることもできない。だが、足はすくんで同じ組合事務所の前をいったりきたり三度も四度も犬のように歩いている……相ちゃんは、わけのわからない怒りと涙がこみあげてきた。

その日も、次の日も、そして三日目まで、相ちゃんは〝オルグはイヤだ〟といい続けた。入れかわり立ち替り幹部総がかりで彼の説得を続けた。相ちゃんの〝オルグイヤや〟はこれで二度目なのだ。とうとう三日目の夕方、相ちゃんは陥落した。やっぱり幹部たちの説得と理屈は正しい、相ちゃんは黙って、うなずくより仕方なかったのだ。

だがその後がある。幹部たちが安心して家に帰ったところへ、酔漢がちん入したのである。しらふでは何もいえない相ちゃんの逆襲だった。

「執行部のいうことときくで。そやけど、わいの気持なんか、分かっとらへんやないか、わいにもいいたいことがあるねん……」

相ちゃんは、三日間、説教しつづけられ、たまりにたまったウップンを酒の勢いで敢然とぶつけた。あっけにとられる執行部を片っぱしからやっつけて歩いた。そして泣いて口は下手でも

一生懸命やっている自分の気持をぶちまけて歩いた。

もう一つの反乱は、チョンガー松園君、飼育中のミセス〝コッコ〟君。津守事務所は労働者のとりでとなって以来、その男臭さにほれてか、いろいろな動物も移りすんできた。野良犬に、宿なし猫、鳩ポッポに、コケコッコまでである。男らしさをしたってきたからみんなメスだったかどうかは知らないが、ミセス〝コッコ〟だけは間違いなくメスだった。ひよこが大きくなって、久しぶりに、水たきにでもしようといっていたら、危機を察してかピョコピョコ卵を生みだしたから、この動物たちの世話をするのは、すべて松園。他の連中は拾ってくるだけ拾ってきて、さっぱり面倒みない。津守は家族持ちばかりで、かあちゃん、子供のメンドーが忙しくて動物どころではなかったのだろう。

松園はめだたないが、オルグもこつこつと港地協に感謝されるほどよくやり、生活のこともこまかく気をつかった。女房と別れ家族にも勘当同様になって男一人、大阪でたたかいぬく厳しさを動物たちとの交情でやわらげていたのだろう、動物たちも彼一人を頼りにしていた。

飼主の方が食うや食わずであるし、たたかいが忙しくなると、つい、ワンワンのことなど忘れてしまう。だから関嶋の動物たちはいつも空腹でスマートであった。それでもミセス〝コッコ〟だけは、貴重な食糧を毎日、再生産してくれるから、特別に食糧の配慮はされていた。だが、やはり、コッコの餌まで、ゼニがまわらない日が重なる。何しろ大根の葉っぱまで、人間の腹に全部入るのだから。コッコは自分の生んだ卵をたべだした。その状態が続くと、さすがのコッコも

母体の危機を感じ、新たな生命を生み育てたいという悲願をこめてコッココッコと鳴きだす。そしてやせおとろえる二本の足をひきずって、唯一のヒト、松園のいる所へ……そして、ついに、坐りこんでしまった。

「コッココッコ……コケーコッコ……」

「ありゃあ！　とうとう、トリが坐りこみはじめたでえ！　飼い主と同じようなことやりよるなあ！」

「こら……俺たちが悪いんやないで！　アサノが悪いんや……お前も、一緒にアサノ本社に抗議にいこか！　餌よこせいうてな」

泣かれても餌をやれない松園の胸の痛みも知らず、みんなは勝手に騒いでいた。コッコは何時までも坐りつづけていた。

百花斉放—個性豊かにたたかいぬこう

相原や松園だけではない。関扇の男たちはみんな何かしら自分の特技をもち、その特技に応じて任務を分担している。

広松のおっさんは〝闘争中に定年や〟といわれる最年長者、そのうえアルバイトに行くと、あっちこっち車ばっかりぶっつけたり、ケガばかりしてしょうがない。そこでもっぱら掃除、風呂炊きと、食糧の管理というわけ。南野は身体が弱いので会計になったのだが、ソロバンは大の苦

手。だから、計算が合うわけはない。だが、そのお陰で、みんなの請求にもなかなかゼニを支給せず、金庫は減らないという結果が生まれたのである。理由は、帳尻があうまで、紙に書いて計算して、その間、支払いストップというわけである。

口を武器にしているのは、まず大声でどなりあげるのがセコ松兄貴、とにかく地労委会長をどやしつけ、ふるいあがらせたくらい。しゃべりだしたら止まらなくなるのが西丸で、いつか街頭選挙演説会で、候補者そっちのけで、マイクをとりあげて彼が一人でしゃべっていたという。その特技をいかして、今や松岡、毛利、岩男たちと集団入居した千里ニュータウン府営住宅で自治会副会長になっている。口でも歌う方は徳島出身、酒豪三宅の阿波おどりに、岩ちゃんの芸者ワルツ。二人とも、何か芸をやれと要求されて、芸者よろしくあちこちで自慢の咽喉を披露してまわった。法律にうるさいのが藤原で、ケチでしっかりしてるのが秀やんと、このへんまでは生来の性格によるところが多いだろう。

このたたかいの中で、新たに身につけた能力のうち、大変生活的で役に立つものの一つに料理がある。何しろ、毎日朝晩の料理当番で、器用不器用の別なくやらされたから、これは確実に身につき、奥さんにも喜ばれた。

みんながよくつくった献立を並べると、

○ちらしずし　○ホルモン焼　○かやく飯　○いなりずし　○焼そば　○水たき　○ぎょうざ　○串かつ

といったところ。みんな最後には、なかなかいい味付けをするようになったということだが、どうも何となく一杯飲み屋のメニューに似ているのはどうしたものか。やはり、育ちは争えないというところであろう。

みんなそれぞれの組に得意なものがある。種やん組のお得意はちらしずしで、一番うまい方だったそうだが、材料一杯いれてゼニも一杯かかったというウワサである。地味でゼニをかけないのが寺やん組のかやく飯、やっぱり性格は争えないというところか。

職業に関係のある特技で、最高の威力を発揮し、たたかいに大いに貢献したのが、朝日奈の解体屋。それに毛利、山中が修理工である。何しろ、オルグにしろバイトにしろ職場を基点に、自由自在に機動力を発揮するためには足がいる。初めは、まず自転車からはじめた。三〇〇円のオンボロ自転車をくず鉄屋からかってきて、部品を補強して乗れるようにして淀川一〇台、津守一〇台計二〇台をつくった。しばらく乗って、売る時には五〇〇円で売った。次に、機動力強化のために一台一〇〇〇円のカブを買ってきて、保険税金こみ五〇〇〇円くらいで乗れるようにした。もっとも、一〇〇〇円で買ったもののままで、彼の腕でつぶすと、ニュームはニューム、あかはあかにバラすと三〇〇〇円くらいで売れるのだから恐れいる。最後に、いよいよ四輪車である。一万円のポンコツ車六台を仕入れて、やはり二年くらい乗りまわした。これもまた、売る時には検査と保険が残っていることをたてに三万円くらいで売りつけた。

モチはモチ屋というけど、とにかく、大変な能力である。転んでもタダでは起きん連中の集まりである。種やんにいわせると、貧乏人が三〇人寄ったら、たいがい誰かが、どこからかゼニをとってくる知恵をひねりだすということである。

ぎょうざ屋やろか……

男たちの料理づくりの能力は闘争資金稼ぎにも結びついた。毎年秋に開かれる〝赤旗まつり〟は絶好の稼ぎ場所となってきた。関扇労働者の〝ぎょうざの店〟を開店して、家族総出で商売をやるのである。

寺やんは毎年秋になると、四二年秋の〝ぎょざ屋開店〟の時のおふくろのはしゃぎようを思いだす。

何しろ最初の経験であり、ぎょうざのつくり方は男たちが毎日きたえた腕で大丈夫としても、客接待から皿洗いまで、どんな具合にやればいいのか皆目見当もつかない。とにかく奥さんたち動員ということになり、東住吉住宅に住んでいた寺やんのお母さん、水間、山副、山中夫人たちが参加した。

心配していた客の入りは、いざフタをあけたら、入ること、入ること。朝から夕方までのべつまくなし、つぎからつぎとお客がおしかけ、坐ってる間も、自分たちが食事する暇もないほどだった。皿洗いが大変であり、洗いにつかう水が少ないので、お客にはなはだ申しわけない話だが、大分、汚れた水にサッとつけてサッとふく程度ですませていた。翌年からはこれにこりて、ビニ

ール製容器にきりかえた。皿洗いと接待をひきうけた女性たちは、全く休む暇なしで、追いまくられた。

料理の方もギョウザはロクにこげ目のつかないうちに運ばないと、すぐ行列ができてしまうし、串かつは手を入れても熱くない油であげたようなのを、お客さんたちはパクパクたべていた。しかも、近所の奥さんまで、昼飯のおかずに、買物籠さげて、買いにきてくれたのには驚いた。

この様子をみて、はじめは商売なんかと、馬鹿にしていた寺やんのお母さんの眼の色が変わりはじめた。若い主婦たちの先頭にたって、甲斐がいしく、身体を動かした。

結局、この日一日でじめて八万円の利益があがった。だが、この日の立ちずくめ、動き通しの重労働がたたって水間夫人はひどい腰痛になり、三日も寝こんでしまった。

その夜、寺やんのお母さんは、生保生活になってから移った東住吉のアパートに帰りついてから、腰をしゃんとのばしていった。

「今日の若いもんは、一寸しごとしたぐらいでのびてしもうて、あかんなあ！」

いかにも、自分はまだいくらでも動けるというように、得意満面の顔だった。

「喜代次」

「何や、お母はん……」

「あんだけ、はやったら、商売もおもろいなあ……」

「そやろ……労働者があんだけ、ぎょおさん集まるからやでえ、分かったやろう、お母はんも

……」

「うん……喜代次、あれ、しょうか……」

「え？　あれって？」

「あの、ぎょうざの店、やってみようか、あれならおもろいわ、商売もいいでえ…」

寺やんはあきれておふくろの顔を見直した。一日の奮闘で、母親はまだ興奮ぎみである。

「お母はん、普通の店にしたらああはいかんで。一日だけのお祭りやさかい、あんなにぎょうさんうれるんやで！　毎日なら、そうはいかんでえ」

「あ、そうか……」

いかにも、拍子ぬけしたような顔で、何かいいたそうに口をとがらした。いきいきとした大勢の人びとの動きと気がねなしにノビノビと年寄でも一人前の労働力として働ける自由さが、彼女を久し振りの解放感にひたらせたのだ。

寺やんは本気でぎょうざ屋開店を夢みるおふくろをからかいながら、ふっと、母親が可哀そうになった。何時も、一人で、このアパートにこもって〝生活保護暮らし〟に気がねしながら、肩身の狭い思いで生きる毎日が、どんなに辛いことだろう……息子は敵とたたかい仲間の先頭に立っているから寂しさも恥ずかしさも感じはしない……だが、母親はただただ、息子は間違っていない、世の中の偉い人が悪いのやと信じ、恥ずかしくても、辛くても、この部屋でじっと待っているのだ。保護は貧しいものの権利だといっても、一生働き通してきた母親の気持をかえさせる

ほど、まだ、世の中は変わっていない。人間、まっとうに働いた人間であればあるほど、ゼニでもなく、地位でもなく、労働とまごころだけで生きられる自由な世界に生きたいと思う……今日のおふくろはその世界をみたんだ。太陽の下で、ただ、無心に、仲間と働けば、あんなにもうかって、あんなに自由な広場—老人が若い女たちより労働力としてみとめられ、胸をはって生きられる場所—おふくろの西方浄土、極楽、理想の社会の面影がそこにあったんだ。……

寺やんはますます小さくなっていくおふくろの背中をみつめていた。

それから間もなく、寺やんのお母さんは持病の高血圧の不養生がたたって、脳溢血発作を起こして死んだ。ある朝、便所に行った帰りに、壁につかまって倒れたきり、もう一言もものはいわないまま、息をひきとった。

たたかいの中で、また一人の家族がこの世を去った。寺やんは、冷くなった母の死顔をみつめて、考えつづけた。

〝生活保護暮らしで、寿命が縮む思いやとこぼしていたのが、その通りになってしもうた……医療券で医者にいくのを恥ずかしがって、とうとう……〟

寺やんは、痛めつづけられ、体む暇もなく酷使しつづけてきた、おふくろの小さな亡骸の前にじっと、坐り続けていた。

2　地域の労働者とともに

南大阪労働者魂に支えられて

関扇のたたかいの重要な柱である地域共闘の発展を示すエピソードに、年末恒例の〝団結餅つき〟がある。大阪争議団としては、全国金属柏原パイプが数年前にこの催しをやったことがあった。関扇では四一年暮から、早速、この経験に学び、せめて、子供たちに少しでも暖かい正月を迎えさせてやりたいという願いをこめて、ガレージをつかって、ペッタンペッタンと餅をついた。朝の六時から夕方暗くなるまで、組合員、家族、地域の労働者がかわるがわる杵をふるい、毎年一石から一石二、三斗のモチをついた。師走の寒風をついて、一日中、連帯の杵音が、アサノの庭に響き渡った。四二年暮は、四一年にひきつづいて、最高の戦果をあげることができた。

全金田中機械、昭和起重機をはじめとする南大阪地協傘下の各労働組合から、一弁ビンをさげて、激励にかけつけてくれた。

ここでも、関扇労働者のたたかうガメツサ魂が発揮される。〝団結餅つき〟は女房子供たちへの贈り物であるとともに、地域労働者との日常の連帯をたしかめあう場であり、さらに年末財政活動の一かんともなる。まさに一石三鳥の効果である。まず、いつもの通り、十二月に入ったら、地区評の関扇支援の要請書をもって各組合をまわり、年末カンパによる〝団結餅つき〟開催を知

らせ協力を訴える。各組合としても、ただカンパを頼まれるより、家族・子供と一緒にといわれるとついホロリとして、金額もはずむ。一万円をこえるカンパがこの年だけで四〇もあり、総額二〇万円をこえた。そして、いよいよ当日。そこにも、招待された出資者組合代表は手ぶらではこない。つぎつぎとのし紙つきの一弁ビンが並び、労働者たちはつきたての餅をいくらかほおばって、握手しあい帰っていく。協力組合の一つ、化学同盟日本ハム労組からは上等のハムが届けられる。やがて師走の街にたそがれが迫るころ、組合員だけが残り、ソックリ手のついていない、酒とハムを肴に、久し振りの乾杯がはじまる。

いや、まことに結構な催しである。日頃の努力と献身があって初めてできることだが、たった一枚の訴えとカンパ袋がこの素晴しい集りを生みだす。一銭のゼニもつかわずどころか、多額のカンパをいただき、労力も提供してもらい、仲間にも家族にも満足してもらい、その上、タップリ、酒と肴もいただける……八方うまくいって、モウカル、関扇のたくましい年の瀬作戦の成功である。

しかも、餅つきだけではない。この年は年末行商としてとりくんだ、クリスマスケーキの注文売と五〇円袋菓子の販売で、合計一〇〇万円の売上げもあった。

だが、関扇労働者はこれが自分たちのやり方だけで成功したなどと思い上ってはいない。〝クビ切られてたたかう労働者を支援するのは、労働者のド根性や〟という、伝統ある大阪労働者の闘魂に支えられて、初めて可能だったことを心でかみしめている。

あのレッドパージの嵐が吹きすさんだ昭和二五、六年頃には、日本セメント労働者さえ首切りに怒って、労務課長を木津川の流れの中に叩きこんだことがあるという。

情け容赦なくクビを切る大資本家たちへの怒りに、右も左もない……そこに複雑な労働運動の状況の中にありながら、関扇労働者支援のカンパ袋を一杯にする淀鋼労働者を初めとする多くの仲間たちの心がある。

関扇争議が始まって間もなく、太田薫元総評議長が南大阪地区評一〇周年記念集会で演説したことがある。

「それで合理化闘争について論議している地域組織の活動家、役員はこの辺をしっかり考えてもらいたい……（中略）……構造改革派であろうと反構造改革派であろうと共産党であろうと民社党であろうと、首切り反対闘争で統一行動ができない理由はないはずです。労働組合ならとれるはずです。その統一行動から問題を発展させればいいのです」

この魂は、関扇争議支援の南大阪地区評および大阪総評全体のとりくみの中に、はっきりといかされた。昭和四〇年春の、アサノと日本セメントを包囲した争議支援集会以来、大阪総評の関扇闘争支援のための行動は陰に陽につづけられてきた。アサノ・地労委に対する抗議行動とともに、支援カンパ活動も行われ、昭和四三年年末には、遂に大阪争議団全体に対する年末カンパ行動を全府下の組合で行うところまで発展した。

全金の仲間との交流

全国金属田中機械――ここは関扇労働者を常に支え励ましてくれた組合の一つである。

同じ苦しみは労働者同志の連帯をより深いものにする。田中機械も会社の分裂第二組合づくりとロックアウト政策に二年間たたかいつづけた。その時、関扇の仲間たちは宣伝カーとビラをもって、早速、田中機械の門前にたった。

「全金田中機械の皆さん。われわれも大資本による分裂、合理化とたたかう全自運関扇支部の組合員です……」

と、ロックアウトされた、有刺鉄線や机の前にスピーカーをむけてよびかけ、関扇合理化の悲劇と労働者のたたかいの現実を知らせた。

二年の苦しいたたかいの末、田中機械は第二組合との統一を実現した。大阪全金労働者の団結と地域労働者の支援の中で、田中機械の職場に明るさと平和がもどった。関扇労働者は心からその勝利を喜んだ。だが関扇のたたかいは五年目に入って、まだ終らない。統一なった田中機械組合事務所には相変らず松園が日参して港地協の使い走りとオルグにすきっ腹をかかえて精を出していた。とくに、昼メシ時には必ず田中機械食堂か東邦運輸の食堂にやっと昼メシカンパにありついた松園の顔があった。当時のことをふり返って、田中機械大和田委員長はいう。

「とにかく、争議団との関係は、お互いに〝世話する、世話になる〟という関係になってしまうが、関扇の人たちは違った。松園君が港地協内をこまめにオルグしながら歩いてくれて、地

協傘下の組合で起っていることを逐一報告してくれる。事務局の仕事を代ってやってくれ、地域オルグの役割を果してくれた。関扇のたたかいの前進のためだけでなく、地域共闘の発展に大いに役立った。また、二組ができた時、関扇の人たちが会社は第二組合をつくる時はチャホヤするが、役に立たんようになったらボロ布のように捨てると訴えてくれたことが、体験がにじみ出て、大変励ましになりました……」

また、田中機械ロックアウト中にこんなオカシナ交流もあった。ある日、関扇労務関係者蒸発後の事務所に電話がかかった。出たのは宮ノ脇、相手は、田中機械労務課員。用件はお互いの争議情報の交換である。宮ノ脇は執行部に相談して、

「今、部長が外出中ですねん、三〇分ほどしたらもう一度、電話してくれまへんか…」

と、電話を切った。〝奴ら、関扇の事情を知らん……よしゃ、大芝居うったれ！〟執行部鳩首協議の上、〝種やん労務部長〟が応答にでることになった。果して、電話がきた。宮ノ脇が電話をとって、相談通り大声で叫んだ。

「部長！　お電話です！」種やんが悠然と電話をとっていった。

「ああ、留守中どうも。わてが労務部長ですねん、初めましてよろしゅう。御宅さんも大変ですなあ、ロックアウトとは……」

「はあ！　ほんまに、困ってますわ、全金は総評でも一番、ゴッツィことやりよりますし、そのうえ、うちはアカや民青が、うようよおりますねん……おたくはどないですか…」

「うちはまあ、まあチョボチョボですねん。そやけど、売上げにもひびきますやろ、ほんまに……」

「はあ、そうですねん、おかげで、輸出むけの品物が送れまへんで、こまってますわあ……」といった具合に、えんえん三〇分も、〝種やん労務部長〟の名演技は続き、相手は今後の労務情報の交換を約束してホクホク電話をきった。電話をおいて種やんはペロリと舌をだした。

この時のホットニュースが田中機械労組執行部に早速伝えられ、たたかいの武器とされたことは言うまでもない。

後日、人気のない関扇事務所の前に立った、田中機械労務課員は、狐につままれた思いで、さぞかし関扇経営者の亡霊と話したのかと自分の眼を疑ったはずである。

すべて闘いはガメツクという、関扇魂はこんなところにも発揮された。

〝ガメツイたたかい〟あれこれ

大阪の〝ガメツサ〟は誤解されている傾向がある。芝居、映画の〝がめつい奴〟などで、ケチと金をためる精神のシンボルのように理解されている。

労働者にとっての〝ガメツサ〟とは、貧乏人の生きる知恵のことであり、強い奴―権力や資本からとりこんで、生きる方法を意味している。しかも、それは自分たちのためだけでなく同じ境遇のすべての労働者のための知恵でもある。

関扇労働者のガメツイ闘いは、ある時は元第二組合員のためでもあった。比嘉たち沖縄出身者も、出口たち創価学会員も、アサノ経営者たちにだまされた。一組を、一、二月で追いだしたら、帰ってきてくれといわれて、日雇い仕事にでたまゝ、それっきりになった。一組のたたかいがアサノの見通しを狂わせたことが原因だが、ボスたちにひきずられていった労働者のその後は気の毒だった。元第二組合員Sは通勤途上、センターラインオーバーで単車をぶっつけ、ひどいケガをした。結婚半年で片足切断しなければならない事故にあったSは、関扇の元職制に善後策を相談したが冷たくつき放された。組合はこのSの窮状を知って病院の世話をし、生活保護をとり奥さんを励ましつづけた。退院したSは、義足をひきずって、組合を訪ね、「第一組合のおかげで、立直れることができました……。一組の人こそほんとうに職場を守って頑張っていることが分かりました。第二組合が自分のことしか考えていないことが分かりました。ホントに有難うございました……」と泣いてお礼を言った。組合は、Sが義足で運転できる職場に就職できるよう生業資金をとり、免許がとれるように福祉事務所にかけあった。

また津守のアパートの子供が、車にひかれて死んだ時は、子供のお母さんたちと一緒に〝道路が狭いから、大型車の通行を禁止せよ〟と西成区役所へ押しかけたし、淀川では商店街と一緒に歩道橋をつけさせ、新幹線の下の道路を舗装させた。

伝説になった種やんの転んでもただ起きんたたかいの真相もこうである。事の起りはアサノ工場の前のドロンコ道で、紙谷が穴に自転車をつっこんで倒れて自転車を故障させ、怪我をしたこ

とである。もともとこの道は、近所の悪名高い凸凹道で、地域住民の怒りの先頭に立って、関扇の仲間たちが大阪市に抗議し、道路舗装を要求していたところである。

「みてみい！　みんなで、あんだけ陳情してるのに、早いこと直さんさかい、自転車も人間もえらい事故に遇うてしもうたんや。と紙谷と種やんが大阪市土木局を電話で呼びつけて、怒鳴った。恐縮する役人に、自転車の修理と治療費全額の支給を約束させ、その上、見舞金千円也をとって、みんなで飲んでしまった。まもなく、市は、慌てて道路を舗装した。

生き抜き、たたかいぬくための〝ガメッィ〟闘魂はやはり、食うこと、のむこと、吸うことに最大限に発揮される。

ある地域の労働者はため息をついていった。

「関扇の連中に、箱のまま煙草だしたらあかんで。一ぺんに三本とられる」

その眼の前で紙谷が右の耳と左の耳と、口にと合計三本の煙草をくわえ、熱心に将棋をさしていた。

何時か、アサノ本社抗議行動の帰りに阪神デパートの大食堂で久し振りのカレーライスをたべた時、某組合員がウェイトレスに言った。

「あの、このカレーはゴッツィ辛いわあ、ちょっと、メシをいれてんか」

皿の中には、飯だけがキレイに食べてあり、カレーだけが残っていた。

「何んぼやろか……」

「いえ、結構です」

ニッコリ笑って彼は、おかわりの御飯をうまそうにかきこんでいた。

また、その頃、日曜日は動くと、腹が減るということで、チョンガー族は事務所に寝ていることにしていた。寝太郎ではないが、寝たまま、誰か、どこかから、いい物もってこんかなあと待ち続けるのである。

何処かの友誼組合員の結婚式――これこそ、空腹チョンガー族憧れのチャンスなのである。といっても本人がいくのではない。組合を代表して一人だけ、もっとも図々しい男が披露パーティーに出席するのである。パーティー終了後が活躍の場である。その日は種やんが代表選手だった。「もったいないさかい、うちの犬に食べさせるからもらっていくで」といって、残り物を手当り次第、袋にほうりこんだ。焼とり、サンドィッチ、チーズにわとりの脚、そして、ビールをかついで種やんが津守に帰って来た。犬のかわりに、相ちゃんがうっとりとした眼で獲物をみてつぶやいた。

「僕は幸せだなあ……」

「こら、うまいわあ、何カ月ぶりや……」と、紙谷や宮ノ脇も喰いついた。その夜は、思いがけない、御馳走パーティーとなった…。

〝ガメッサ〟＝第一組合旗を守るためにこそ！

たしかに、労働者三〇人が集まれば三〇の個性がある。また、もともと貧から出発している労

働者たちは、貧しくても鈍せず生きるための糧を生みだし、獲得するためにバラエティにとんだ戦術を編みだす。だが、ここで忘れてならないことは三〇人の労働者が貧しくても知恵を発揮できる原動力は三〇人が権力と独占資本の横暴に憶することなく立ち向かう第一組合の旗の下に固く団結している確信から生まれるということである。

強大な敵に立ち向かう、総評全自運関扇支部の団結が確立していなかった時には、種やんのチエも酒を瓶からゴム管で寝たまま飲むことの発見や、かあちゃんをごまかすための二重領収書づくりにしか発揮されていなかった。だが、一度、敵の狂暴な攻撃に何としても第一組合旗を守り通さねばならない状況に立たされるや、関扇労働者の生まれつきのガメツイ知恵が敵階級の切りこみにたえぬく、労働者階級の創造的知恵に発展していったのだ。そしてその生きぬくための知恵は、自分たちの才能の発揮と、仲間や市民の好意をひきだし、すがるだけでなく、権力機関や自治体への要求となってさらに社会的に発展していった。

種やんでも最初は家賃滞納を理由とする差押え通知に恐れをなし、借金して払うことを考えた。だが、考えれば食うや食わずの生活保護者に滞納家賃や税金が払えるわけがない。いったいこうなったのも俺たちが悪いからじゃない。貧乏にした会社や権力が悪いんだ。

そこで、寺やんや山中たちと研究してまず市民税は急激に収入が減少した場合の減額規程を適用させ、最低限の額にまけさせた上で、今はないとひらきなおり、月賦払いにさせた。また、滞納家賃について種やんは延期願いをだし、五〇〇円づつの月賦で十年がかりで返還するか、それ

とも争議解決後の一括払いにしろとねじこんだ。

また、生活保護のたたかいでは、保護支給をしぶる各役所の矛盾を衝く作戦をとった。大阪市民生局長は、とにかく能力を活用して就労しろと主張した。執行部はその足で大阪府労働部を訪ねた。山中が労働部長のところへいって訴えた。

「われわれは、地労委でも正しいと命令のだされた立場に立って、あくまで、アサノに就労させろとたたかいを続けている。われわれは今、不当に仕事も賃金ももらえない状態で、アサノとたたかっているのだ。ゼニをもらおうともらうまいと、アサノの系列企業関扇運輸の社員として職場で生活し、一日も早く、正常な勤務のできる日を待っているのだ」

「ところが、民生部長はもう一つ別の会社へ就職しろ、就職しろ、言いよる。労働部長、二つの会社の正社員になることを労働部としてどう考えますか？」種やんがつっこんだ。

労働部長はまずい立場になったことに気付いても、

「もちろん、通常の勤務形態で労働者が二つの会社で正社員となることはできない」と答えざるをえなかった。この労働部の回答をもって、執行部は、今度は福祉事務所に押しかけていった。

「こういうわけで、われわれは他の会社へ行くわけにいかない。だが、アサノはゼニを払わない。だら、みんな、メシが食えんのや！　企業の不法不当なやり方で、われわれはこんな苦しいたたかいをせな、生きていけんのや！　こんなことさせとく、国に責任がある！　国がわれわれみんなの生活を争議解決の日まで、面倒みる義務がある！　」

役人たちは、どこでも眼を白黒させ、慌てて、労働者の激しい言葉に頭を下げた。

たたかう労働者は貧すれば考え、窮すれば通ずる。彼らはふりかかる火の粉をふり払うために勉強した。憲法、労働基準法、労働組合法、生活保護法、税法……彼らが身体でつかんでいる〝労働者は正しい。敵はたたかえば必ず退く〟という確信を、更に、確実な勝利に結実するために必要な知識をガメツク吸収した。ケースワーカーが冷蔵庫やステレオに文句をつけた時に種やんが怒鳴った。

「わいらは、ある日突然に貧乏になったんや！　会社の不法なやり方で貧乏にされたんや！　それまでは普通の運転労働者の暮しやったんや！　冷蔵庫があって、何んで悪いんや？　あるものまで売れいうのが生活保護法の精神か！」

会社、警察、役所、地労委、法廷のあらゆるたたかいの経験の中で、貧乏人の飢えないためのチエが、労働者階級の権力と独占資本に堂々と権利を主張する、階級的頭脳に発展したのだ。こうして〝独占資本が間違っている、国の政治が責任をとるべきである。我々は人間らしく生きる権利がある〟―この労働者階級の権利意識こそ、関扇〝ガメツイ〟闘魂の中身になったのである。

3　アサノ独占をふるえあがらせたもの

アサノはもう逃げられない

関扇元経営陣は雲隠れしたままであり、アサノの経営者たちは地労委の座にひきだされても、なお関扇支配と労働者への不当労働行為責任を逃れようと、必死のあがきを続けていた。

だが、地労委審問は、藤田ら、アサノ経営陣から、関扇への具体的な仕事の指示や管理をしていた工場職制たちの証言に移るに従って、関扇が業務上も労務管理上も名実ともにアサノの輸送部門であった事実が次々と明らかにされていった。それはねばり強く、チ密な尋問の連続であった。小林弁護士に援護された寺やんたち関扇労働者の怒りと執念の審問廷だった。昭和四一年一一月から、実に、三年一〇ヵ月、五五回に及ぶ審問だった。

その間に、アサノは関西経営者グループの支援で、何度もぶち壊しにでた。まず、最初は地労委不出頭、引き延し戦術の中で、労働組合の「兵糧ぜめ」による崩壊と地労委の審問不開始をねらった。それが駄目になると、公益委員に圧力をかけ、〝非公開審問〟の謀略をたくらんだ。そしていよいよ審問開始後も、審問を公正に進めようとする公益委員を経営者団体の圧力で辞職させた。その間に、寺やんにまで、知人を通じて、〝手を打つ〟ように働きかけた。

だが、労働者は一切の裏取引を拒否した。あくまで堂々とあらゆる元経営グループを審問廷にひきだし、古くはアサノ運送部時代から、此花運送、関扇とうつりかわってきた中での独占支配の一コマ一コマを事実と証拠に基いて追及していった。

四四年に入ると、いよいよ、アサノ側の証人を終わり、元関扇経営陣、吉政、高森、藤崎たちの証言にうつった。とくに、警察暗黒支配の中心人物―吉政、高森を、こっそりもぐりこんでい

た会社からひきずりだし、強引に審問廷に立たせた。
高森はまた別の塗料会社で労務の仕事をやり、できたばかりの組合（合化労連）に対して、関扇と同じ、告示・警告戦術による脅迫、支配介入を行なっていた。柴田たちが、その組合に行って高森の正体をあばき、関扇での悪業をバクロした。高森は仕方なく柴田たちを応接室に入れ、自分が関扇にいたことを労働者たちに告白せざるをえなかった。
吉政は椅子製造会社の嘱託の仕事をしていたが、もはや労務には情熱も失い「関扇で労働組合のことはもう、こりごりした……」と、精彩のない様子で、寺やんに告白した。
彼らの現状がどうあろうと、関扇労働者は四年たった今も、職場を失ったままたたかいつづけているのだ。容赦ない尋問の雨が、二人にぶっつけられた。彼らにとっても失敗し、つめ腹切らされた嫌な過去の証言だった。今はもうアサノとは主従の関係もなかった。しつこい尋問に、彼らはなげやりで、捨て鉢な言動をした。
「しかし、地労委命令がでた後の団体交渉で、あんた方はアサノが直接、関扇の組合と会って話をつけるからというてるからひとつ会ってくれんか」と、話していた寺やんが吉政に鋭くつっこんだ。その日は関扇破産にいたるまでの、アサノの指揮命令の証明が目的だった。吉政は混乱していた。
「そうですか……当時はアサノの命令系統も混乱しておったですね。あるいはそういったかもしれません……とにかく、はっきり憶えているのは、ある所で日本セメントの山下総務課長が

上田社長と私に、あんた方はもう経営能力がないから、私が直接話そうといったことです。第一組合でも第二組合でも誰でもということです。そして、そのことはアサノの藤田取締役に依頼されたことだといわれました……」
アサノの藤田の証言を全面的にくつがえす証言だ。吉政はある時点までは、〝忘れた〟と肝腎なことを頬かむりする戦術にでたが、組合の事実と資料に基づく追及に、結局すべてをはかざるをえないところに追いこまれていた。元警察官らしく、警察の支配介入や内部事情のことになると、頑強に陳述を拒否したが、その他の点では、もう抵抗の意欲を失っていた。よりズルがしこく、警察のヒモつき労務商売とみられる高森でさえ、ツメ腹切らされたくだりになると、急に、捨て鉢になり、アサノへの不満さえ口にした。
「あんたたち、関扇の重役がやめて、当然その後を誰がやるかということが問題になると思うけど、その点はどうなったんですか？」
「次を決めるまでお前らやれとアサノはいったわけです。しかし、我々が責任とれば事態が収拾できるかと考えましたね。それまでアサノの連中が我々を思うように、ひっぱってきておいて、そこでやめろというような無責任な話があるかと、私も相当激こうしておりました……」
これで、すべては明白になった……逃げようとしても、アサノはもうどうにもならないところまできた。元関扇経営陣が、一つ一つ、真実を語りはじめたのだ。
後は、最後のとどめに、中川元専務を証言台に立たせて、四年近い証言の真実をつきつけるこ

とだけだ……寺やんはもう一息だ、いよいよ、最後の全面攻撃にうつる時だと、腹にきめていた。

アサノは何が恐ろしかったか？

昭和四三年秋から四四年前半にかけて、地労委における関扇不当労働行為の当事者責任を逃れられない立場が次第にはっきりしてくる中で、アサノは何とかして、早く関扇労働者の追及から逃れたいと焦りだした。できるだけ安いゼニで、自分たちの眼の前から、関扇の三〇人の男たちに消えてもらいたかった。

アサノにとって、何が一番嫌だったか？　八〇台のコンクリートミキサー車の差押えも大きな損害ではあった。だが、その経済的損失が響くほど、日本セメント・アサノ独占は弱くはなかった。一挙に、別会社を入れて操業再開すれば、間もなく埋め合せのつくことだった。地労委や法廷で不利な結果に終ることも嫌なことであった。だが、これもゼニで解決することなら、何年たっても大したことではなかった。問題は、三〇人が車を抑え、事務所を占領し、トリや犬猫までかって、毎日毎晩、津守淀川両工場の一角を占拠し、生活し、四六時中、たたかいの旗を掲げつづけていることそのものだった。たたかいの初期にアサノは明らかに戦術的なミスをした。建物の所有権に基づいて、実力で労働者をおいだし〝立入禁止〟にしてしまえば、組合はせいぜい、組合事務所の使用権を主張して、裁判にかけるぐらいしか方法がなかったかもしれない。職場を失っていたら、ここまでたたかいは続かなかったかもしれない。だが、アサノが法廷に家屋明渡し請求

の訴訟を起したばかりに決着がつくまで組合が事務所全体を占領し、生活し、車を管理しているままの現状を動かせないことになってしまった。

そして三年、今や事務所は三〇人の男たちの内職の職場であり、寝室であり、食堂であり、動物の住居でもある、立派な労働者のになってしまったのである。

おまけに柱ごとに立てられた全自運関扇支部と連帯組合の赤旗の波、そして、「アサノコンクリートは子会社をつぶした全責任をとれ」と大書した、横四間もある立看板。さらに正門横に立てられた「アサノコンクリートは社長を自殺させた全責任をとれ」と書いた三尺四方、高さ三間の巨大な柱が、毎朝毎晩、アサノ経営者たちに関扇の存在を嫌でも思いださせた。プラントを背に夜空につっ立つ、この白い塔は、まるで故上田社長の怨みのこもった霊塔のようにみえた。三〇人の男と旗と看板と塔とニワトリまでがみんな、その全身に怒りをこめて存在と権利を主張しているようにみえた。

これはアサノの経営者にとっては、同業他社への影響も悪く、営業にもひびく、何とも言いようのない資本の敵を身内にかかえていることを意味した。

中川アサノ社長はある朝、自宅で寛いでいるとき、家族の叫ぶ声で腰を抜かしそうになった。

「あの……関扇の労働者が家のまわりに、ビラを一杯……」

その頃、中川の家のまわりと藤田の替りに日本セメントから送りこまれた安田総務部長宅のまわりは、関扇労働者の抗議ビラで埋められていた。電柱という電柱は「アサノは社長を自殺させ

た責任をとれ！」「関扇労働者に仕事をさせろ！」「中川はウソをつくな」「アサノは不当労働行為の責任をとれ！」と、書きなぐったビラでうずめられた。それも、はがされないように、労働者たちはトラックの屋根にのぼり、電柱の上の方に貼りつけた。

中川も安田も会社だけでなく、居住圏まで関扇労働者の幻影で苦しめられることになった。虫けらと思う労働者たちのこの権利主張こそ、資本家にとって我慢のならないことだった。

労働者たちは朝四時に起きて、班を組み、大阪中の町から町をしらみつぶしにビラをはり歩いた。アルバイトは七時過ぎまで貼って仕事にでていく。その他の者は、当番がつくってくれた握り飯をつめこまれて、また、ノリとハケとビラを山のように持たされて、町へ追いだされる。こうして、二カ月間で四万枚のビラが大阪の町を埋めた。梅田の繁華街から、淀川のはずれまで高速道路の橋脚・歩道橋に橋のらんかん、ありとあらゆる場所がアサノへの抗議の言葉で埋められた。とくに梅田、津守、淀川、城東などアサノの領域には集中的に貼られた。

街の街路樹や街燈には、大分かっこいい、立看板に、関扇のビラが貼られた。どうも見たことのある形だと思ったら、わずか数日前に終わったばかりの参院選の自民党選挙用ポスターの立看板に貼ったものだった。このガメツイ作戦は、寺やんの発案で、卒先して選管の仕事を代行し街の美化に協力するということで、大阪中の自民党立看板を集めて歩き、数日後、装いを新たにして独占攻撃の武器として登場したというわけだ。遂に、地労委、法廷、職場に加えて、街頭にまで、関扇労働者と社長の亡霊がのさばりだしたのだ。アサノにとって、三〇人の労働者は、無限の力

を身につけた三〇四の孫悟空にみえたという。

全面総攻撃を！

アサノは一貫して責任を回避し、すべてを関扇経営陣の不手際にして終わらせたかった。だが四二年八月に二年半にわたるねばりずよい組合の要求で、アサノ経営陣を直接交渉のテーブルにひっぱりだしたことは、たたかいの転機となった。それ以後もアサノはできるだけ安く値切り、労働者の身分保証を回避しようとあせった。解決の条件はいずれ、ゼニと権利についてしぼられてくるのだが、彼我の力関係で、一体、どこに勝利のメドを置くのか、その点に意見がわかれた。

そのことで淀川でまた悶着がおきた。事の起こりは、岩男や毛利が机の上に、車のカタログをおいて話していたこと、それに、四四年・四月解決・説がどこからとなく流れてきたことだった。結局、全自運大阪地本、寺やん、種やんを含めて話し合い、・資本の攪乱工作に動揺しないこと。団交でアサノはいろんなことをいってはいるが、何一つ確定的なことはないのだから、たたかいの体制をゆるめるな・という方向を確認して終わった。・四月解決説・は種やんの口の横すべりだったことも確認された。

執行部の判断通り、情勢はまだ流動していた。六月になると、アサノの安田はしばらく姿をくらまし交渉にでなくなった。やはり、組合側の足もとをみて、切り崩そうという意図は見えている。一瞬の気のゆるみは許されない。最後まで、産別・地域労働者による全面包囲攻撃を貫徹し

よう！　組合はその焦点を、岩男、藤原高裁判決の勝利においた。まず、地労委審問での接触の中で、高森、吉政に、告訴取り下げの一筆を組合要求通りに書かせた。

「二人の告訴は、労務政策の必要上、行なったものであるが、もはや、その必要がなくなったので、告訴をとりさげます……」という意味の文章を提出させた。

この告訴取下げの事実を背景に、七月頃までの二カ月間に、一万五〇〇〇枚の控訴棄却請求の葉書を個人に買ってもらい、大阪高裁あてに送ってもらった。また、総評中央、大阪総評を中心とする五〇〇組合、団体の要請をとることができた。

この間、毎回の法廷で、傍聴席を埋めるために、徹底的な協力要請と動員を地域・産別各組織に依頼した。一五〇人定員の大阪高裁で一番大きい部屋を、常に一杯にし、裁判の進行を看視し見守った。全自運労働者が1/3、後の2/3を、地域と争議団の労働者がうけもってくれた。この動員要請のために、三〇人は足をつかい、電話をつかい、二度、三度と主旨を説明し、出席人員を確認して歩いた。一八〇〇日のオルグの成果が毎回傍聴席を埋め、激励にかけつけてくれる仲間たちの数に結実していた。

4　かあちゃんがついているんや

たたかいは家庭をかえる

三〇人の男たちとその家族の一八五六日のたたかいを支えた柱は完全プール制の確立にあったといわれる。たいがいの争議団で考えてもできない場合の多い、生活保護をベースとしたほぼ平等に近い生活水準を全家庭のものにした。決して簡単にその道ができ上ったわけではない。チョンガーはチョンガーなりに、家庭もちは家庭もちなりに様々な言い争いや夫婦ゲンカがくり返された。とくに生活保護に入ってしばらくは、水間家のように、ほとんどの家で子供のこと、老人のこと、近所づき合いのことなどなど、肩身の狭い思いで暮すことに対する考え方をどう変えるかが、各家庭の議論の中身となった。

"リクツはどうあろうと恥しい"その気持を奥さんたちが、変えていくことは楽ではなかった。子供に絵本一冊オモチャ一つ買ってやれない時、つい"うちのオヤジは働けばすぐゼニになる技術をもっているのに……"というグチが口までのぼってきた。

だが、第一回の家族交流会が開かれ、事ある毎に、各家族の悩みを交流し合う中で、保護をとりに行く辛さが、次第に薄らいでいくようになった。とくに安い府営、市営の福祉住宅に集団的に申しこみ、東住吉や千里ニュータウンのように、数家庭が同じ地域で暮すようになってからは、急速に、相互扶助と共同行動ができるようになった。保護も一緒に連れだってもらいに行けば、全然恥しくない。団地の自治会にも顔を出し、意外と貧乏世帯の多いことを知り、ますます勇気がでてきた。

「生活保護てホンマにええなあ。安いのがあかんけど、医者代がタダやし、教育もゼニがかか

らんし、税金も家賃も安いわ。もう大丈夫やわ。何年たたかってもええわ！　アサノやっつけるまでやろう、お父ちゃん……」長男のために生保をやめ、仲間から離れようとした水間夫人はイキイキとこういうようになった。

次女が生まれる時、生保問題のショックで母乳の止った山中婦人も、自分から地域の婦人集会や家族会に積極的に出るようになった。東住吉住宅では、この二人に山副夫人、亡くなるまで寺やんのお母さんも加わって始終行き来するようになった。

千里ニュータウンでは、同じベルマン争議団出身の毛利夫人を加え、西丸、松岡、岩男夫人たちが、協力し合うようになった。

富田林では種やん夫人が二百名近い「生活と健康を守る会」の中心になって近所の人たちの面倒をみるようになった。女性が変りだす速度は早い。今まで、父ちゃんの運んでくる給料にだけ文句をいっていた主婦の座が、一挙に、生活保護暮しという寒風にさらされ、職場でのおやじと同じように、地域で、権利を主張しなければ生きていけなくなった。そう気付いた眼で、冷静に自分たちの生活をもう一度、見直してみた。すると、〝恥しさ〟だけを除けば、収入水準そのものは、残業ストップの時、失業保険の時とそう違わないことに気がついた。むしろ医療費・教育費、税金などのことを考えると楽かもしれない。そして亭主のマットウなたたかいを国の責任で面倒みさせるのだから大威張りでもらえる性質のものだということに思い当った時から、夫人たちの胸に政府大資本に対する怒りと、父ちゃん、子供とたたかい続けようというモーレツ闘魂が

燃え始めたのだ。火はたちまち燃え広がる。

母ちゃんが家庭と世の中を変える

「うちとこのお父ちゃんも、当番で料理作るようになってから、カマボコきちんと、並べて切れるようになったわ。前は太いのや薄いのや、ひっくり返ったり、横向いたり、ひどい切り方やったけど……」

「うちも生活費浮かせるのに一月ぐらい田舎に子供連れて帰ってる間、チャンと一人でやってるわ。安い物料理すること憶えて残しといたおかず代あまり使わんで、うちらの帰りを待ってるようになったわ」ある日の水間夫人と山副夫人の話し合いである。

「そやけど、うちのお父ちゃんはやっぱり、職場であったことやたたかいのことも、なかなかちゃんと話してくれへんのよ。山副さんとこはいいわ、親切に話してくれはるから……」

「その代り、うちのお父ちゃんはワケが分らなあかんようにかんでふくめるように話すんや。まるで、子供に話すみたいに…しまいに、うちの方が、メンドウくさくなって、眠くなるまで話すんや…」

「ええわあ、よし、うちのお父ちゃんにも、見習ってもらわなあかん……」

夫人たちは互いの家庭の民主化の度合いを交換し合い、仲間の亭主のいい所は、早速、自分の家の民主化に役立たせようと実行に移す。三〇人の男たちも、今までのように、面白くない時に

女房に当り散らしてすましてはいられなくなる。家庭の変革は具体的で、かつ日常的である。
古くからの幹部活動家であった山中も、生保問題で奥さんを説得するうちに、今まで家庭で、世の中のことを真面目に話していなかったことに気がついた。これでは、たとえ、亭主が外で高い指導力や理論水準をもっていてもたたかえない。そのことに気付いた所から山中の自己変革のたたかいが始まった。〝今までのように、女房子供の面倒をみるという姿勢ではたたかえない。女房も一人の人間として社会の矛盾とたたかい、一緒に家庭生活を築く姿勢が必要だ……〟。
夫人も、山中の活動を内助の功で支えていた姿勢から、だんだん自分で外に出ていき、地域の新婦人の一員になって活動するようになった。そうなると、時には、山中が夫人のために、三人の子供の子守りをして、家に留守番するようになった。
亭主だけではない。母親が自信をもって生活するようになると子供たちもかわる。
水間家長男は最初のうち、教育扶助のことを〝僕は何でタダなんやろか……〟と、首をひねっていた。そのうち二年になってから、何故、生活保護でたたかうかをじっくり説明してやったら、「ふーん……僕はそんなら得なんやな」というようになった。
親が心配するより子供はずっと現実的でチャッカリしているものだ。親が隠すつもりでも、平気で近所にいってシャベる。言うなといわれたことはなおしゃべりたくなるのが子供なのだ。ある日山副夫人の一番、つきあいにくい主婦にむかって、息子が得意にしゃべっている。
「組の子は、みんな千何ぼ、払わないかんけど、僕だけは、四百何ぼでいいんや！」

思わず、彼女は物陰にかくれてしまった。山副家長男はその後、親の気がねなどなんのそのと、スクスク成長し、闘争勝利後、生活保護暮しと別れをつげたトタンに不服そうに言った。
「近頃は何で、こないよけいに、学校に金払わんとならんのや！」
水間夫人は、その後、ある争議中の組合の炊事の手伝いを頼まれた。組合をつくった途端にクビ切りを宣告された。八人ばかりの金属労働者たちだった。
「もうだめや！　たたかってもあかん！」若者たちは苦しいたたかいにネをあげた。「分かる、分かるわ、あんたたちの気持……うちもたたかいに入ったときは、ツライッライと思って、今日やめよか明日やめよかと、お父ちゃんの足をひっぱっておったわ……そやけど、後になって考えたら、その時は自分のことしか考えとらんやったことが分ってきたわ……ね、もっと話し合うんや、あんたたちはそんなに若くて、元気がいいんやもの……関扇にもあんたたちよりちょっと上ぐらいの若い人が頑張ってはる……大阪中に頑張ってはる争議団が一杯なんや、ね、一緒に頑張りましょう……」
水間夫人は、何時の間にか、平均一八歳の若い争議団の仲間たちに語りかけていた。自分の弟か子供のように思え、ひと事ではなかったのだ。若者たちは、思わぬ炊事のおばさんの励ましと熱弁に、じっと耳を傾けた。
水間夫人は思わず話してしまって、ハッと思い当るものを感じた。
「うちが、他所の人にこないな話ができる……関扇の人達と、五年間たたかってきたからや、

この前も、ある奥さんによくそんな生活五年もやらはったなといわれた……人に言われたら、そんなにえらいことかなあと思った……そやけど、みんなが関扇のたたかいを見守ってくれてるんや、関扇の組合が敗けることは日本の労働者が敗けることやって、いってくれはった人もいた……どんなことがあっても敗けられへん……うちたちは日本の関扇労働者の家族なんや……うちは、よかったと思います、関扇労働者の妻で……うちたちには大阪と日本の労働者の先頭に立たんならん責任があるんや……誇りがあるんや……」

水間夫人は、自分たちに続いて、胸をはってたたかいはじめた、この幼い若者たちのために、何か力になり、励ましてあげたい気持をこめて、御飯炊きを続けていた。

5　勝つとはどういうことなんや？

四四年の春―淀川で解決の条件をめぐって激論がたたかわされてから、夏、初秋と、組合員の主要な関心は、解決の中身であり勝ち敗けの基準だった。

どうやら煮つまってきたアサノ提示の条件は、解決金による処理ということだった。だがみんなの問題にしたのは〝職場復帰〟であり〝身分を保証させる〟ことであった。

アサノはその点に関しては、いっさい触れたがらない。身分上の責任は回避しゼニでかたをつけようということである。その主張は、頑強であり関扇の企業再開やアサノによる職場復帰は不

可能に近い。

「職場にもどれんのやったら敗けや。もう、これ以上やっても意味ないわ」

「ゼニだけなら、何ぼやっても知れてるわ。頑張ってもしゃないわ。それやったら、どこぞ、他の未組織の職場へいって、たたかった方がええで」

という、強硬な意見が淀川からでて執行部の説得もなかなか通じなかった。

「そんなこというても、無理や！　何ぼたたかいは正しかったいうても、アサノに雇わせるのは無理やで！　ゼニとって解決してもええやないか！　アサノをひっぱりだしただけで、五年間たたかった意味はあるんや！」

という意見も一方にはあった。

「ゼニだけでなく、関扇労働者の身分に対するアサノの責任を明確にさせれば、われわれのたたかいの基本目的は達せられる」

この意見が、大勢を制した。

討論は何度も、むし返され、くり返されていた。

「アサノに責任をとらせたことが、なんでそんなに大きなことや？」淀川からまた質問がでた。

「そら、アサノが地労委にひっぱりだされんために、どんだけ必死の抵抗したかを考えたらはっきりするがな。関西経営者団体の力で、公益委員の抱きこみから府の役人への工作までやったんやで！」山中が言った。

そうやな。それがどういう意味かといえば、労働者がたたかえば、権力も独占も必ず退るゆうことを関扇のたたかいの中でつかんだことが一番大きいゆうことやで。しかも、関扇の労働者だけやない、産別全自運労働者と大阪争議団や地域の労働者の連帯の中で大衆的に確認したことが一番大きなことやで！」

寺やんがつけ加えた。

たしかに、大独占企業に対する労働者のたたかいは、企業内、あるいは下請関連企業労働者をとわず、まだ端緒についたばかりである。従って、もっとも、定着性のうすい〝流れ者〟労働者＝全自運労働者が完全プール制を基礎に地労委・法廷の場を駆使して、アサノ独占を追いこんだということは、限りない希望と確信を全産業の労働者に与えるだろう。事実、〝関扇のようにたたかえ〟ば、独占の弱点に喰いつくことができるという考え方が、関西の争議団に生まれ、毎放映や石川定期での親会社に対するたたかいに発展していった。

第二に、この大独占に対する長期かつ雑草の如く強いたたかいを可能にした、〝ガメツイ〟たたかいの創造がある。

〝俺たちは正しい。労働者をほおりだしたのは独占だ！　労働者が人間らしく生きるのは権利である〟

この確信が関扇闘争の〝ガメツサ〟の基礎であった。ここでいう〝ガメツサ〟は、前述した労働者が人間らしく生きることをかかげる第一組合の旗を守りつづける〝ガメツサ〟なのだ。独占

と対決し、第一組合の旗を守るために必要な武器は敵から奪っても生き抜く――このたたかいの思想と権利意識の確立が、ごく普通のバクチと酒をこの上もなく愛する三〇人の男たちを一八五六日たたかいつづけさせる原動力だったのである。

そしてこのガメツイたたかい、敵のノド笛に喰いつく力を関扇労働者は地域や産別の労働者、また役人たちも含めた大衆の中から一つ一つ学んだ。〝オルグはいやや〟〝乞食みたいに物売るのいやや〟と初めは、自分たちのたたかいを訴えることさえ恥しく、ビラまきを終えることもできず、ウロウロと街をさまよっていた男たちが、各担当地域の世話役下働きを雨の日も風の日も続けるオルグに成長したのだ。全金田中機械委員長が「関扇争議が続いている間、港地協内の交流と活動に一本芯が通っていた。解決して残念だといいたいくらいです」というほど、松園は〝関扇のたたかいを勝利させるために〟という訴えから〝港地協全労働者の連帯と共闘の前進のため〟の訴えと行動に、彼の全神経を集中する毎日を送ったのだ。松園だけではない。西成でも、東淀川でも、此花でも、大正でも一人あるいは二人一組の関扇オルグが、その地区の労働者連帯のための尖兵となり、下働きの役割を果したのだ。

〝地域労働者の連帯なくして関扇争議の勝利はありえない〟この悲願が地域各組合に各労働者の中に起っている問題に、謙虚に耳を傾け、関扇の経験を田中機械につたえ、田中機械の成果を全地域のたたかいの血肉にしようと、たたかいのあるところ必ず関扇労働者はかけつけた。たたかいのチェと経験の運搬屋となり、労働運動の貴重な教訓を組合から組合に伝えるパイプの役割を

果した。

これは、関扇労働者の一人ひとりが特別にすぐれた労働運動の理論や経験を豊富にもっていたからできたということではまったくない。労働組合の連帯にとって血肉となるものならどんな小さな経験でも、たたかう労働者の身につけてもらい、そのことの中で、連帯の輪を広げようという誠意と熱情の結果以外の何ものでもない。

ここで大切なことは関扇労働者たちが自分たちのたたかいへの支援を訴える行動の中で、資本と対決する最大の武器＝地域全労働者連帯へのオルグを、日常行動として身につけたということなのだ。たとえば〝団結餅つき〟で教えられた地域共闘の知恵を、〝争議団年末資金獲得闘争〟に結実させて関扇労働者は大衆から学んで、それをより大きな力にして地域に返していった。

このようなたたかいが可能になった根抵には関扇労働者のなかで、くり返し討議され確認された〝地域オルグの重要性と大衆に学ぶ〟作風があった。すなわち、オルグに入るとき〝関扇の現実を訴える中で、どんな場合にも地域労働者の立場にたってまず話をきき大衆の苦闘とともに歩むこと。そして大衆の利益を守るために献身的に働くこと〟という立場がそれである。

こうして関扇労働者が真に地域産別労働者大衆のために働くことの中に、関扇勝利への唯一の道を見出し、そのたたかいを切り開いたことの中にこそ、関扇争議勝利の真の意味があるといって過言ではあるまい。少なくともこの関扇のたたかいとオルグの影響の中で、〝地域産別共闘を強化すれば、独占に喰いつく道がある〟という考えをもつようになった無数の労働者が誕生して

いることは間違いないのだ。

権力と独占資本が労働者の土性骨のすわったたたかいを恐れる最大の理由はここにある。独占はゼニをとられることも、裁判や地労委で、黒星をつけられることも決してそれほど恐れはしない。不法不当だとレッテルを貼られても、彼らの利潤追求の体制が確立すればいいのである。ただ、権力と独占資本を恐れず、〝俺たちは正しい。生きる権利がある〟と堂々とたたかう労働者が増えることこそ独占資本にとって最大の脅威なのである。

そして労働者の立場からいえば一つのたたかいの中で勝ちとる成果の中身は、ゼニだけでもなく、裁判や裁定の中身そのものだけでもなく、ほんとうはこの労資対決の運動の法則を身につけ世の中のしくみやあり方の根っ子を批判し、資本を追いこむ物の見方のできる労働者が誕生することなのである。その上、法廷や地労委闘争で勝つことができるならば、それにこしたことはない。逆にいえば、こういう視点から地域や産別、市民の中にたたかいの戦力をひろげ、その力で、法廷や地労委闘争を活用するということである。こうしたたたかいが、ガッチリ組まれたかどうかで、ゼニの額が高くなったり、不当労働行為事件勝利の時期が早まったりするのである。関扇労働者はそのことを忠実に実践し、総評、全自連、地域労働者の力の総結集によって和解の条件を叩きだしたのだ。

長い議論の末、やっと、三〇人はわれわれのたたかいがここで、一つの区切りをつけることの意味をつかみとった。

「それにしても、みんな変わったで！」

寺やんが言った。そういわれて、お互い、周囲を見まわして、みんな苦笑した。たたかいの初めに、労働組合員らしかったのは、ほんとに、数人だけで、あとは、ヤクザと流れ者の集団であり、運転だけはできても、経営者やボスにキンタマにぎられていた、ノンベエでバクチ好きの無責任男たちだったのだ。西丸、松岡は第二組合と第一組合の区別もつかなかったし、学習活動の中心になった柴田だって腕っ節が強い正義感にすぎず、森と一緒に警察にパクってくれと撲りこみをかけた程度だった。争議団の中核、毛利は、仏罰を恐れて、長い間、創価学会のご本尊様を捨てられないでいた。バクチ・競輪の気違いは数知れず、宮ノ脇はヤクザは知っていても、組合なんか全くエンがなかったという。岩男副委員長も、呪文のように〝独占資本〟アメリカ帝国主義〟を唱えることしか知らなかったし、種やん書記長は最後はジャンケンで負けたために、執行部になったにすぎなかった。

それがどうだ、今じゃ無口の相ちゃんさえ、一人でホワイトカラー組合にオルグにいけるし、みんな一人か二人で、各区の労働組合・民主団体を受持って署名を集め、多額のカンパを集める力をもっている。貧乏の中で母ちゃんとスクラム組んで、地域のボスや権力とたたかい、子供をマットウに育てることができるようになった。何よりも、どんな苦しみの中でも明るく胸をはって、みんなで生きていく雑草のようなたくましさと知恵と明るさを身につけた。この三〇人の固い団結……五年間の風雪で鍛えあげられ、試され、地域産別の仲間の団結にかけがえのない存在

となった。三〇の男の団結……こいつが、何ものにもかえられない関西闘争勝利のたしかな証しなのだ！

寺やんの胸の中に初めてズッシリと、五年のたたかいの重みがこたえた、〝全能の権力と独占資本〟に対して一歩もひかずにたたかう団結の力を身をもって体験した三〇人の誕生こそが、このたたかいの最大の成果や……と、寺やんはそっと、胸にいいきかせていた。

終章　人びとの中へ——三〇粒の種が阪神の大地に

高裁勝利から和解調印へ

昭和四四年一〇月から一一月にかけての二月間——一八五六日をたたかいぬいた関扇三〇人の労働者とその家族たちにとって、忘れることのできない感激の日々の連続だった。

一〇月三日、大阪高裁は検察の控訴を却下し、第一審の無罪判決を支持する判決をだした。

「会社が組合員のみに対し時間労働を停止することはその合理的根拠を欠くものと言わざるを得ず……しかも右不当労働行為を含む会社側の態度はかなり強行であり、尋常な手段ではその反省を期待することができず、かつ、組合としては……各般の法的手段に訴えてはみたが早急な救済はなされず、このまま推移するときは組合員の収入が半減し、生計の維持も不可能になるといった窮状に追いこまれ、やむを得ない状況から本件ビラ貼り行為に出たものと……」

勝った！　ビラ貼りが場合によっては違法になるような言い方は一審の時より悪いが、それで

もとにかく、岩男と藤原は無罪になったのだ。二人は緊急集会に集まった二〇〇人の労働者に感激に声を震わせて勝利を報告した。

一〇月二一日、全自運関扇運輸支部は、アサノコンクリート株式会社との間で次の協定に調印した。

協定書

今般関扇争議一切を解決するため、全国自動車運輸労働組合関扇運輸支部（以下甲という）及び大阪アサノコンクリート株式会社（以下乙という）は次の通り協定する。

一、(イ)乙は関扇運輸株式会社破産管財人の行なう甲組合員、寺沢喜代次ほか三〇名の就職斡旋に協力する。

(ロ)乙は甲に対し本協定成立後二ヶ月間につき、甲組合員の生活を保障する措置をとる。

二、乙は甲に対し、本件解決に当り解決金を支払う。

三、乙は甲組合員、岩男是命、藤原種利に対する告訴を本協定成立と同時に取り下げる。

（中　略）

六、乙が本協定の約旨の履行を了えるのと引換に、甲は、その占拠している乙の施設を乙に明渡す。

昭和44年10月22日

甲　全国自動車運輸労組関扇運輸支部
執行委員長　寺沢喜代次

乙　大阪アサノコンクリート株式会社
代表取締役　酒　井　季　夫

すべては終わった。藤田にかわって、組合との折衝に当たってきた安田がアサノを代表して、協定書と解決金をさしだした。

その夜三〇人とその家族は、「喜楽別館」の座敷をかりきって祝杯をあげた。思えば四年前の地労委勝利の時、ここで祝杯をあげることになっていたのだ。あの時、命令の出された夜、松岡と山中が乾杯して、夫人に得意になって言ったものだ。

「九分九厘勝った！　あと一厘や！」山中夫人はその後、夫をよくからかった。「あんたのあと一厘は長い一厘やね」と。とうとう、あと一厘のツメのために、四年五カ月が過ぎ、やっと、「喜楽」での祝賀会を開くことができたのだ。

祝の歌をうたう妻たちの足下に、たたかいの中で誕生した二世たちが、喜々して飛び廻っている。みんな、誕生とともに生活保護のミルクをのんで育ったたくましい子どもたちだ。いつか、もっと成長して、この世の中の仕組みが分かるようになった時、親の貧しさとたたかいを理解する子どもになって欲しい。自分の親たちが何のために何とたたかったのか、なぜ親はたべないで子どもたちを育てなければならなかったのか、すべてをその身体でうけとめてくれる日がくるに違いない。……

片隅で、そっと涙をふいている妻もいる。ゼニだけでなく、就職の斡旋と二カ月間の生活保障

をさせることによって、関扇労働者の身分にアサノが責任をもつ立場を明らかにさせた。三〇人はおよそ、自分たちのたたかいの目標が達成されたことを認め、全員一致で調印を承認した。

調印の翌日、アルバイトは、全員、仕事先の労働者に協力を感謝してひきあげてきた。そして間もなく、全員で解決金を分配した。残務処理などに必要な金額を残して全員平等に分配した。ゼニをうけとる手がふるえている……まだ、手にしたことのないゼニだったこともあるだろう、だがそれだけではない。すべての労働者のすべての家族の寺やんや井口のお母さん、山副のお父さんたち、たたかいなかばで亡くなった人びとの、血と汗と願いがこのゼニの中にこめられているのだ。資本主義社会のゼニでははかられない、労働者とその家族の献身とこころがこめられているのだ。

金額はいくらになろうと、全員一律という配分方法は、執行部で慎重討議の上、前もって提案されていた。勝った後の分配金のことで、活動の凸凹や家族の人数など、様ざまな立場から不平がでて、団結にひびが入った先例を聞いていた。関扇では、そのテツをふむまいという配慮で早くから配分方法だけはきめたのだ。誰一人、不平をいう者はいなかった。中には、ソクラテスというあだ名のある田沢組合員のように、闘争期間中、結核のためほとんど入院生活を送った組合員もいた。彼は病院で署名を集め、闘争資金カンパを訴えた。組合員誰一人、活動の多少で、金額に差をつけないことに文句をいうものはいなかった。基準はただ一つ〝最後まで、第一組合の旗を守って、たたかい抜いた者〟それだけだった。

完全プール制の中で鍛えあげた、全員討議全員行動、一人ひとりの意見をトコトン尊重し、決まったことはみんなでやりとげる訓練があったからこそ、この完全平等の配分が可能だったのだ。

部屋の外では、早速〝労働者の貯金を〟と労働金庫の職員がニコニコ待ち構えていた。

酒ぬきで関扇らしい報告集会

一一月一一日午後六時—大阪中之島公会堂三階ホールは、関扇闘争勝利報告集会に集まった、一〇〇〇名の労働者市民で埋まった。

三〇人の男たちはみんな、家族をひきつれすっかり上気していた。種やんも晴の舞台の経過報告の任務を与えられ、さすがに緊張している。寺やんは一人でヤキモキしていた。解決以来、この日まで、毎日総括し、議論しながら、全員で集会の準備をすすめてきた。旗をつくり、記念品を準備し、協力してもらった各組合をまわって、この日の酒ぬき集会への参加を訴えて歩いた。

「一杯の酒でもださな、そら集まらへんで！」という人もいたが、あくまで、ガメツイ関扇流で終わりまでやろうということになった。酒はなくとも心のこもった集まりにしたい、そう訴え、お礼をのべてまわって歩いた。

そうはいっても、開会の瞬間まで、寺やんは気が気でなかった。だが、心配はいらなかった。全自運はもちろん、全金、全国一般、化学同盟、大阪交通、全電通、その他、つねに関扇のオルグ行商を支えてくれた、南大阪地区評、北大阪地区評を中心とする、数多くの組合が代表を送ってくれた。一〇〇〇名をこえる人びとで、ホールは埋まった。今日の主役、関扇の労働者、家族は最前列に敷物をしいて坐った。

柳川全自運大阪地本委員長に続いて、社会党代表西風いさお、共産党代表東中光雄、大阪総評代表田所譲各氏の挨拶と全自運引間委員長の記念講演が行なわれた。

いよいよ種やん書記長の報告である

「皆さん、われわれ、関扇労働者が今日までたたかいぬくことができたのは、ただ皆様方、全労働者の連帯の賜物です。三〇人の団結だけでは敵を倒せません。全自運の仲間たち、南・北大阪地区評を中心とする多くの仲間たち、産別、地域の仲間の力がアサノ—日本セメント独占を追いつめたのです。皆さん！　広範な労働者・民主勢力が団結したとき、困難をうち破る大きな力が生まれるので

家族と一緒に

す。このことが私たちの一八五六日のたたかいの中でも、明らかになりました……」

種やんは一世一代の報告演説に感激し、あがり気味である。ともにたたかいつづけた全自運大阪の仲間たちの顔。四二年に、関扇・阪神急行、石川定期のたたかいのために、遂に統一連帯ストをうった仲間たち……。三〇人はみんな四年の風雪の中を着たきりスズメで通した、よれよれのジャンパー姿だ。だが、何といい男たちにみえることだろう。夫人たちも同じだ。親の衣類など買いたくても買えなかった。この五年間のふだん着のまま晴れの集会に参加したのだ。だが、まっすぐに胸を張ってたたかいぬいた者だけがもつ、満足感と誇りに、妻たちの顔は輝いていた。

小林弁護士が関扇闘争の特徴を語った。

「第一に、関扇労働者が直接の〝使用者〟でなく、親会社である、大阪アサノ、日本セメントなどの大独占を、主要な敵として明確に位置づけてたたかい、勝利を得たことです。日本のほとんどすべての中小企業が資本、金融、取引、人事などの点で独占資本・銀行・取引先などに支配されている実態からみて、関扇の労働者が〝親会社〟を主要な敵としてたたかい、勝利したことは労働者階級の共通の大切な経験だと思います……（中略）。第二に、関扇労働者が親会社とたたかう、新しい道を切り開いたことです。その出発点は、職場を基礎にして、地域、産別の仲間の団結に依拠しつつ、強大な敵を包囲するたたかいの原則を瞳のように大切にした点でした」また敵の最高裁上告に対しなおたたかいつづける刑事事件担当の井関弁護士が続けた。「職場を占拠し、地域、産別の労働者の力に依拠して、分裂・残業ストップ・クビキリ・

刑事弾圧・破産など、会社・警察・裁判所と資本・国家権力の一体になった攻撃に対し、柔軟で、断固としたたたかいを展開してきたことも重要です。この権力の弾圧から学び、生活保護獲得闘争を軸に、憲法に保証された権利を武器として、権力から闘争資金を奪ってたたかうたたかいの道も三〇人で切り開いたのです。さらに、三〇人と家族の団結の要となった完全プール制の確立も、今後の争議団のたたかいに重要な方向をさし示したといえます。これらのことを、一つひとつ可能にしていった、寺沢委員長を中心とする、関扇労働者の民主的討議と実践の作風も特筆に値します……」

構成劇〝関扇の野郎ども〟

この日の圧巻は第二部の三〇人の男たちの紹介だった。たたかいの中で結ばれた寺やん夫人の仲間が劇団「二月」の団員だった。関扇のたたかいの紹介を構成劇風にするために、ぜひ、手伝わせて欲しいという熱心な申し入れがあった。

まず、最初のグループが舞台によったところから、朗読ははじまった。

「五年前の私たちは周囲のどこにでもみられる〝いいお父ちゃん〟であり、〝よき青年〟でした……」

「ほんとは余り〝いいお父ちゃん〟でもなかったなあ、その辺にころがってるのとは違いないんやが……いい組合員でもなかったし、種やんほどではなくてもみんな少しずつ、ゴグドーや

ったんや……」と誰かがつぶやいた。
「……一カ月二〇〇時間という殺人的な労働条件をおしつけてきました。自律神経失調症で倒れる者、ポックリ病で死亡する者など事故者が相つぎ……」
そや、そや、それは、ほんまや、ひどいもんやった……男たちは〝憎しみのるつぼ〟のハミングを背景につっ立っているだけで、芝居の主人公になったような気持でジーンとしてきた。
坂井、上村、阿部、三人とも、第二組合から敢然と第一組合に帰って四年間みんなといっしょにたたかいつづけた。ボスに酒は飲まされても、第二組合は男のいくとこじゃないと踏みとどまった。三宅に相ちゃん……紙谷には〝どうなるの？〟〝もうやめて……〟と母と妻にせめられて、答えられず、ただ黙ってテレビをみ、うるさい！　とどなる毎日が続いた……誰一人、悩まなかったものはいない、苦しまなかったものはいない。ただ、夢中で寺やんを頼り、種やんに笑わせられて、ただ〝アサノ、アサノ〟といいつづけて、今日までたたかってきた……みんな泣いているようだ。頬に光る涙の粒……。
「団結で、御飯食べられへんのやで、あんた一人ぬけたかて、団結の好きな人はまだ他に、ようけ残ってはるやないの」
「生活保護て、あのカタワや年寄りがもらうあれ？　本気でそんなこと思うてるの？　そんな立派な身体もってて、何で、そなていさいの悪いもんもらえるの？……」
妻たちも涙がつきあげ、胸が熱くなった。聞いているうちに、芝居か現実か分からなくなって

しまったのだ。つらかった……寂しかった……悲しかった……何度、お父ちゃんと子どもとだけで、何処か遠い所へ行って暮らしたいと考えたことか……自分たちの小さな幸せが欲しくて……でも、あの人は泣いて、私を説得した。〝労働者に逃げ道はない。逃げれば逃げるほど、ゼニは安く、権利はなくなるんや！　頑張ろう、みんなといっしょにかたまるんや……〟
お父ちゃんと二人、手をとりあって、一晩泣き明かしたこともあった……。
「苦しい日々のなかで、夫を助け、息子を支え、兄弟を励まして、家族も立ち上がり、ともにたたかいました。……労働運動史にその名をとどめるであろう、勇敢でねばり強い関扇のたたかいに、その生涯の最後の炎を燃やし、亡くなられた仲間たち……今この勝利をともに手をとり合い、喜び合うことのできない父、母、兄弟たち……」
集会の成功と進行ばかり気にしていた、寺やんの胸におふくろのまぼろしがよみがえってきた。
「〝働きつづけて、死ぬまで〟〝生活保護〟の医療券をもらうのがいやさに、医者にいかなかったおふくろよ……だが、みてくれ、今日の俺たちを……いつかこの俺たちの力で、きっとおふくろの夢みた〝ぎょうざ屋〟の店をつくろう！　自由で、年寄りがのびのびと手足をのばし、好きなだけ働くことのできる俺たち労働者の世界をつくってやる！　おふくろ、どこかからみててくれ、俺は今、チビの時、なぜ貧乏に生んだと、おふくろを困らせた言葉を撤回する。おふくろ！　俺は誇りに思う、労働者の息子に生んでくれたことを！　関扇労働者の一人に育ててくれたことを……おふくろ、この舞台の真中に、みんなのスクラムの真中に、立たせてや

りたかった……」

舞台ではたたかいの中で結ばれた八組と二二人の子どもたちが紹介された。

「私たちは私たちの二人の子どもに、財産よりももっと素晴しい贈り物をしようと約束しました。それは――搾取のない社会、働く者が安心して働き、人間が人間らしく生きていける世の中です。私は彼と結婚します！」

モデルの毛利夫妻がさっそく結実した子どもを抱きしめ、照れている。それにしても毛利夫人はベルマン化粧品、秀やん夫人は美和商事、坂井夫人は田辺被服、寺やん夫人は日本ハム、柴田夫人は盲学校と……ほとんどみんな争議団出身で、おまけに、化粧品にハムに洋服となると、ひととおり生活必需品がそろいそうな感じである。いや、みんな飲まず、食わずの毎日でも、ちゃんと見つけるものは見つけて……しかも、貧乏の中で明るく強く美しく、生きることを知っている素晴しい娘たちをしっかりとつかんだ。まことに結構なことである。相ちゃんだけがまだ、お嫁さんのオルグができないのが気になる。インターの歌声が高まる中を全員が舞台にのぼる。

「五年をこえる関扇のたたかいは、一応勝利しました。三〇名の仲間はこれからはみんな、新しい職場へ散っていくのです。別れる時がきたのです。しかし、関扇でともされたたたかいの炎は、これからも私たちの胸に、赤々と燃え続けることでしょう。いえ、もっと赤く、もっと烈しく燃やしつづけ、永久にたやしてはならないのです。大阪中に関扇の灯を、いや、日本のすみずみまで関扇労働者の不屈の闘魂を伝え、たたかいの輪を拡げましょう。頑張りましょう。

われわれ働く者全体の勝利の日まで」

インターの高まりとともに、三〇人のスクラムがゆれ、会場の歌声に答えていた。

新たなたたかいの海原に

三〇人は一一月一一日を出発点に、ふたたび新たな職場を探し、戦列を組み直すための生活に入った。二カ月間はアサノからとった金でやれるから、その間に職場を見つけること。アサノは就職を斡旋するというが、うっかり乗るわけにもいかん。みんなバラバラにして、動きのとれん職場に追いこむかもしれない。

みんな、あわてず生コン運輸関係の未組織の職場か、全自連関係の職場に入ろうとしている。だが、関西のトラック業界では、あまりにも〝関扇〟の勇名はとどろきすぎて、なかなか思うようにもぐりこむことはむずかしい。

労働者たちは、何とか早く、新しい生活とたたかいに慣れなければと思いながら、やっぱり、古巣がなつかしくなる。何かにカコつけて仲間と話し合い、一八五六日の生活とたたかいのトリデであり、第一組合の旗がひるがえり続ける職場をそっと見にいった。主のいなくなった職場の壁には、まだ、はがしきれなかったビラの文字と、鳩の糞が白くこびりついていた。

一度だけでいい、みんなで、お互いにご苦労さんをいう、ゴーセイな温泉旅行をしよう……津守の仲間たちの間で、たちまち話が決まった。阿蘇だ、雲仙だと騒いだあげく、別府行が決まっ

た。〝一生に一度だから、行きは瀬戸内海を船の一等で、別府の温泉の上等な部屋に一泊して、帰りは飛行機で〟と小学校の修学旅行なみのニギヤカさだった。

いやあ、大阪港の弁天埠頭に勢揃いした津守一六人衆は驚いた。誰も、一目見たときは、場所と相手を間違えたかと思ったという。

誰もかれも、新品の背広に、ピカピカのはきおろしの靴、まっさらのYシャツに初めてのネクタイ……晴れの旅立ちのために、解決金の一部をさいて、かあちゃんが見立ててくれたものだろう。よくよくみると、どうもみんな井池のおろし屋あたりで叩いて買ってきた安物の行列らしい。

何でもよろしい！　一八五六日着たきりの作業衣とジャンバーに比べれば、衛生的であり、文化的にみえる。みんな、照れて、お互いからかい合いながら、嬉々として船にのりこんだ。

一室に四人ずつの一等船室に分散したが、やっぱり、落着かない。職場暮らしのクセがでて、すぐ集まっては飲んで食って、話はつきない。

「あまり、豪勢にやったら、かあちゃんにどつかれへんやろか……」

「かめへん、かめへん、帰ったら、かあちゃん子どもにも慰労会やってやることになっとるんや」

「ケチケチいわんとき！　男と男の友情や！」

「さっきのメシ、ごっつうまかったなあ！　あれ、なんちゅうもんや……」

「シーッ！　育ちが分かるがなあ」

「アホ！　見たら分かるわい！　育ちがええのは、まあ、俺くらいのもんや！」

「こらっ！　種！　お前一人カッコつけて…」

まず、騒々しい夜だった。瀬戸内海航路はじまって以来の騒音ではなかったかと思う。

やがて、夜半、種やんは部屋に帰って寝ようとして、相ちゃんのいないのに気づいた。あいつ、酔うとクセが悪くなりよるから、海でも落ちたら大変やと種やんは探しに外へでた。二月末の深夜の海風は冷たく、人影はもうデッキに少なかった。種やんは上甲板にあがって、柱の蔭に、じっと立っている相ちゃんをみつけた。

「相ちゃん、何してるんや？」

そばへ近づいて、種やんは驚いた。相ちゃんは泣いていた。両頬にボロボロ涙が伝わっていた。よくみると真夜中だというのに慣れない背広に、ネクタイまでしめて、沖にむかって、直立不動で泣いているのである。種やんは一瞬、〝自殺するつもりか〟と思ったという。

「種やん……あの島、大三島いうねん……」

「島がどないぞしたか？」

「わいの死んだ親父の生まれ故郷やねん……わいの六つの時、親父は死んだんや……そやけど、親父はわいの親父なんや……」

「……死んだ、親父に闘争勝利の報告してるんか……」

相ちゃんはコックリうなずいた。種やんは、眼玉の奥がキュンと痛くなって涙がこぼれそうに

なった。

「種やん、わいはなあ、なんにも、とりえのない男やけど……一生懸命やったんや……人に話もでけんしょうむない男やったけど寺やんについていったんや……ただ、それだけや……」

「相ちゃん、分かる分かるがな……相ちゃんようやった。ここ一発の時には、相ちゃん、しゃべるようになったでえ。後は女や、女の前でしゃべるんや！　嫁さんみつけるのもオルグや！いい嫁さんみつけなあかん！　嫁はんも口やで、手を先にだしたらあかんで！」

相ちゃんは泣き笑いの顔でいった。「種やんみたいに ようしゃべれる おもろい男にわいもいっぺんなってみたいと思う……そやけどあかん……わいはわいや……」

相ちゃんはそういって、ネクタイを直し、もう一度遠ざかっていく、大三島をみつめていた。

一六人の男の晴姿をのせて船は行く。

一八五六日の苦闘の末に訪れた。一日一夜の男の船路が無事であってほしい。

一番おとなしいはずの相ちゃんが、わいはしょうむない男やけど、関扇のたたかいで知ったド根性は忘れんときっぱりいう。

たたかいに終わりはない。日本全国の権力、大独占企業に対する七〇年代の労働者のたたかいは、今、その第一歩を踏みだしたに過ぎない。三井三池、日炭高松、日本ロールと六〇年代の労働者のたたかいの成果に、全自運関扇運輸支部のたたかいは新しい一頁を書き加えた。この灯を燃やしつづけ、より広範で強大な、独占資本と権力へのたたかいを発展させる任務が、七〇年代、

日本労働者階級の任務となるであろう。

《たたかいの記録》

どぶ川学級 須長茂夫著＝390円	「ドレイ工場」全金日本ロールの争議のなかから生まれ、闘う労働者に支えられ育っていった子どもたちと労働者の教育実践の記録。
教師の戦争体験の記録 岩手県一関国民教育研究会編＝390円	満州事変以来15年の戦争の中で、教え子を戦場に送り、自らも戦場に赴いた教師たちが、生々しい体験を綴り、全教師・全国民に問う
東京争議団物語 東京地方争議団共闘会議編＝350円	倒産・首切り・合理化・分裂攻撃の集中砲火のなかでたたかいつづける労働者たち—自らが書きあげた感動の記録《ドレイ工場》原作
関西争議団物語 労働旬報社編集部編＝350円	長期争議に耐え、職場・地域に労働者のトリデを築き、生活と権利をまもってたたかう“なにわ労働者”のもえあがるたたかいの記録。
不屈の手紙 国民救援会千代田総支部編＝390円	政治活動の自由と民主主義のために民主勢力の前進を友人に訴えた私信に加えられた弾圧を職場・救援会の仲間とともにたたかった。
夜明けがくる 新潟県職員労働組合編＝390円	あいつぐ医療事故のなかで、よい看護とはなにかを追求し、みずからの行動を通して《二人夜勤・夜勤制限》をかちとった感動の記録
立ちあがる沖縄 波照間　洋著＝390円	本土の安保闘争に匹敵するといわれ祖国復帰運動の質と量を転換させ主席公選の統一戦線結成の原動力となった教公二法闘争の記録。

今崎暁巳（いまざきあけみ）

1930年　島根県に生まれる
1960年　早稲田大学仏文科を経て同大学院労働法専攻
現　在　シナリオ作家（テレビ「判決」など多数）
著　書　『コブだらけの勝利』——闘う青年労働者（労働旬報社）
　　『職場の青春』——闘う信越放送労働者（労働旬報社）

検印省略

めしと団結——たたかう関弱運輸労働者	
発　行	1970年6月15日第1刷発行
著　者	今崎暁巳
発行者	木槍哲夫
発行所	労働旬報社 東京都港区芝西久保巴町32 電話（434）3681 振替東京180374
印刷所	東銀座印刷出版株式会社

定価　460円

═══定評ある告発の書／黒書シリーズ═══

ベトナム黒書

日本アジアアフリカ連帯委員会編／協力＝B・ラッセル
平野義太郎ほか／定価 260円

歴史の告発書

ベトナムにおけるアメリカの戦争犯罪調査日本委員会編
協力＝沼田稲次郎・宗像誠也・平野義太郎／定価 300円

日本の黒書

日本平和委員会編／協力＝沼田稲次郎・塩田庄兵衛・平野義太郎・岡倉古志郎／定価 350円

沖縄黒書

沖縄・小笠原返還同盟編／協力＝木下順二・瀬長亀次郎
高橋磌一・福島要一／定価 350円

CIA黒書

D・W・W・コンデ著／岡倉古志郎・岩崎昶共訳／定価 380円

マスコミ黒書

日本ジャーナリスト会議編／協力＝古在由重・城戸又一
塩田庄兵衛／定価 480円

教育黒書

宗像誠也・野村平爾・宮之原貞光編／定価 680円